獨逸語大講座

第三卷

關口存男監修

Der Große Kursus

der

Deutschen Sprache

Band III.

Gaikokugo Kenkyusha : Tokio

監修者より

▽文法も愈々接續法その他の高尚な部門にさし掛かりました。これから愈々本當の御勉强を願ひます。文法は第四卷を以て完結します。愈々獨逸語らしいテキストを用ひるのは第五卷と第六卷とで、その時までになるべく數多くの單語を覺えて頂かなくてはなりません。第四卷からは多少辭典が要るかも知れませんから、まだお需めのないかたは必ずお備へ下さい。

▽テキストには論文を使つてはどうかとの御意見が大ぶ多いやうで、これは私も大贊成です。けれども、やつと初步の文法を終つたばかりの所へ直ぐ學術論文はどうでせうか？私が勤めてゐる大學の調子で行けば、此の講座はまづ豫科一年終了ぐらゐな程度にして置いてはどうかと思つてゐます。二年になると、私は必ず論文を使ふことにしてゐます。けれども、一年で論文をやると、どうも知らぬ單語の數にへこたれて、ずゐぶんな勉强家でも、かなり無駄な努力をしてしまふやうです。――けれども論文を主にすると云ふ主義には大贊成です。

▽それから、これは私だけの意見ですが、本當は作文を主にした講座がなければいけないわけですね。若干の典型的な文章形態を完全に把捉するために、色々と斯う理屈を云ひながら、同じ熟語や形式を、その重要さに比例して萬遍なく會得させる、と云つたやうな式なのが。――實は此の講座の第五卷第六卷でそれをやらうかとも思つたのですが、今までの講座や對譯書があんまり不親切なのを知つてゐるので、初步の文法を會得した上で、扨てすぐテキストとしては何を讀むかと云ふ問題が焦眉の急ですから、むしろやさしいテキストをすぐ文法に結びつけて、「ドイツ人の書いたものが隅から隅までわかつた！」といふ滿足を味はつて頂いた方が初等講座の目的が達せられるだらうと信じたわけです。つまり文法と讀本とで、四卷目までに馬鹿の一つ覺えをして、それから直ちに第五卷第六卷でドイツ文學の眞唯中へ飛び込

んで、「なるほどわかる」といふ事になれば好いが……といふ理想です。その代り第五卷以後は監修者自身が詳しく註をつけます。——

そんな譯で、作文の方は全然のけました。作文の事はまた改めて考へませう。御意見を聞かせて下さい。

▽本卷末には、一寸脱線的なゴシップを挿入しました。貴重な頁をゴシップに割くのは甚だすまないと思ひましたが、ちよつと此の講座の主義に關係があるので、まあ一時間お休みになつたと思つて下されば宜しいのです。

▽正誤表をつけて行きますから御注意下さい。それから校正の誤りは、なるべくお氣づきの序に、本講座を援助すると思つて、御注意下さい。大へん助かります。私も初校は必ず眼を通し、後は私が最も信頼する人におねがひしてありますから、さう大して無いつもりですが、一冊のうちに五個所や六個所の見落としはあるかも知れません。——殊にドイツ語の綴は、これまでのものは誤だらけなので、本講座では特別に注意してゐます。誤があるとすれば、私自身の不注意の誤が時々あるやうです。追々正して行きます。

▽誤植その他の誤について特に御親切な通信をして下さつた佐々木不知軒氏及び其の他もう一人の無名氏に厚く感謝致します。かうした praktisch 且つ sachlich な御援助は他の如何なる援助よりも有難く感ぜられます。(關口)

第二十六講

接續法とは何ぞや?

西洋人、即ち印歐語系統の言語 (indogermanische Sprachen) を語りつゝある諸民族の仲間で、一つの國の人間が他の國の言語を學ばうとする時に、改めて説明を聽く必要のない事柄は隨分と澤山ありますが、その中でも殊に我々東洋人種が羨ましく思ふのは、此の接續法と云ふものが、西洋のどの國語にもあると云ふ事です。その代り、一度呑み込んで了ふと、後は何處の國語をやらうと、「あゝ、またあいつか」と云つた樣な譯で、非常に樂になります。

199. **「法」とは何ぞや?** 法といふのは、直接法、接續法、命令法等の法と云ふ分類形式ですが、それは要するに形といふことで、直接形、接續形なぞと云つたつて差支へないのですが、習慣として、普通「法」といふ文句を使つてゐます。原語は Modus [*pl.* Modi] ですから、本當は「樣式」とでも謂つた方が好かつたのかも知れません。即ち、ドイツ語に於ては、直接法、接續法、命令法、不定法、時とするとそれに約束法といふのを加へて、その五つを法と名附けてゐます。

直接法といふのは、今までに紹介して來た定形、即ち普通の人稱變化そのものを指すのですが、接續法は、人稱變化がすべて違つて來ます。すべて違つて來ますは少し大袈裟ですが、とにかく字によると直接法とは非常な懸隔が生じます。まづ試みに助動詞の sein, haben の直接法と、第一式の接續法といふのを比較して見ませう。これは接續法の意味を説明する時に例に使ひますからよく覺えてしまつて下さい。

直接法		接續法(第一式)	
ich bin	wir sind	ich sei	wir seien
du bist	ihr seid	du seiest	ihr seiet
er ist	sie sind	er sei	sie seien

ich habe	wir haben	ich habe	wir haben
du hast	ihr habt	du habest	ihr habet
er hat	sie haben	er habe	sie haben

要するに接續法と云ふのは、全然別種な變化です。變化の形式は、後に述べる如く非常に簡單で、直接法の場合に於けるが如き例外はありませんが、用法が非常に呑み込み難いものですから、これから用法を詳しく說明しませう。

200. **三つの名稱**
接續法—間接法—可能法

接續法の事を、或ひは間接法、或ひは可能法と云ひますが、接續法といふのが最も普通なやうに思はれますから、それを採用して置きます。然しながら、それらの名稱は各々事柄の一側を捉へてゐるので、何故さう云ふ名を附けるかといふ事を說明すると、それが同時に事柄の說明になります。

「彼は、草疲れたと云つてゐる。」といふのを獨譯すると、まづ直接法で表現する方法があります。

Er sagt: „ich bin müde."

此の ich bin müde といふ引用句は、その儘の形で本人が云つたので、これを直接引用と云ひます。つまり蓄音機に吹き込んだのを聽くやうなものです。ところが、同じ意味の事を間接引用にする事もできます。

Er sagt, er sei müde.

即ち、「彼は彼が疲れたと云ふ」となります。此の際 er sei müde は、彼なる人間が口にした通りの文句ではなく、彼を er と指すことに依つて既に筆者自身の解釋が加はつてゐます。この形式を間接話法と云ひ、間接話法の文章には間接法の形の動詞定形を用ひるのです。

接續法の事を一名間接法と云ふのは斯う云ふ一面を捉へたのです。主文章の方には必ず「……と云ふ」「と主張する」「と信ずる」「を疑ふ」と云つたやうな、主觀的責任行爲を表はす詞があり、それに從屬する副文章の定形動詞が間接法になるのです。時にはまた、主文章が無くて、間接法の副文章だけの事がありますが、その際にもやはり、云ふとか考へるとか信ずるとか云つた樣な主文章を裏に据ゑて考へることが出來ます。

Er sei müde. 彼は疲勞せりと。

丁度漢文口調の「……せりと」と云ふ際の「と」が接續法の意味です。それだけの文章では落ちついてゐない。たとへ文字の上では主文章はなくても、考への上で補足する事が出來る。省かれてゐると云つては言ひ過ぎかも知れないが、暗々裡に含まれて居ると云へば好いでせう。直接法の er ist が「彼は……なり」であるとすれば、間接法の er sei は、「彼は……なりと」です。此の「と」によつて表現されてゐる、必ず他の主文章に接續されると云ふ特徵、此の點を捉へて「接續法」と云ふのです。

扨て第三の名稱、可能法と云ふのは、次のやうな場合に最もよく現はれる特徵を捉へた命名です。

Ich will, daß er **komme.**
(私は、彼が來らんことを欲する)

Ich setze voraus, er **sei** ein Deutscher.
(私は彼が假に獨逸人だと假定する)

Er **sei** ein Russe oder ein Franzose.
(彼が露西亞人であらうと、佛蘭西人であらうと)

上例中太字の定形は、すべて接續法ですが、それらは凡て、「欲する」とか「假定する」と云つたやうな主文章が明示されてゐるか暗々裡に想定されてゐるかで、とにかく慾望、假定の對象であつて、決して事實さうだと云ふ現實性を帶びた宣言ではありません。それは人間の腦裡にのみある事實として述べられてゐます。實際はどうだか知らないが、とにかく「云ひ方」がさうです。單に「さう云ふ事が可能である」といふ云ひ方をする。それ故可能法と云ふ名稱があるのです。

可能法と云ふ名は、あまりに內容を尙び過ぎたために片手落ちになつた感がないでもありません。それにまだ一般的に用ひられるには至らず、名稱を理解するのもかなり初學者には困難ですから、此の方は用ひない事にします。

201. **結論**

以上、目下用ひられてゐる三種の名稱を說明してしまふと、それで接續法の主要なる性質と其の用法は略明瞭になりました。即ち、接續法の形を取つた定形動詞を含む文章は、何等か

の意味に於て他の文章に從屬してゐる。これが第一の特徴です。その次に、その文章は、必ず間接に引用した文章であつて、それを獨立したものとして其の儘を本氣に取ると事實がすつかり違つて來る。即ち此の點に於て直接法と眞向に反對である所の、所謂間接話法に用ひられると云ふ事これが第二の特徴です。次には、第三の名稱、可能法なる名によつて示されてゐる特徴で、接續法で云ひ表はされた文章の內容は、必らず人間の腦裡にのみ存する「主張」「信仰」「想像」「假定」「願望」「危惧」「邪推」といつたやうなものばかりで、事實さうだと聲明するのではなく、「或ひは可能ならん」と云つたやうな根據しか持たない架空的內容であるから、それで接續法の事を一名可能法と云ふわけです。

日本語なぞでは、こんな厄介な樣式が無くても結構事足りてゐるのですから、必ずしも必要なものではないかも知れませんが、「無くても好い」といふ事は必ずしも「無い方が好い」といふ事にはなりません。それはヨーロツパ諸國の國語をどれか一つでも眞に自分のものにした人が凡て知つてゐる事實です。

けれども、論理的に分解して行くと、印歐語系の接續法なるものには、その中心がしつかりしない、つまり本質がはつきりしない傾向があつて、ラテン系統にしろギリシヤ系統にしろ、折角接續法があるのに、その代りに不定法を用ひたり、約束法なぞと云ふものが特別に出來て來たり、未來時稱がはびこつたりして、國語によつて色んな複雜な事になつてしまつてゐます。つまり接續法なるものは、はつきりとした傾向を持ち得るにしては餘りに用法が多岐に亘り過ぎてゐるのです。だから Esperanto の創始者 Zamenhof 氏が、その萬國語から、元來の意味に於ける接續法を排して、その場合を命令法、不定法、及び約束法によつて云ひ表はすやうに組織したのは、兎角の批評はあれ、大局から考へた上では、考へ得る限り最も機宜を得た處置であらうと思ひます。ドイツ語の接續法なぞは、命令法、不定法、約束法の三つの場合に分けて、エス語では充分云ひ表はす事が出來、それでドイツ語通りの細かい味がすつかり出るのです。

唯今申し上げた通り、接續法の用途は、細かく分類するとなると多岐多樣で、初學者は、遂にその本質を捉み得ないと云ふ事になりますから、私はやはり例の馬鹿の一つ覺えといふ主義を尊重して、その最も大まかな特徴を三つ述べて、それだけを、その代りはつきりと覺えて頂く事にしました。

第二十七講

接續法の人稱變化

接續法は、用法は仲々むつかしいが、形の方は非常に樂です。直接法の人稱變化には、或ひは er, du の所で變音になるものがあつたり、或ひは助動詞のやうに、普通の變化とは全然相違してゐたり、また sein の現在變化の如く、人稱によつて、まるで別字のやうに思はれるのがあつたりしますが、接續法の變化は、一定の語尾を附けるだけで、例外は先づ一字だけしかありません。（例外と云ふのは、既に前章で紹介した sein の變化です。）

202. 接續法に二種類ある事　接續法には二種あります。前の章で sein と haben との接續法を示した時に、第一式といふ名稱を用ひたのは其の理由からです。

たとへば sein の接續法は二つあります。第一人稱單數を例に取ると、ich sei が第一式で、ich wäre が第二式です。

第一式と第二式とはどういふ風に相違してゐるかと云ふに、まづ形式の方から云ふと、第一式は、不定法の語幹を基礎として人稱語尾を附けますが、第二式は過去の語幹を變へて造ります。sein の場合で云ふと、次に sein の三要形と、二樣の接續法との系統關係を圖示しませう。

不定法	過去	過去分詞
sei-n	war	gewesen
↓	↓	
第一式接續法	第二式接續法	
ich sei	ich wäre	

次に、用法と意味との上でどんな區別があるかと云ふに、これは仲々複雜で、一寸簡單に述べる譯には行きませんが、極く全局に忠實なる特徴附けをするとすれば、第一式の方は、極く客觀的に事實を傳へんとする時に用ひ、其處に何等語り手の意見が加はつてゐないと云つた樣な印象を與へますが、

第二式の方は、「そんな事を云ふけれども、實際は大いに疑はしいのだ」と云つたやうな、主觀的な色彩が濃厚な時に使はれます。

たとへば、「彼は私が嘘吐きだと云つてゐる」と云ふ文章を作るとします。まづ第一式の ich sei を用ひて

Er sagt, ich sei ein Lügner.

と云へば、私が嘘吐きである、これが彼の主張である、と云つて、其處に何等自己の主觀を混へず、單に彼なる人間の言を引用して、紹介の勞を執つただけの事になります。筆者の態度は、少しも眞僞の判斷を加へてゐない。全然中立です。ところが、第二式の ich wäre を用ひて

Er sagt, ich wäre ein Lügner.

と云ふと、此の wäre と云ふ形が、何となく或種の色彩を備へてゐるのです。理屈を云ふとすれば、其處には筆者の感情が混じ込んでゐて、何となく疑惑に傾いてゐるやうな所が仄見えます。邦譯するとすれば、「彼奴は、私の事を嘘吐きだなんて云つてゐる」とでもすれば好いでせう。日本語の「なんて」と云ふ俗語が略此の第二式接續法の色彩を表現してゐます。かう云へば大體第二式接續法の傾向、色彩がわかるでせう。

今まで申し上げたのはほんの出發點で、この微妙な相違から出發すると、第一式、第二式の用法上の區別が大體はつきりして來ます。

203. **第一式〔所謂現在形〕と第二式〔所謂過去形〕との間には時稱上の區別なし。共に現在なり。**

第一式は、不定法から作ると云ふ點で直接法の現在と同じですから、普通は現在形の接續法と稱されてゐます。また第二式は、直接法の過去から作られるが故に、過去形の接續法、または、時には（亂暴にも）接續法の過去と呼ばれてゐます。これらの名稱は、初學者をまどはすものであつて、また事實にも副はないものですから、なる可く止してしまつた方が好いのです。過去形の接續法なぞと云ふと、たとへどんなに「形」といふ概念を強調しても、やはり何だか過去のやうな氣がします。現在形も過去形も、要するに意味は

現在なんですから、兩方とも接續法の現在と呼び、前述の如き意味上の相違で分れるのですから、むしろ第一第二と番號で呼んで置いた方が誤解が起らなくて好いでせう。わざわざ學校文法の名稱を無視したのはさう云ふ譯からです。

204. **第一式接續法の人稱變化**　用法の詳細は、また章を改めて論ずる事にして、人稱變化の方を先に述べませう。さうすると、用法を說明する時に、どしどしと實例を用ひる事が出來ますから。

第一式は、前述の通り、不定法の語幹を規準にして次の如く人稱語尾を附けます。線で略したところが不定法の語幹で、括弧をした (e) は、特に接續法であると云ふ點に念を入れようとする際に好んで加へられる、いはゆる Sproßvokal〔ひこばえの母音、前出〕です。さう云ふものが無いと、あんまり直接法に似すぎて文法形態が曖昧になるからです。けれどもさう云ふ Sproßvokal を餘り入れすぎると、文章が重々しく、古めかしくなつてしまひますから、文語體の文章ででも無い限りはあんまり用ひては不可ません。

接續法第一式の人稱變化

不定法 { —— en / —— n

ich	—— e	wir	—— en
du	—— (e)ſt	ihr	—— (e)t
er	—— e	ſie	—— en

大して直接法と違はないやうで、ただ er のところが ich の所と同じく -e の語尾を取るだけが唯一の相違のやうに思はれますが、前に述べた如く、「直接法に於けるが如き不規則はない」と云ふ事が、大抵の場合非常に直接法と相違の生ずる理由になるのです。

これだけ說明して來れば、頭の好い方はもう解つた解つたと思はれるでせうが、頭の好くない人々のために、次に數種の場合に現はれる直接法接續法間の相違を表示しませう。先づ普通の規則的に人稱變化する動詞にあつては er の所だけが唯一の相違である事を銘記して下さい。（括弧の中が接續法）

不定法　strafen（罰する）

ich	strafe	[strafe]	wir	strafen	[strafen]
du	strafst	[strafst]	ihr	straft	[traft]
er	straft	[strafe]	sie	strafen	[strafen]

第三人稱の單數でのみ相違が生ずると云ふ點は英語その儘です。英語も、直接法は單數三人稱で -s の語尾を採るが、接續法は採りません。

次に、三要形の不規則なものは大部分現在人稱變化の du と er の所にも不規則があるといふ事は御存じでせう。すると、さう云ふ動詞の場合には、二個所に相違が起るわけです。

不定法　sprechen（話す）

ich	spreche	[spreche]	wir	sprechen	[sprechen]
du	sprichst	[sprechst]	ihr	sprecht	[sprecht]
er	spricht	[spreche]	sie	sprechen	[sprechen]

助動詞 wollen, sollen, dürfen, können, mögen, werden, sein 等になると、非常な差が生じて來ます。殊に sein となると全部ちがふ事になります。（それは前に表示しておきました。）

不定法　wollen（欲する）

ich	will	[wolle]	wir	wollen	[wollen]
du	willst	[wollest]	ihr	wollt	[wollet]
er	will	[wolle]	sie	wollen	[wollen]

sein だけは人稱語尾に例外があると云ひましたが、それは、ich と du との所で -e の語尾が省略される事です。（seie ではなく sei）

205. **第二式接續法の人稱變化**　第二式接續法は、その語幹を、直接法の過去から出立して造ります。だから一名を過去形接續法と謂ひます。

その構成法は、次の二種に分れます。

(1) 三要形の規則的なものは、第二式接續法は、過去の人稱變化と全然同形です。（たとへば warten（待つ）kaufen（買ふ）等。）

三要形の規則的なるものの第二式接續法			
kaufen の三要形 不定法 kaufen,　過去 kaufte,　過去分詞 gekauft.			
ich	kaufte	wir	kauften
du	kauftest	ihr	kauftet
er	kaufte	sie	kauften

(2) 三要形の不規則なるもの、例へば sprechen, sprach, gesprochen（話す）wissen, wußte, gewußt（知る）等は、その過去形に多少の變更を加へた上で人稱語尾をつけます。その變更と云ふのは、もし其の語幹に a, o, u の母音があれば（au は偶然有りません）それを變音にし、語尾に -e が無ければ -e を附けます。人稱語尾は直接法過去のままです。

三要形不規則なる者の第二式接續法（第一例）			
sprechen の三要形 不定法 sprechen,　過去 sprach,　過去分詞 gesprochen.			
ich	spräche	wir	sprächen
du	spräche st	ihr	sprächet
er	spräche	sie	sprächen

wissen, wußte, gewußt（知る）の場合には、直接法過去が wußte で、既に -e の語尾が附いてゐるから、變音にして wüßte とするだけで好い譯です。

三要形不規則なるものの第二式接續法 (第二例)			
wissen の三要形			
wissen,	**wußte,**		gewußt
ich	wüßte	wir	wüßten
du	wüßteſt	ihr	wüßtet
er	wüßte	ſie	wüßten

ところで、bleiben, blieb, geblieben (とどまる) となると、blieb ですから、-e だけ附けて bliebe を第二式接續法にします。もう大抵澤山でせうが念のために表を作ります。

三要形不規則なるものの第二式接續法 (第二例)			
bleiben の三要形			
bleiben,	**blieb,**		geblieben
ich	bliebe	wir	blieben
du	bliebeſt	ihr	bliebet
er	bliebe	ſie	blieben

206. **第二式接續法の異例** 澤山はありませんが、第二式には多少上に述べた規則から外れるものがあります。それは凡て三要形の不規則なものばかりですから、第二卷の卷末に附した不規則動詞の要形表を御覽になればわかります。ここでは單に念のために表を掲げて置くにとゞめます。(不規則とは云ひながら、おのづと或種の法則が支配してゐる事は、表を見ればわかります。)

不定法		過去	第二式接續法
1. bedingen	契約する	bedang	bedünge
befehlen	命ずる	befahl	beföhle

beginnen	始める	begann	begönne*
berſten	裂ける	barſt	börſte*
beſinnen	[再] 起ひ出す	beſann	beſönne*
brennen	燃える	brannte	brennte
dingen	傭ふ	dang	dingte
empfehlen	推薦する	empfahl	empföhle
gelten	價する	galt	gölte*
gewinnen	得る	gewann	gewönne*
helfen	助ける	half	hülfe
kennen	知る	kannte	kennte
nennen	命名する	nannte	nennte
rennen	走る	rannte	rennte
rinnen	漏る	rann	rönne*
ſchelten	罵る	ſchalt	ſchölte*
ſchwimmen	泳ぐ	ſchwamm	ſchwömme*
ſinnen	念ふ	ſann	ſönne*
ſpinnen	紡ぐ	ſpann	ſpönne*
ſtehen	立つ	ſtand	ſtünde*
ſtehlen	盜む	ſtahl	ſtöhle*
ſterben	死ぬ	ſtarb	ſtürbe*
verbergen	隱す	verbarg	verbürge*
verderben	毀す	verdarb	verdürbe
werben	募る	warb	würbe
werfen	投げる	warf	würfe

備考——*印は各々正規の形、即 ä の形もある事を示す。

207. **英語との形態論的比較研究** 丁度好い例が出て來ましたから、此の機を利用して、また二三英語との比較研究をして置きませう。

英語では、何故そんな事になるのか、理由も何も知らずに覚えてしまふ事が、ドイツ語を知つてゐると、文法的にはつきりとわかつて來る例が澤山ありますが、次のなんぞも其の一例だらうと思ひます。

英		獨
was	(直接法過去)	war
were	(第二接續法)	wäre

英語では、上に述べたやうな事は、今ではもう跡形もなく湮滅し去つてゐますが、ドイツ語では、變音 [Umlaut] といふ現象があつて、また過去形と接續法との間には、今まで述べて來たやうな關係が支配してゐますから、was と were との間の關係がドイツ語からわかつて來るわけです。

それと同樣に、ドイツ語だけの中では既に不規則な現象となつてゐるものも、古代の獨逸語 [althochdeutsch, 古高獨逸語] 又は、もつと英語に近い gothisch [ゴート語] を研究すると、昔はちやんと或種の規則的現象だつたのだと解る事があります。たとへば語幹が三要形で變る現象、(sprechen, sprach, gesprochen) は、古代の言語から規則的に説明されます。(因に、Umlaut と區別して、e, a, o 等に變る事を Ablaut [轉音] と謂ひます。)

それから、序でに云ふと、英語の was が獨逸語の war と同形であるのも、或種の一般的法則を證明してゐます。印歐語に於ては、梵語、ギリシヤ語、ラテン語、ドイツ系統語等、みんな s は r に通ずるのです。(第一卷「獨逸語と英語との比較」の 9 頁の上方に説明があります)。

試みに wäre と were との人稱變化を比較して見ませう。

[if] I were	[ich wäre]	we were	[wir wären]
thou wert	[du wärest]	ye were	[ihr wäret]
he were	[er wäre]	they were	[sie wären]

208. **接續法の過去**　今まで述べて來たのは、接續法の現在に於ける人稱變化ですが、接續法にも過去が無ければなりません。過去の變化は頗る簡單で、既に第二卷の時稱に關する所 (113) で述べた完了形の構成法通りにやります。ただ sein なり haben なりの接續法を用ひれば好いわけです。〔直接法だと色んな過去樣のものがありましたが、接續法には此の一つだけしかありません。〕

第一式接續法の過去

	haben で造る動詞	sein で造る動詞
S. 1.	ich habe gesprochen	ich sei gekommen
S. 2.	du habest gesprochen	du seist gekommen
S. 3.	er habe gesprochen	er sei gekommen
pl. 1.	wir haben gesprochen	wir seien gekommen
pl. 2.	ihr habet gesprochen	ihr seiet gekommen
pl. 3.	sie haben gesprochen	sie seien gekommen

第二式接續法の過去

	haben で造る動詞	sein で造る動詞
S. 1.	ich hätte gesprochen	ich wäre gekommen
S. 2.	du hättest gesprochen	du wärst gekommen
S. 3.	er hätte gesprochen	er wäre gekommen
pl. 1.	wir hätten gesprochen	wir wären gekommen
pl. 2.	ihr hättet gesprochen	ihr wärt gekommen
pl. 3.	sie hätten gesprochen	sie wären gekommen

hätte, wäre が各々 hatte, war に對する第二式接續法である事は斷はるまでもありますまい。

第二十八講

第一式接續法の用ひ方

既に第二十六講に述べて置いた事を、もう一度念を通しておきます。第一式接續法は、「斯く斯く斯樣であると」いふ其の「と」で表現される語法ですが、第二式の「なぞと」「なんて」とは根本的に相違してゐて、其處には何等言者の批評がましい附加や、疑ひを挿むやうな口吻は混つてゐない。言者の口吻は嚴正中立です。時とするとむしろ強く肯定する。

これから第二十九講に至るまでの間、始終注意して貰ひたいのは、接續法が用ひてある副文章が、如何なる主文章に接續されてゐるか、もしくは、如何なる主文章を假定してゐるかと云ふ事です。何故と云ふに、たとへ其處には何等主文章がなくても、接續法とある以上は必ず他の基礎をなす可き無形の文章に接續されてゐなければならない。接續法の形を採つてゐる動詞の意味を定める時には必らず其の無形の主文章を再建して見ないわけには行かない。さうする事を文法學者は subintelligieren [darunter verstehen] する、または hypothesieren [darunter stellen] すると云ひます。即ち、「紙背に見拔く」「土臺に据ゑて考へる」「言外の意を察する」といふ事です。

此の一事だけは何度繰り返しても繰り返し足りない要點ですが、接續法は必ず何等かの文章に接續される——それが有形の文章だらうと無形の文章だらうと——此の點が接續法の本質であつて、私が簡單に「……と」だと云ふのは、非常に大まかな云ひ方のやうで、決してさうではなく、ドイツ語の接續法は、日本語の「……と」と云ふ接續的助詞が持つ限りの多岐多樣性を悉く具有してゐると思へば大過ないのです。

ところが、その「と」なるものが、詳しく分解して行くと、筆者の肯定の度合によつて略四つに岐れます。

次の四つの中、第一と第二の場合には第一式接續法、第三第四の場合には第二式接續法を用ひるのです。

接續文の四階段
(1) 肯　定.　(意志を加ふ) 我汝に命ず、彼方に向つて去れ「と」
(2) 肯定せず.　(意志を加へず) 彼の曰く、彼女は既に去れり「と」
(3) 否定に傾く.　(判斷が働く) 彼氣遣ふ、我既に去りしには非ずや「と」
(4) 否　定　(事實は全くそれに反す) 我惜しむ、[もし彼生きてありせば] 嘸嬉しかりしならんに「と」

此の四つの階段を明示したのは、唯今述べた、有形無形の主文章に注意して貰ひたいと云ふ意味からで、「命ずる」際は斷然たる肯定、「云ふ」際は肯定にも否定にも非ざる、所謂判斷の中止、嚴正中立、客觀的態度、傍觀的口吻、判斷は聽手に任せると云ふ語法で、次に第三の「氣遣ふ」となると、其處には疑ひが這入つて來、多少疑惑に傾いたり、時とすると皮肉になつたり、時とすると「まさか」と云ふ潤色が這入つて來たります。第四の、「惜しむ」といふのになると、現在が「さうでなければこそ」惜しむので、事實は全くそれに反對であると云はぬばかりの口吻です。「嘸かうであつたらうに」といふのは「實はさうでない」といふ事を同時に洩らしてゐます。故に之れは全然の否定です。

209. 第一式接續法の命令法的用法

まづ斷然たる肯定の場合から始めます。斷然たる肯定基調として、それに色々な潤色が附け加はつて諸種の用法をなして行くところに眼を留めて頂きたい。

註——エスペラントの文章論を知つてゐる方には、此のくだりはよく解る筈で、Zamenhof 氏の賢明な方針がドイツ語の不備を明晰に指摘してゐるかの觀があります。エスペラントでは、ドイツ語で接續法を用ひる時に斷然命令法を用ひます。vi volas ke mi *iru* (貴君は、私が行く事を [直譯＝私が行け、を] 欲する。)

(1) 命令的用法。(倒置法を行ふと強まる。)

Seien Sie fleißig! (勉强なさい)

Sei er ein Mann! (彼奴め、しつかりしてゐて呉れろ。)

Er komme herein! (彼奴をこちらへ通せ。)

此の用法を細かくわけて行くと、或ひは願望、或ひは要求、或ひは禁止、と云つたやうな事になりますが、そんな事を云ふよりは、單に命令として覺えて置く方が大綱を捉む所以です。

斯う云ふ際には、よく mögen の第一式接續法を用ひて意味を和らげます。

Er möge hereintreten.

(彼奴に、こちらへ通る「やう」に云へ。)

Gott möge ihn bewahren.

(神樣が彼をお護り下さいます「やう」に。)

この最後にあげたやうなのは、願望、即ち間接的命令と云つても好いでせう。いづれにしろ命令の一種です。三人稱の場合だけに使ふのですから、まさか文字通りの命令法だといふやうな誤解の起りやうがありません。

(2) 認容的用法。—日本語でも、ある事實を假に認容しておく時には「あゝであれ、斯うであれ」と云つて、命令法と同じ「あれ」を用ひます。ドイツ語もさうで、認容的用法といふのは要するに命令法的用法の變態です。エスペラントで、此の際にも堂々と普通の命令法を用ひるのは最も合理的且つ實用的、即ち zweckmäßig, zweckdienlich (合目的的) です。

Er sei so kühn wie er will. (od. wolle)

文字通りに譯すると、「彼は彼の欲する如く大膽であれ」ですが、つまり「彼が如何に大膽であらうとも」といふ事です。斯う云ふ際にはよく mögen の直接法 (mag) 又は第一式接續法 (möge) を用ひます。それから noch といふ助詞を入れます。(たとへ如何にの意)

Er mag noch so kühn sein, wie er will.

また wie (so).....auch といふ語法も用ひます。wie は「如何に.....」で [auch] は「.....も」です。auch は日本語の助詞「も」の持つてゐるあらゆる細かい意味をすべて持つてゐるわけです。

Wie kühn er auch sei —

Wie kühn er auch sein mag —

Wie kühn er auch sein möge —

So kühn er auch sei —

これらはみんな大體同じことで、いづれも「彼がたとへ如何に大膽であらうとも」です。

また倒置法を以て言ひ現はすこともあります。

Sei er noch so kühn, wie er wolle —

(3) 假定的用法——これも命令法の變態で、「假にまあ斯うと假定しよう」といふ時に使ひます。これも矢張り日本語に例があつて、「假に此の線を直線と假定せよ」と云つた樣な言ひ廻しがあつて、やはり命令法の一種であることがわかります。

Gesetzt, er sei tot ——

(假に彼が死んでゐるとしよう)

註 —— gesetzt は vorausgesetzt (voraussetzen「假定する」の過去分詞)と同樣です。

Es sei wahr, daß er gestorben ist.

(彼が死んだといふのが本當だ「と」[しても])

上の文例で、第一の場合には gesetzt といふ主文が明示されてあり、第二の場合にはありません。あつても無くても同じです。接續法は、その形が主文章であらうと副文章であらうと、その意味はすべて副文章です。

(4) その他の命令的用法——下に掲げるやうな主文章の次に來る副文章には、時として第一式接續法を用ひる事があります。それはすべて命令法的になるからです。

es ist billig, daß ……するが當然だ。

es ist hier Sitte, daß ……するのが當地では習はしだ。

es ist genug, daß ……するのみで充分だ。

これはほんの一例を示したにすぎないので、とにかく其處に何人かの意志が働くと、すぐ接續法を使ひたくなるのがドイツ語の語感 (Sprachgefühl) なので、此の語感と云ふものは矢張り長い間に養はないと急には出て來ません。

Es ist billig, daß man sich an seinem Feinde **räche.**[1]

(自分の敵に復讐するのは至當だ。)

Es ist hier Sitte, daß man auch am Sonntag **arbeite.**

(此の地では日曜も働くことになつてゐる。)

Es ist genug, daß man seine eigene Zeche bezahle.

(自分の食つた分だけ拂へば好い。) 〔Zeche, f.=勘定〕

210. 第一式接續法の間說話法的用法

今までのは全然の肯定で、これからは肯定にも非ず否定にもあらず、單に傳達すると云ふ口吻を表はす時の動詞を第一式接續法にして用ひると云ふ話です。

これはもう既に、接續法とは何ぞや、と云ふ話の時に詳しく述べて置きましたから、改めて說明はしません。ただその補追とでも云つたやうな事柄を附記しておきませう。

(1) 間接話法 (indirekte Rede) に於ては、主文章に、次のやうな動詞があるか、それともあるものとして考へなければなりません。

sagen	と云ふ
behaupten	と主張する
fragen	かと問ふ
meinen	と思ふ（と言ふ）

glauben	と信ずる
melden	と告げる、報告する
erklären [說明する]	と聲明する、言ひ放つ
lehren	と敎へる
vermuten	と推測する
schreiben	と書いて寄越す、書いてやる。

例

Ich fragte, ob er müde **sei.**

私は、彼が疲れてゐるか「と」訊ねた。

Er lehrt, das Weltall **habe** einen bestimmten Durchmesser.

彼は宇宙には一定の直徑がある「と」敎へてゐる。

Sie glaubt, ihr Mann liebe sie.

彼女は、彼女の良人が彼女を愛してゐる「と」信じてゐる。

(2) Consecutio temporum 〔時稱の一致〕と云ふことは、昔は非常にやかましく云はれたもので、拉丁語を先進語として、目標にして來た近代語は、すべて一時は此の時稱の一致なるものを尊重してきました。ドイツ語でも、今は非常に亂れてしまひましたが、少し古い所の文獻を讀むと、息苦しい程此の法則が守られてゐます。時稱の一致とは何の事かと云ふに、

Sie **sagt,** er **sei** ein Verräter.

(彼女は云ふ、彼は裏切者である「と」)

Sie **sagte,** er **wäre** ein Verräter.

(彼女は云つた、彼は裏切者である「と」)

上例の樣に、主文章に過去の定形が來れば、意味の如何によらず副文章の定形は過去形(卽ち第二式接續法)でなければならぬ、と云つたやうな規則です。これは或種の場合には論理的に必ずさうなければ困るのですが、間接話

法の際には、sei と wäre との間に、前に述べておいた如く、實際上何等時稱の區別はないのですから、頗る無意義なことになつて來ます。それ故近頃は必ずしも守られてゐません。ただ古いもの、たとへばグリムの童話あたりを讀む時には心得ておかなければなりません。これを心得ておかないと、此の wäre は第二式だから、多少疑を挿む意味だらうなぞと考へることになりますから。

時稱の一致が必ずしも守られてゐない證據は、たとへば、「彼は私に挨拶もせずに通りすぎた」を獨譯すると、嚴密に時稱の一致を守るとすれば

Er ging an mir vorbei, ohne mich gegrüßt zu haben.

即ち「彼は、私に挨拶した事なしに私の側を通りすぎた」ですが、普通はむしろ日本語の通りに、

Er ging an mir vorbei, ohne mich zu grüßen.

(但し ohne daß er mich grüßte.)

と云つた方が簡單で好いのです。

第一式接續法と第二式接續法との間の境は、此の間接話法の場合には多少不明瞭な所があつて、これも矢張り語感に訴へる問題になつて來ます。

なほもう一つ第二接續法に領域を侵される場合を擧げて置きませう。

(3) 接續法なる事を明示する爲の第二式接續法——第一式接續法は、前章で人稱變化を研究した時に御覽になつた通り、動詞によると、ただ三人稱の單數 er の所でのみ直說法と異つてゐて、その他では、殊に複數の一人稱三人稱では何等直接法と區別する目印がありません。そこで、さう云ふ場合に限つて、第一式の代りに、わざわざ第二式を使つて、如何にも接續法らしい口吻を見せようとする心理があります。

たとへば、「おれ達はもうちき學校へ上るのだとお父さんが云つてるよ」を譯すると。

Vater sagt, wir **sollten** bald in die Schule gehen.

註——俗語では、Papa に似せて、der Vater といふ代りに單に Vater, die Mutter といふ代りに單に Mutter, Mutti なぞと云ひます。つまり固有名詞扱ひになるのです。

即ち sollen は、wir の際には、第一式 sollen は直接法 sollen と全然同形ですから、その代りに第二式の sollten [英語の should に相當する形] を用ひると云ふわけです。話が大變細かくなりましたが、こんな事はさう大して重要ではありません。その代り一寸片耳に挿んでおくと案外役に立ちます。

故に——これはむしろ第二式の方に屬する問題ですが——第二式の複數の定形は必ずしも第二式の色合ひは持たないと云へます。かなり厄介な現象ですが、形式の方に少しでも不備があると、實際上の運用にかういふ厄介な事が起つて來るのです。かういふ厄介な事は、ドイツ語よりもむしろ英語の方に澤山あります。(should と would との使ひ分け等)

だから、變化とか語尾とか云つたやうなものは、むしろ複雜に豐富にある方が實際の運用が規則的に行つて、結局やさしくなるのです。ラテン語の文法が完全だと云ふのは、つまり斯ういふ所を指すのです。獨逸語も、直接法と接續法とが各人稱に於て凡て相違してゐたら、表の暗記は厄介でも、實際の運用は現在よりずつと容易だつたでせう。變化のやかましい國語ほど運用は楽です。

☞ 讀本第十六課を讀め。

第二十九講

第二式接續法の用ひ方

また同じ事を繰り返しますが、第二式（所謂過去形）接續法は、第一式に比べると、多少疑ひをこめた口吻の時に用ひます。同じ間接話法に用ひても、肯定でもなく否定でもない嚴正中立の態度を以て引用する際には、前章の最後に述べた二つの場合を例外として、決して第二式は使はないのです。これが第二式を第一式から區別する所以で、もしさういふ區別がなかつたら、既に時稱の上の區別がないのですから、こんなものが二種類もあるのは全く餘計になつてしまふ筈です。

ところが、嚴正中立と、疑を込めた口吻との間には無數の段階があつて、多くの場合は、その判斷が非常に困難です。

211. **疑惑の意を含ませた引用** 〔219 頁の表の第三段目〕

たとへば玆に二人の男が押問答をしてゐると假定します。

甲 —— 貴樣は卑劣だ！

乙 —— 何だと？ 俺が卑劣だ「と」？

これを一寸獨譯して見ませう。

A. — Du bist niederträchtig!

B. — Was? Ich **wäre** niederträchtig?

最後の B の反問に注目して頂きたい。これは間接引用文です。客觀的に引用するとすれば、

Du sagst, ich **sei** niederträchtig.

又は Ich sei niederträchtig, sagst du.

譯すれば、「俺が卑劣だとおまへは云ふ」と云ふ、極く冷靜な口吻になつてしまひます。ところが、「俺が卑劣だなぞとおまへは云ふ」と云ふ文になる

と、その「なぞと」と云ふ色彩を濃厚に出す必要があります。その時にはどうしても第一式では駄目で、第二式の wäre でなければならなくなります。

以上が第二式の持つてゐる色彩、口吻、乃至餘韻とでも云つたやうなものです。

次に、前にあげた四つの階梯の第四番目、即ち全然の否定、事實は全く反すといふ口吻の使ひ方に移りますが、これが非常に重要ですから、特に注意して讀んで頂きます。

212. **若し……だとしたら、嘸……であらうに。**（約束法的語法） 〔219 頁の表の第四段目〕

「嘸……であらうに」又は「嘸……であつたらうに」—— 即ち、事實はさうでない —— といふ意味に用ひる動詞の變化樣式が、ラテン系統の國語（佛、伊、西）等にはみんな特別に備はつてゐます。これはラテン語に於て此の語法が非常な發達を遂げたお蔭ですが、ゲルマニア系統に屬するドイツ語にも、後世になつて此の語法が發達して來ましたが、元來が他の先進國の影響の下に起つたものですから、それだけに用ひる特別な語尾がなく、今までにあつた接續法でもつて間に合はせる事になつてしまひました。即ち約束法と云ふ言ひ廻しは、文章の形式としては存在するが、動詞の變化としては特別に存在せず、接續法第二式が多少疑惑を抱く時に用ひられ出したのを幸として、之れを以て南方諸國語の約束法に轉用してしまつたのです。ドイツ語の文法は、すべてラテン語の範疇の中に押し込んだ苦しい跡が殘つてゐて、至る所にその無理が見えるのですが、此の約束法といふのなんぞもたしかに其の一つです。けれども現今の儘のドイツ語では、此の强制的分類が或る程度まで實現して、文體が第一拉典語と佛蘭西語との影響の下に育つて來てゐますから、約束法について云々するのは、たとへば日本語の動詞の轉尾に現在時稱と未來時稱とを區別しようとする努力なぞ程には不自然ではないのです。

ただ、困るのは、內容だけが南國語で、その內容を云ひ表はすための形式が特別になくて、他の內容に使ふものと同じことになつてしまふと云ふ點です。けれどもそんな事は、此の約束法の場合にだけはドイツ語の惡口になりますが、フランス語なぞでも同じやうな現象がありますし、そんな意味で一內容について一形式を持つやうな言語は、地球上にはまだ一つもないと斷言できます。

では次に約束法の意味を實例でお話しませう。

先づ最初に、約束法を最も極端に用ひた例を擧げませう。さうすると約束法の傾向が露骨にわかりますから。

Heine（ハイネ）の詩に、かういふ文句で始まつてゐるのがあります。

Gewiß, gewiß, dein Rat **wär'** gut,
Hätt' unsereins kein junges Blut;

成る程成る程貴下の御忠告は御尤もなり、
若し我々にして若き血を持たざりせば、

御尤もなりの「なり」が所謂約束法です。日本語でこそ「なり」ですが、その意味は、「御尤もな筈なのだが」、即ち事實はそれに反して、決して御尤もでは御座らぬ、といふ事が言外の意にあふれてゐる、むしろその否定の意を利かせんとしてわざわざ wäre を用ひたのです。

註——上の詩句の意味は、皮肉に云ひ廻したので、おれたちの樣な若い者をつかまへて、そんな片苦しい忠告をしたつて仕方が無いではないかの意です。unser-eins は、ちよつと日本語の「こちとら」といふ俗語にあたる稱にしか用ひられない代名詞です。unsereiner とも云ひます。

今度は、直說法との差を際立たせるために別な例をあげます。こんどは作文にしませう。

或る老年期に近い男が、若い婦人に結婚を申し込んだとしませう。女の方では、單に斷り狀をやるだけでは面白くないから、此の機を利用して多少たしなめてやりたいと思つて、次のやうな事を云つてやるとします。

「若し私が四十を越したお婆さんででもあつたら、私は欣んであなたと結婚するでせう。」

これをドイツ語に飜譯する時には餘程用心しないといけません。もし約束法といふものを知らないで、直接法で次のやうに書いてやるとしたらどうでせう。

Wenn ich in meinen vierziger[2] Jahren stehen werde, werde ich Sie mit Vergnügen heiraten.

さあ大變、「私が私の四十年代に立ちました曉には、私はきつと欣んであなたと結婚するでありませう。」——どうかその時までお待ち下さい、といふことになつてしまひます。かういふ返事を貰つたら、相手の男は屹度待ちますね。待たなくつちやあ嘘です。その時になつて女の方で、あれは皮肉だと云つて日本語で說明してきかせたつて、相手のドイツ人は辟易しません。ではその手紙をドイツ人の公平な人々に見て貰ふといふ事になるでせう。さうするとドイツ人は誰だつて、これははつきりとした「約束」だ、これよりはつきりした約束はない、といふでせう。

ではどう云ふ風に書いたら約束にならずに、一場の皮肉になるか？それは約束法を用ひることです。約束法を用ひると約束にならないで、約束法を用ひないと約束になる——約束の混線が起つてしまつて何が何やら分らなくなりましたから、早速さつきの皮肉を獨譯してみませう。

Wenn ich in meinen vierziger Jahren stünde,[3] so würde ich Sie mit Vergnügen heiraten.

これならば法廷に持ち出されても大丈夫です。「もし假に私が四十年代に立つてゐるとしたら、私は欣んであなたと結婚するところなんですが」——遺憾ながらまださうでもありませんから、結婚は致しませんと云ふ口吻が言外の意に溢れてゐます。かういふ皮肉になると、むしろ裏面に横溢してゐる反對事實をわざわざ利かさんがために約束法を用ひるのだと云つても構ひません。要するに前述の四階段なるものの最後の階段は、約束法の事であつて、それは、全然事實がその反對であるといふ、つまり全然否定の場合です。

213. 約束法的語法は、必ず假定と、其の假定より生ずる架空的結論との二部分より成立す。

上にあげた二個の例で、約束法的な言ひ廻しは、必ず前提と、それから生れる空想上の結論との二つの部分から成り立つてゐる事が解つたでせう。しかも、前提も結論も、共に非現實的、假定的、架空的、虛構的なものであつて、必ず寧ろその反對の場合の方が現實として露骨に念頭に浮ぶのです。

普通に約束法 (Konditional 又は Conditionalis) と呼んでゐるのは、その結論の方、即ち「嘸斯く斯く斯樣であつたらうに」又は「あらうに」と云ふ方を指すのですが、前にも述べた通り、ドイツ語には、「あらうに」だけに用ひられる特別の語尾はないので、前提の方の「……だとしたら」の場合と同樣、どちらにも第二式接續法を用ひますから、むしろ前提と結論とを一括して約束法的語法と呼んだ方が、合目的的だらうと思ひます。實際此の二つの部分は、一を除いて他を考へる事が出來ない程密接な關係を持つてゐるのです。

214. 約束法的語法の構文

次に、文章の構成法といふ方面から約束法を研究して見ませう。

(1) 前提部の構成法。——前提の方は、所謂副文章になるのですが、その構成法が二種類あります。一は wenn (若しも) と云ふ接續詞を先頭に据ゑて、定形 (接續法第二式の變化をする動詞) を文章の一等最後に持つて來る、即ち、後置する方法で、他の方法は、所謂倒置を行ふ、即ち定形を先頭に据ゑて其の次に主語を置く方法です。

前提部の構文

[もし私の父が別莊を持つてゐたら]

1. Wenn mein Vater ein Landhaus **hätte**, — (後置)
2. **Hätte** mein Vater ein Landhaus, — (倒置)

以上は勿論現在形ですが、過去の場合には過去分詞を用ひれば好いわけです。即ち wenn mein Vater ein Landhaus gehabt hätte, 又は Hätte mein Vater ein Landhaus gehabt, となります。

(2) 結論部〔元來の所謂約束法〕の構成法。——結論になる部分は主文章です。

結論部の構文

[私は都會には留まらないだらう]

1. Ich bliebe nicht in der Stadt.
2. [so] bliebe ich nicht in der Stadt.

結論の場合、即ち普通の所謂約束法の場合に限つて、werden の第二式接續法、即ち würde を助動詞に用ひる方法もあります。

würde を用ひる結論部の構文

[私は都會には留らないだらう]

1. Ich würde nicht in der Stadt bleiben.
2. So würde ich nicht in der Stadt bleiben.

結論部の構成法に、單に第二式を用ひるのと、würde を用ひるのと、二つの方法がある事は特に銘記して頂き度いと思ひます。

結論部の過去も、やはり助動詞と過去分詞とを以て造ります。即ち、ich würde nicht in der Stadt geblieben sein となるわけです。(bleiben は sein で完了形を作りますから。)

(3) 前提、結論の組み合せ方。——兩方を組み合せる時に特に注意しなければならないのは、既にずつと前に述べた文章論(第二卷 144 頁)によつて規定されてゐる一般的法則です。即ち、副文章が先に立つと、その後に續く主文章の定形と主語とが倒置されることです。so (それでは) なぞが間にあれば勿論 so のために倒置されます。以下に、今までの文例を色々に組み合せて見ませう。

約束法的語法の構文樣式

1. Ich bliebe nicht in der Stadt, wenn mein Vater ein Landhaus hätte.
2. Ich **würde** nicht in der Stadt bleiben, wenn mein Vater ein Landhaus hätte.
3. Ich bliebe nicht in der Stadt, hätte mein Vater ein Landhaus.
4. Ich **würde** nicht in der Stadt bleiben, hätte mein Vater ein Landhaus.
5. Wenn mein Vater ein Landhaus hätte, so bliebe ich nicht in der Stadt.

6. Wenn mein Vater ein Landhaus hätte, so **würde** ich **nicht** in der Stadt bleiben.
7. Hätte mein Vater ein Landhaus, bliebe ich nicht in der Stadt.
8. Hätte mein Vater ein Landhaus, so würde ich nicht in der Stadt bleiben.

要するにどれを用ひても好い譯です。以上の中でも特に注目して頂きたいのは、第七番目の構造です。

Hätte mein Vater ein Landhaus, **bliebe ich** nicht in der Stadt.

一寸見ると兩方とも同じやうに倒置を行つてゐるやうですが、各々倒置の理由が違ひます。前半部の倒置は wenn といふ接續詞と同價値の倒置で(第二卷、第十八講、129 參照)、後半部の倒置は、主語以外の要素が先頭に來た時の倒置です。(第二卷、第十八講 127)。

例

Ist man reich, ist man auch mildtätig.[4]

[人富あれば則ち慈善をなす。]

Wäre ich reich, wäre ich auch mildtätig.

[金でもあつたら慈善もしようが。]

この文例では、同時に、直接法と約束法との區別がはつきり出てゐます。

215. 前提部のみの獨立用法

Wäre ich reich! 金があつたらなあ!

前提部のみを云つて、結論部の方は單に餘韻に響かせるきりの云ひ廻しがあります。大抵願望の表現に用ひます。願望の意を表はすためにはよく nur, doch と云ふ助詞を入れます。

1. **Stürbe** er doch gleich!

あいつ奴、直ぐ死んぢまへば好いに。

2. **Liebte** sie nur ihren Gatten!

彼の女がせめて良人を愛するやうな女だつたらなあ!

3. **Käme** doch ein Sturm!

一嵐來ないものかなあ。

4. O, **hätte** ich doch wenigstens Englisch **gelernt**!

あゝ、せめて英語でも習つて置くのだつたに。

5. **Könnte** ich nur etwas schwimmen!

せめて一寸ばかりでも泳げたらなあ!

6. **Wollte** er sich doch anstrengen!

彼奴がせめて努力する氣になるやうな男だと好いのだが。

これらは、とにかく主文章を省いた未完成句だと云ふ事は、それを日本語に譯する時に、「……好いのだが」といふ主文章を入れないと纏まりがつかないと云ふのに徵しても明らかです。

以上の文例は、勿論各々 wenn を用ひて造つても好いわけです。

216. 結論部、所謂約束法のみの獨立用法

ich täte es gern.—さう致したいのは山々ですが。

結論の方は、「もし斯うであるとしたら」と云ふ前提を受けて、其の後に「多分斯うなんだらうが」と云つた樣な具合に、日本語でも、「が」と云ふ、奥齒に物の挾まつたやうな、頗る耳觸りの惡い助詞を附け加へます。それは其の次に「實際さうでないから斯うでないのだ」と云ふ、現實の摘發が續くのを豫想するからです。

結論部は「が」と云ふ餘韻がひびくのを以て特徵とします。前提が省かれる時にも、此の「が」で考へるとよくわかります。

(1) 後悔し、或ひは遺憾に感ずるといふ口吻の表現に用ひる。

1. Eigentlich hätte ich es tun sollen.

本當はそれをしなければならなかつたのだが。

註——sollen は助動詞 sollen の過去分詞です。話法の助動詞はすべて過去分詞の代りに不定法を用ひます。詳細は後章、助動詞の所を參照。

2. Eigentlich hätte ich es tun können.

本當は［やらうと思へば］出來もしたのだらうが。

3 Ohne meine Trunksucht wäre ich jetzt ein gefeierter Feldherr.

飲酒癖さへなければ、今頃は俺も世間に人氣のある將軍になつてゐたのだが。

註——此の場合は、前提部が ohne meine Trunksucht と云ふ前置詞句の形をして現れてゐるのに注意。

(2) 過去に於ける可能性。——「一つ間違つたらこんな事になつてゐた所だつた」といふ文章。

Noch einen Schritt, [又は Noch ein Schritt] und ich hätte mich in den Abgrund hineingestürzt.[5]

もう一歩の事で奈落の底に墜落するところだつたのだが。

(3) 極く遠廻はしに物を主張したり、言葉尻を濁したり、斷言を憚つたり、婉曲に言ひ廻はしたりする時に用ひるのは、日本語の「が」の通りです。

1. Ich **dächte**[6] wohl, es könnte möglich sein.

それは可能ではないかとも思ひますが。

2. Ich **wollte**, er ginge weg.

あいつが立ち去つて呉れれば好いと思ふのだが。

3. Sie **täten** besser, es nicht zu tun.

そんな事はしない方が宜しいでせう。

註——besser tun は、……する方が宜しい、といふ成句。

4. Er **möchte** mich gern besuchen.

彼は何とかして私を訪問したいのだが。

註——möchte は mögen (……する事を好む) の第二式接續法。

5. Nun **wären** wir endlich in Berlin!

さてはとうとう伯林へ着いたかな。

6. Wer **stürbe** nicht gern für sein Vaterland?

誰か其の祖國の爲めに喜んで死せざらむ。

以上は、いづれも結論部の變態で、それぞれ何等かの形で「もし斯く斯く斯樣であつたら」といふ副文章を裏面に想像することが出來ます。即ち、或ひは wenn ich mich nicht irrte, (もし私の考にして誤たざれば) とか、或ひは wenn es möglich wäre (出來る事なら) とか、wenn es darauf ankäme (いざとならば) とか云つたやうな前提部を默定する事が出來ます。

217. 恰も……であるかの如く。
als ob, als, wie wenn, als wenn.

これは、約束法的語法の前提部の獨立用法に屬するものですが、特に重要ですから一項を設けます。もつとも此の als ob に就ては、既に第二卷第十八講の 130 で一寸述べては置きましたが、その時はまだ接續法の出ない時でしたから、完全には解らなかつたらうと思ひます。

たとへば、「母は自分の子息を、彼がまだまだ乳飲兒ででもあるかの樣に取扱ふ。」といふ文章を作らうとすると、これは明らかに所謂非現實話法 (irreeller Modus) ですから、前に述べた四つの階梯の第四、即ち約束法的語法を用ひなければなりません。しかもその前提の方です。即ち、「もし彼が赤ん坊であるとしたら」嘸斯くもあらうか、と云つたやうな方法で取扱ふのですから。

「もし彼が乳飲兒であるとしたら」は、

1. wenn er ein Säugling wäre, —
2. wäre er ein Säugling, —

です。それに als または wie (の如く) を先行させると、「恰も乳飲兒であるかの如く」が出來上ります。

1. als wenn er ein Säugling wäre, —
2. als wäre er ein Säugling, —
3. wie wenn er ein Säugling wäre, —
4. [wie wäre er ein Säugling, —]

最後の第四はあまり用ひません。——次に、日本語の通り、「乳飲兒であるか? の如く」と、「か」を利かせる方法もあります。これは疑問を間接化したもので、たとへば

Er fragt mich, ob ich ein Säugling sei (wäre)?

彼は私に私が乳飲兒であるか [なぞ] と問うた。

と云ふ際と同じになります。

1. ob er ein Säugling sei?
2. ob er ein Säugling wäre?
3. [sei er ein Säugling?]
4. wäre er ein Säugling?

即ち、「彼は乳飲兒か知ら?」又は「彼は乳飲兒だらうか?」といふのは上例の如くになります。次に、「かの如く」と云はんがためには、als を附けます。即ち

1. als ob er ein Säugling sei (wäre), —
2. als sei (wäre) er ein Säugling, —

以上に述べたところを綜合して、最も普通な云ひ方に從つて、例の「母は、自分の子息を、彼がまるでまだ乳飲兒であるかのやうに扱ふ」を譯して見ると。

1. Die Mutter behandelt ihren Sohn, als ob dieser noch ein Säugling wäre.

2. Die Mutter behandelt ihren Sohn, als wäre dieser noch ein Säugling.
3. Die Mutter behandelt ihren Sohn, wie wenn dieser noch ein Säugling wäre.
4. Die Mutter behandelt ihren Sohn, als wenn dieser noch ein Säugling wäre.
5. Die Mutter behandelt ihren Sohn, als ob dieser noch ein Säugling sei.
6. Die Mutter behandelt ihren Sohn, als sei dieser noch ein Säugling.

以上の組み合せが最も普通に行はれてゐる形です。但し 5 と 6 とは例外的で、als, als wenn, als ob の次には、最近のドイツ語は大抵第二式接續法を持つて來ます。やはり非現實話法の、裏面が全然否定になる時には第一式よりも第二式がよろしいと云ふ語感 (Sprachgefühl) が劃一的に行き渡つて來たのでせう。

218. **助動詞の第二式接續法は、各々獨立した一つの動詞として覺える事。**

ich wollte, ich müßte, ich könnte, ich sollte, ich dürfte, ich möchte.

英語でも、will, shall 等の第二式接續法 (約束法、條件法などと云ふ) would, should 等は或種の特別な意味を持つてゐて、will, shall とは獨立した一つの單語として覺えるのが實用的なやり方になつてゐますが、ドイツ語もさうで、面倒でも下に述べる樣な形には、一つの單語として親しんで貰ひたいのです。——此の事は勿論普通の動詞についても同樣に云へるのですが、助動詞は特にさうです。möchte は何だ、といふ事になつた時に、それは mögen の接續法だ、なんて位の智識では、內容的に語學を制する事はできません。それは英語の should like で、「……したい」といふ意味だ、とすぐ

用法の方が具體的に腦裡に浮ばなくてはなりません。語學は、嚴密に理詰めの文法をやると同時に、一方、全然理屈を拔きにした、直感に訴へる樣な覺え方をする必要があります。兩方とも必要で、しかも兩方とも揃ふ事が必要なんです。Rickert といふ哲學者は這般の物事の關係を das eine „und" das andere 卽ち一方「と」他方と名づけて自分の論法の標語にしてゐますが、語學に於ける「反省」と「直感」とは正に其の關係にあります。二兎を追ふものは一兎を得ず、と云ひますが、時には、「二兎を追ふ者にして始めて二兎を得、一兎を追ふものは一兎をも得ず」といふ事もあるのです。

閑話休題。下に助動詞の第二式接續法を單語として紹介します。

(1) ich wollte.

wollte は三要形が wollen, wollte, gewollt と規則的ですから、wöllte とはならず、過去と同形ですから、間違へないやうにしなければなりません。意味は「……したいのだがなあ」といふ事です。

Ich wollte lieber, ich fiele[7] durch.

僕は一そ [lieber] 落第した方が好いんだ。

Ich wollte, daß er mein Freund wäre.

あいつが僕の友達だと好いのだがなあ。

(2) ich müßte. 「……しなければならない筈なのだが」の意。

Du müßtest zu ihr gehen.

君は彼女の所へ行かなければ不可なからう。

Er müßte schon da sein.

彼奴はもう來てゐなければならぬ筈だが。

müßte には一つ特殊な使ひ方があります。それは、「……ならば格別」といふ、除外例を設ける時の müßte denn です。

1. Er wird es wagen, er **müßte denn** ein Weichling sein.

あいつは、柔弱兒ならば格別、さうでなければそれを敢行するだらう。

2. [別法] Er wird es wagen, **es sei denn, daß** er ein Weichling wäre.

3. [別法] Er wird es wagen, er wäre **denn** ein Weichling.

要するに denn を用ひて、主文章的な形式で附加するとさういふ除外例を設けるやうな意になるのですが、müßte を好んで用ひる事は特に銘記して頂きたいのです。

(3) ich könnte. 「……出來るのだが」の意ですが、普通の會話では、よく人に物を頼む時に用ひます。

Freund, du könntest mich ein Stück Wegs begleiten.[8]

おい君、一寸其處まで一緒に行つて呉れないか。[ein Stück Wegs, 英語に直譯すると a piece of way.]

Na,[9] könnten Sie mir hundert Mark leihen?

どうです、一寸百馬克ばかり貸して下さる譯には參りませんか。

(4) ich sollte. 「もし……であるやうな場合には」と云つたやうに、未來を想像し假定する時に、wenn と共に用ひます。

1. Wenn du etwa sitzen bleiben solltest, was wird aus dir werden?

もしひよつと (etwa) おまへが原級に留まるやうな事があつたら、おまへは一たいどんなことになるんだい?

2. Wenn er zufällig an dir vorüberfahren sollte, grüße **ihn** bestens von mir.

もし彼奴が偶然君の側をドライヴして通るやうな事があつたら、僕から宜しく言つたと云つて呉れ。

註——bestens は宜しくの意。——fahren は gehen, kommen とは違つて、必ず乘物に乘つて行く時しか使ひません。たとへば荻窪邊に住んでゐる人が市內へ出る時には in die Stadt fahren (町へ行く) と云つた方が正しいのです。

(5) ich dürfte.——dürfte は、dürfen とは全然無關係に思はれるやうな使ひ方をします。即ち könnte と全然同じなんです。

Die Neuigkeit dürfte (könnte) etwas Wahres an sich haben.[10]

此の知らせにはいくらか眞實な點もないではなからう。

(6) ich möchte.——これは前に一寸言つたやうに英語の should like で、「……したい」と云ふ意味で、普通の會話には專りに使はれます。dürfte は知らなくても möchte は知つて置く必要がありますね。

Jetzt möchte ich nach Hause gehen.

(俺はもう家へかへりたくなつた。)

Ein fremder Herr möchte dich sprechen.

(何處かの見知らぬ人が君に面會を求めてゐる。)

註——mit einem sprechen は「或人と話す」で、einen sprechen と四格支配になると、面談する意味になります。

接續法の話が大變長くなりましたが、これは普通初學者に最も理解困難とされてゐる部分だから、特に念を入れたのです。今の所では少しむつかしいかも知れませんが、將來接續法について疑問の起るたびに此の部分を檢べなほして下さい。かなり親切に述べたつもりですから。

☞ 讀本第十七課を讀め。

第三十講

形容詞の比較級最高級

形容詞に、比較級、最高級といふ特別な形がある事は英語と同じですが、その形容詞が附加語に用ひられる場合と客語的に用ひられる場合とによつて少しばかり樣子が違ふといふ點が稍こみ入つてゐます。

219. 附加語と客語

遠ざかると忘れるものですから、既にやつた事をまた復習します。附加語とは、冠詞、物主代名詞、指示形容詞等の如く、名詞に冠せられる言葉です。たとへば eine leichte Arbeit (一つの容易なる仕事) の leichte は附加語です。

客語とは sein 等の繫詞 (Copula) によつて主語に結びつけられ、主語に就て何等かの聲明をする形容詞 (時には名詞) です。たとへば Diese Arbeit ist leicht (此の仕事は易い) の leicht は客語です。(詳細は第一卷文法 94)

客語は、もつと正確に云ふと、色んな場合を含みます。けれどもそれは本問題に關係がないから止しておきます。

220. 附加語的形容詞の比較級、最高級

一般的の法則は、原級 (元のままの形) に -er の語尾を加へて比較級を作り、-(e)st を加へて最高級を作ります。

原級		比較級		最高級	
neu	新しき	neuer	より新しき	neuest	最も新しき
genau	嚴密なる	genauer	より嚴密なる	genauest	最も嚴密なる
schnell	速き	schneller	より速き	schnellst	最も速き
früh	早き	früher	より早き	früheſt	最も早き
sicher	安全な	sicherer	より安全な	sicherst	最も安全な
klar	明らかな	klarer	より明らかな	klarst	最も明らかな

gewiß	確かな	gewisser	より確かな	gewissest	最も確かな
schlecht	惡き	schlechter	より惡き	schlechtest	最も惡き

ところが、單綴の、最も簡單な、一番よく使ふやうな字に限つて、比較最高の兩級で變音します。

原級		比較級		最高級	
alt	古き	älter	より古き	ältest	最も古き
warm	暖き	wärmer	より暖き	wärmst	最も暖き
arm	貧しき	ärmer	より貧しき	ärmst	最も貧しき
klug	賢き	klüger	より賢き	klügst	最も賢き
stark	强き	stärker	より强き	stärkst	最も强き
schwach	弱き	schwächer	より弱き	schwächst	最も弱き
hart	固き	härter	より固き	härtest	最も固き
lang	長き	länger	より長き	längst	最も長き
kurz	短き	kürzer	より短き	kürzest	最も短き
kalt	冷き	kälter	より冷き	kältest	最も冷き
dumm	愚なる	dümmer	より愚なる	dümmst	最も愚なる
jung	若き	jünger	より若き	jüngst	最も若き
scharf	鋭き	schärfer	より鋭き	schärfst	最も鋭き
krumm	曲つた	krümmer	より曲つた	krümmst	最も曲つた
krank	病んだ	kränker	より病んだ	kränkst	最も病んだ
schwarz	黑き	schwärzer	より黑き	schwärzest	最も黑き

最高級の語尾を -st にするか -est にするかは專ら口調と習慣との問題です。卽ち所謂飛箭音 (Zischlaut 卽ち s, sch, ß, z, x, tsch) の次はなるべく -est; d, の次はどちらでも好いのです。härtst でも härtest でも好いわけです。

獨逸人の仲間でも、或ひは變音する人があつたり、或ひはしない人があつたりして區々な字も無いではありません。

gesund	健康な	schmal	細い
zart	か弱い	glatt	滑らかな
naß	濕つた		

221. **不規則なる比較級最高級**

比較級最高級には少數の不規則があります。また全然別個の單語を以て比較級最高級を造るものがあります。

gut	良き	besser	より良き	best	最もよき
hoch	高き	höher	より高き	höchst	最も高き
nah	近き	näher	より近き	nächst	最も近き
groß	大なる	größer	より大なる	größt	最大の
wenig	少き	weniger / minder	より少き	wenigst / mindest	最も少き
viel	多き	[mehr]	より多き	meist	最も多き

註——hoch は、附加語として用ひる時には hoh- として語尾をつけます。(ein hohes Gebäude 高き建物)

222. **比較級の附加語的用法**

名詞に冠せて用ひるのですから、勿論形容詞につく語尾がつきます。その際は、たとへば、sicher (安全な) を用ひると、

ein sicher-er Zustand. 安全な狀態

ein sicherer-er Zustand. より安全な狀態

結局 -er といふのが三つも續くわけですが、第一の er は語幹そのものに元からある -er, 次は比較級の語尾の -er, 次が男性一格の格語尾です。

ただ一字 mehr (より多くの) は、必ず無語尾のまま用ひます つまり mehr は副詞的なのです。

Er hat mehr Bücher als ich.
彼は私よりももつと本を持つてゐる。

als は英語の than です。(als の用法は隨分多いから注意を要します。「……した時に」といふ接續詞も als,「……として」といふ前置詞的な接續詞も als, それから als ob の als は「……の如く」です。)

223. 絶對比較級 Absoluter Komparativ

比較級と云ふ以上は、何か規準になるものがあつて、それと比べて「より斯うである」と云ふのですが、玆に、別にはつきりとした規準を云はないで、單に頭つから比較級を用ひる語法があります。

bessere Familie	良家庭
höhere Schule	上級の學校
kleinere Kinder	幼兒
größere Flüsse	大河
nähere Beziehung	密接な關係
neuere Zeiten	近世
ältere Leute	年寄株
früherer Zustand	以前の狀態
wärmere Gegend	温暖なる地方
genauere Untersuchung	精査
feinerer Unterschied	細かい區別

一例を取ると、たとへば kleinere Kinder と云へば、小兒なるものに、大きなのと小さなのと二種類あるものと頭つから決めてかゝつた樣な云ひ方をするわけで、「小さい方の部類に屬する子供」と云へばわかるでせう。けれども、此の語法は、名の示す通り、絶對的なので、比較の對稱なぞはさうはつきりと決まつてゐないのです。「比較的小さな」とか「比較的新しい」とか云へば好いでせう。それとも、そんな事を云はないで、jüngere Leute は若い人たち ältere Leute は年を取つた人たちと考へた方が好いでせう。

224. 最高級の附加語的用法

最高級を附加語として名詞の前に置く時には、必ず同時に定冠詞を採ります。

das schönste Land der Welt.
世界中の一番美しい國。

die beste Familie dieser Stadt.
町で一番の良家。

der größte Bruder.
一番上の兄。

最高級で定冠詞を附けないなぞと云ふ事は殆んどありません。詩人なぞは、よくラテン語やギリシヤ語に眞似て、所謂絶對最高級〔比べるものなしに、單に「非常に」の意〕なるものを作つて Schönster Jüngling (美しき青年) なぞと云ひますが、それは洒落れて古典味を出さうとするのであつて、所謂 Archaismus (擬古) です。(これが最近また流行し始めたのは文學の影響)

次に、最高級を次のやうに言ひ表はす方法があります。

einer[11] der berühmtesten Redner.
最も有名なる演說家中の一人。

eine der größten Zeitungen.
最大新聞中の一つ。

eines[12] der bequemsten Mittel.
最も便利な方法中の一つ。

それから、最高級の意を强めるために、よく aller- といふ接頭詞を附けます。

die allerschönste Frau der Welt.
世界一の美人。

die allerhöchste Stufe.
最高の段階。

die allerwichtigste Angelegenheit.
最も重要なる件.

序でに一寸した熟語を紹介して置きませう。

Er verliebt sich in die **erste beste** [od. **erstbeste**] Frau, die ihm in den Weg läuft.

彼は (er) 其の邊から飛び出す (die ihm in den Weg läuft) どの女にでも (in die erste beste Frau) 惚れてしまふ (verliebt sich)。

一寸註解を要しさうですな。ihm in den Weg laufen は、云ひかへれば in seinen Weg laufen で、これは、たとへば森の中なぞを歩いてゐると、鹿や兎なぞが、ひよいと鼻の先に現れて出ると云ふ様な時に使ふので、森や獵地の多いドイツの郷土の香りの高い熟語です。その次に erste beste と云ふのは、最初は die erste ist mir die beste! とにかく最初のが一番よろしい、早いところが結構、選り好みは仕らぬ、と云ふ一つの文章であつたのが、つまつて附加語になつてしまつたので、「行きあたりばつたりの」「最寄りの」「最初に逢つた」「手當り次第の」と云つたやうな熟語です。

225. **比較級の客語的用法** 比較の接續詞は als (……よりも) です。古い所では wie 又は denn なぞもありますが、それは例外的です。それとも地方の訛です。

Er ist älter als ich.
彼は私よりも年上だ.

Hier ist es kälter als dort.
此處は彼處よりも寒い.

Diese Aufgabe ist schwieriger als jene.
此の課題はあの課題よりむつかしい.

(1) 「段々と」「漸次に」云々といふ際には、比較級の前に immer をつけます。また比較級を二度繰返すこともあります。

Der Abhang wird immer steiler. (steiler und steiler.)
坂が益々けはしくなる.

Der Abend wird immer dunkler. (dunkler und dunkler.)
夕方が段々と暗くなる.

Die Aussicht wird immer schöner. (schöner und schöner.)
景色が追々美しくなる.

(2) 程度の同じものを比べる時には勿論比較級を使ひません。

Der Vater ist **so** sparsam **wie** der Großvater.
父は祖父同様の節儉家だ.

Die Mutter ist **ebenso** lieblich **wie** die Tochter.
母も娘と同様に愛くるしい.

Der Haß ist **gerade so** blind wie die Liebe.
憎しみも丁度愛と同程度に盲目である.

(3) 「何倍」といふ際にも比較級を使はないで言ひ廻します。

Der Diamant ist dreimal so kostbar wie (als) das Gold.
金剛石は金より三倍も高價だ.

Das Gebirge ist doppelt so furchtbar wie (als) das wilde Meer.
山嶽は荒海の二倍も恐ろしい.

Der Lehrling ist hundertmal so geschickt wie (als) sein Meister.
弟子はその師の百倍も堪能だ.

(4) 形容詞同志を二つ比べる際にも、mehr (より多く) weniger (より少く) を用ひるのみで、形容詞そのものは比較級にしません。

Die Liebe ist mehr bitter als süß.
愛は甘しと云はんよりむしろ苦きものなり.

Er ist mehr schlau als klug.
彼は、怜悧と云ふよりはむしろ狡いのだ.

Sie ist weniger schön als hübsch.
彼女は美しい (schön) といふより綺麗 (hübsch) なのだ.

(5) nichts weniger als…… といふ熟語があります。nicht ではなく、nichts (nothing) であるのに注意を要します。

非常にむつかしいから一寸眠氣をさまして下さい。好う御座んすか？本當に？たとへば Sie ist nichts weniger als schön が「彼女は決して美しくない」と云ふ意味になります。解つた事にして盲判をついてはいけませんよ。「さう云ふ風に讀め」なければいけませんよ。

つまり斯う云ふわけです。Sie 彼女は schön 美しく als より weniger「より」少くは nichts 他の何物でも ist ない。此の譯語を何度も頭の中で繰り返して唱へてゐるうちに段々とわかつて來ます。—— nichts〔何物でも〕といふのはつまり何を指したのでせう？nichts といふと一寸名詞のやうに考へられるが、玆では形容詞に相當します。Sie ist klug〔彼女は賢い〕といふのと同じ形式で Sie ist nichts〔彼女は何物でもない〕と云へるのです。(何「者」ではなく、「物」である點に注意) 即ち、彼女は賢明であることも僅かだ、金持ででも極く僅かしかない、淑やかでは殊更ない、柔しさといふ奴はもつと少ない、要するに、彼女がおよそ「何々」で「ない」といふ其の「何々」の數は枚擧に遑なしと雖も、「なさ」の點では「美しく」の右に出るものがない。

彼女は少く金持だ〔大して金持でない〕、彼女は少く賢明だ、彼女は少く淑やかだ、けれども「美しくよりより少くは他の何でもない」(これが前出の譯語です)。

大學の獨文學科を出た人の中でも、十人の中八九人までは nichts weniger の考へ方がわからずにゐるものです。

Er ist nichts weniger als rechtschaffen.
とにかく彼が正直でない事は何よりも確かだ。

Die Materie [マテーリエ] ist nichts weniger als tot.
物質に生なしなぞとは以ての外だ。

Ich bin nichts weniger als froh.
なにしろ嬉しくない事は確かだよ。

(6) nicht weniger……als は違ひます。第一 nichts ではなく nicht であるのと、weniger のすぐ次に形容詞が來て、als はその次に來るといふ點で形式的にも違つてゐます。

意味は「……にも劣らぬ程云々」です。

Der Diener ist nicht weniger stolz als sein Herr.
下僕もその主人に劣らぬ程高慢だ。

Im September ist es oft nicht weniger heiß als mitten im August.
九月でも往々にして八月の半ばにも劣らぬほど暑い事がある。

Auch ich bin nicht weniger dankbar als mein Vater selbst.
私もまた當人たる私の父そのものにも劣らぬほど感謝してゐます。

226. 最高級の客語的用法

最高級は、附加語として用ひる時はただ格變化語尾をつけるだけですが、これを客語として用ひる時には一寸注意を要するのです。即ち、「此の鳥が一番美しい」と云ふ際に、dieser Vogel ist schönst とは云はないのです。換言すれば、附加語の際に用ひた儘の形では決して使はないのです。次の用例を御覽下さい。

1. Er ist der klügste unter allen Schulknaben.
   彼は全學童中の最も怜悧なる者である。
2. Sie ist die faulste von allen Hausmädchen.
   彼女は凡ての女中の中の最も怠惰なものである。
3. Dieses Land ist das bevölkertste in der ganzen Welt.
   此國は全世界中最も人口多き國です。
4. Diese sind die besten in unserer Klasse.
   此の人たちが我々の組の最良株です。
5. Nach meiner Ansicht ist diese Sängerin die anmutigste.
   私の意見では此の歌ひ手(女)が一等好い氣持だ。

法則はおのづから出來上るでせう。即ち、或る者を他の多くのものと比べて最も斯く斯く斯樣であると云ふ際には、主語の性に從つて定冠詞をつけ、最高級の形容詞は附加語として扱つて格語尾(必ず一格)を附け、そして名詞

は省くのです。即ち「此の何々は最も斯うだ」と云ふ言ひ方はドイツ語に無い事ので、その代りに「此の何々は最も斯樣なるものである」と言ひ廻すのです。

さういふ現象は、最高級の場合だけには限らず、形容詞の普通の用法にもあります。殊に最近の時文口調では、たとへば、「その成功は赫々たるものであつた」[Der Erfolg war ein glänzender] と云つて、der Erfolg war glänzend の代りにする。むしろさうする方が文體がととのつて、調子が張る、と云つたやうな語感が支配し始めてゐます。勿論初學者がそんなものを眞似しなければならないといふのではありません。

次に、一つのものを、そのもの自身と比べる時には云ひ方が違ひます。一つの物をそれ自身と較べると云ふとまるで謎のやうですが、實際さう云ふ事があります。理屈よりも文例を見て頂きます。

Der Wald war an dieser Stelle **am dunkelsten.**

森は此の個處に於て最も暗かつた。

Die Tage sind im Winter **am kürzesten.**

日は冬に於て最も短かい。

Er war in seinen dreißiger[13] Jahren **am arbeitsamsten.**

彼は彼の三十年代に於て最も努力家であつた。

Die Insel ist von dieser Seite gesehen **am anmutigsten.**

嶼はこちらの側から見た際が一番美しい。

一言にして云ふと、物をそれ自身と他の狀態、他の時、他の所に於て較べる時には

am——sten

といふ形を用ひます。

227. **副詞の最高級** 副詞の最高級が此の am ——sten を形式とします。(比較級は -er の語尾を取れば好いので、別に項を設けては述べません。)

Er rudert kräftig. 彼は力强く漕ぐ。

Er rudert kräftiger. 彼はより力强く漕ぐ。

Er rudert **am kräftigsten.** 彼は最も力强く漕ぐ。

副詞の場合は、何と比べようと、必ず am ——sten です。

副詞にはなほ aufs ——ste と云ふ形式があります。それは、最高級と云ふよりは寧ろ「非常に」「出來る限り」といふ意味です。

Er arbeitet aufs fleißigste.

彼は頗る一生懸命に仕事してゐる。

つまり er arbeitet sehr fleißig といふのと同じです。

註——am, aufs 等は、殆んど形式で、別に詮索する必要もありませんが、am——sten は、恐らくは Ort (場所) が省かれたもので、aufs——ste は、例へば auf das [Fleißigste] los, 即ち最も〔勤勉なるもの〕を目標として、またはめがけて、と云ふ意味でせう。併しそんな事こそまあどうでも好いと云つた樣なものです。

228. **凝結した副詞の最高級** 變な言葉ですが、語學者間では此の凝結 (Erstarrung) といふ現象を八釜しく云ひます。即ち元來ならば文法上許されざる筈のものが、時代の推移に取り殘されたり、人があんまり頻繁に用ひたりした結果、つひに固定して其の存在權を確保してしまふ事です。つまり時効みたいなものですな。

たとへば、日本語の最近の現象を擧げると、例の「とても」なんてのがそれです。最初はずゐぶん變だつたが、近頃はむしろ「とても」モダーンな好い Ausdruck (詞) になつてしまつたやうです。

もつと嚴密な例をあげると、たとへば日本語で「あの人の便所は長い」と云ひます。便所は大抵三尺ぐらゐなものですが、あの人の便所へ行つてゐる間が長いといふ事です。此の場合、便所といふ字は、場所の意味以外に、その場所でする動作をも指してゐます。さうかと云つて、必ずしもどの場所もさうなるとは限らない。「あの人の書齋は長い」は少し變です。あの人の床は長いは益々變です。あの人の婆婆は長い(長生きをしてゐる)となると、むしろ奇を衒ふ時にしか言はないでせう。奇を衒へば或ひは相當面白い文句

でせう。 ところが「便所が長い」「床屋が長い」「風呂が長い」は決して奇ではなく、普通の日本語です。 但し「風呂桶」の長いのは一寸困りますね。

かういふ現象を指すときに、便所、床屋等は、「長い」といふ客語と共に成語として凝結または結成しかゝつてゐる、それに反して書齋等はまだ「長い」と合して凝結してゐないと云ひます。凝結した形は必ず辭書に登錄しなければならないのです。

「あの人のお尻は長い」に至つては、最も凝結してゐて、もはや色々に融通が利かない、類例は作り得ない。 たとへば同じ方法で「あの人の手は長い」(書くのに暇が取れる意)「あの人の眼は長い」(面白いものがあると何時までも夢中になつて見てゐる)「あの人の口は長い」(お饒舌りだ) なんて事は云へないのです。 (もつとも長廣舌といふのはありますが) つまり特別扱ひにしなければならないものは必ず所謂凝結形 (erstarrte Formen, 英語ならば inveterate forms) なのです。 語學はすべて此の凝結といふ現象を對象にして行くので、譬へて云ふと、哲學は歩みゆく巨人が何者であるかを研究せんがためにのみその足跡を問題にし、語學は足跡を理解せんがためにのみ巨人自身を問題にします。 巨人とは人類、足跡とは言語の事です。

ひどく脱線しましたが、時には脱線も好いでせう。 しかしまああまり超特脱線式講座にならないやうに氣をつけませう。

扨て副詞の最高級が凝結したのとは何の謂かといふに、先づ例から始めませう。

höchst [ヘーヒスト]	非常に、極度に。
eiligst	大急ぎで
möglichst	成るべく
gütigst	どうか [英語の kindly]
sehnlichst	憬れを以て、切に、しきりに
freundlichst	親切に、どうか。
gefälligst	願はくば
äußerst	非常に
baldigst	なるべく早く

ergebenst	恭々しく
längst	とつくに
jüngst	最近

要するにどれも元來の意味に於ける最高級ではなく、みんな一つの別な意味を持つた副詞です。 類例を作るのは險呑です。 ganz ergebenst〔謹しんで〕が手紙でよく使はれるから、dankbarst〔有難く〕ehrerbietigst〔謹しみ畏んで〕なぞと云ふ事もあります。——斯ういふ風に、在來の型にあてはめて造られた新語 [Neologismen, Neubildungen] の事を、類造語 [Analogiebildungen] と謂ひます。 類造語には類造語の事態があります。 唯今の場合なら、「手紙の辭令」と云つたやうな。 その事態に通ぜずして造語すると變なことになつて人に通じません。

229. **限度を示す副詞**　同じく凝結した形に、最低限度、または最高限度を示す副詞が數個あります。

wenigstens	少くとも
mindestens	少くとも
höchstens	高々、精々
frühestens	早くとも
ehestens	早くとも
spätestens	晩くとも

けれども、この -stens の語尾は、別にどの字にでも附けられるものではありません。 上述のやうな字のみが凝結形式になつて存してゐるきりです。それから下のやうな字は、別に限度を指すものではありません。

bestens	よろしく、[挨拶する等]
nächstens [ねーヒステンス]	そのうちに、いづれ。
meistens	大抵は、大概は。

230. 出來るだけ……
1. möglichſt……　2. ſo……wie möglich.

これも副詞の最高級に屬しますから、例で形式を紹介して置きます。

Die Kinder müſſen ſo beſcheiden wie möglich ſein. (形容詞の場合)
子供はなるたけ謙遜であらねばならぬ。

Komm ſo ſchnell wie möglich zurück.
なるたけ速く歸つておいで。

Du ſollſt ſo früh wie möglich aufſtehen.
おまへはなるたけ早く起きなければ不可ない。

Sie iſt ſo häßlich wie nur* möglich.
彼女はとにかく可能なる限りの醜さだ。

Die Traube[14] iſt ſchon ſo reif wie nur* möglich.
葡萄はもう充分熟し切つてゐる。

註 —— nur は「ただもう」「とにかく」の意。möglich〔可能なる〕の前に置かれることが多い助詞です。

第三十一講

前置詞(及び後置詞)

前置詞だけは、たとへば接續法の樣に先づ理解されなければならない困難な根本事實が根底に横たはつてゐると云つた樣な場合とは違つて、むしろ何でもない個々の單語を刻明に覺え込むのが主です。名詞や動詞は、ある限りの單語を文法ですつかり暗記する事は到底出來ない相談ですが、前置詞の場合にはそれが出來ます。またそれをしなければならないのです。

231. **前置詞の格支配**　前置詞は必ず各々一定の格を要求します。これも所謂凝結現象の結果として生じたもので、もはや理屈で云々する事は許されない種類の事柄に屬します。その格支配を明確に覺えるのにはどうしたら好いかと云ふに、それは、私自身の經驗によると、最もよく意味のわかる、またよく使はれさうな文句にして暗記する事です。單語はよく忘れるが、文句は割合忘れないものですからね。次に諸種の前置詞を紹介しますが、その際は、例にあげてある句の方を暗記して頂きます。なるべく耳通りが好くて意の滑らかな句を精選した心算ですから。

格支配によつて分類すると、下の四種類に分かれます。

1. 二格支配 —— **wegen** des Kriegs
戰爭のために
2. 三格支配 —— **aus** einem Loch
穴の中から
3. 四格支配 —— **durch** den Ozean
大洋を横切つて
4. 三格四格支配 —— **im** Waſſer　水中で
ins Waſſer　水中へ

從つて、一格支配といふのだけが無いわけです。als Vertreter [代表者として] といふ als が一見一格支配の前置詞の樣に思はれますが、これは接續詞とされてゐて、格も一格とは限らないので、これは接續詞の所で述べます。

232. **二格支配の前置詞** 三格四格の場合と違つて、此の二格支配の前置詞なるものは、在來のもの以外に、どしどし新造前置詞が出來て行く傾向があつて、それら凡てを擧げる事は、むしろ初學者を惑はす所以ではないかと思ひますから、まづ普通のものを掲げ、次に參考のために稀なものを一寸掲げて見ることにします。表の後半部に至るものほど稀なものです。

二格支配の前置詞

statt	statt des Vaters	父の代りに
anstatt	anstatt dessen	その代りに
wegen	wegen des Regens	雨のために
inmitten	inmitten des Sturms	嵐の眞最中に
während	während des Kriegs	戰爭中に
kraft	kraft dieses Vorrechts	此の特權に依つて
laut	laut seiner Rede	彼の談に據れば
längs	längs des Flusses	川添ひに
unweit	unweit des Bahnhofs	停車場の近くに
unfern	unfern des Bahnhofs	(同上)
infolge	infolge des Erdbebens	地震の結果
vermöge	vermöge seines Talents	彼の才能に依つて
vermittels vermittelst mittels mittelst	mittels des Fernrohrs	望遠鏡を用ひて
innerhalb	innerhalb der Stadt	市內に
außerhalb	außerhalb der Stadt	市外に
oberhalb	oberhalb der Brücke	橋の上流[かみて]に
unterhalb	unterhalb der Brücke	橋の下流[しもて]に

jenseit(s)	jenseit des Kanals	運河の彼岸に
diesseit(s)	diesseit des Kanals	掘割の斯岸に
halber [後置]	dringender Geschäfte halber	急用のために
hinsichtlich	hinsichtlich dieser Frage	此の問題に關して
um.....willen	um des Kindes willen	子供に免じて
gelegentlich	gelegentlich dieser Zwischenfalls	此の番狂はせに際して
seitens von seiten	seitens der Regierung	政府側では
ungeachtet unerachtet	ungeachtet dieses Fehlers	此の缺點にも拘らず
unbeschadet	unbeschadet seines Verdienstes	彼の功績は功績として
rechts	rechts des Eingangs	入口の右側に
links	links des Eingangs	入口の左側に
östlich	östlich des Hafens	港の東に
westlich	westlich des Hafens	港の西に
südlich	südlich des Hafens	港の南に
nördlich	nördlich des Hafens	港の北に
ausschließlich	ausschließlich dieses Falls	此の場合を除いては
einschließlich	einschließlich dieses Falls	此の場合をも含めて
angesichts	angesichts der Gefahr	危險に面して
anläßlich	anläßlich des Jubiläums	記念祭を機に
abseits	abseits des Wegs	路から離れた所に
behufs	behufs der Armenpflege	貧民救濟に資せんが爲めに

betreffs / bezüglich	betreffs dieses Problems	此の問題に關して
antwortlich	antwortlich Ihres Schreibens	貴信に答へて

註 [1]——anstatt は、代名詞を附する時には、たとへば anstatt seiner (彼の代りに) となるわけですが、元の名詞に返して、an seiner Statt と云ふ事もあります。

註 [2]——wegen は後置詞にも用ひます。(des Regens wegen 雨のために) また、代名詞を附する時には、meinetwegen, deinetwegen 等の一字があります。

註 [3]——halber は、よく名詞と一體になつて一字を作ります。geschäftshalber (用務を帶びて) ordnungshalber (整理の必要上) 等。また代名詞と一緒に一字を造る時は halben になります (meinethalben, deinethalben)。deshalb, weshalb (そのために、何故に) では halb となつてゐます。

註 [4]——um.....willen も um meinetwillen, um seinetwillen 等を造ります。此の前後置詞は普通 um Gotteswillen 〔どうか、後生だから〕 で知られてゐます。

233. **三格支配の前置詞** 三格支配は、最も普通なものが多いから、最後の數個を除いては全部覺える必要があります。(例句を)

三格支配の前置詞

von	1.	**von** eins [bis zehn]	一から[十まで]
	2.	[er spricht] **von** mir	[彼は]私に就て[語る]
	3.	[ein Freund] **von** mir	私の[一人の友人]
	4.	[er kommt] **von** Berlin	[彼は]伯林から[來る]
aus		aus dem Loch	穴の中から
mit	1.	mit dem Schwert	劍で
	2.	mit dem Freunde	友人と一緒に
zu		[er kommt] zu mir	[彼は]私の所へ[來る]

nach	1.	nach dem Sturm	嵐の後に
	2.	nach Amerika	亞米利加へ
	3.	seiner Meinung nach	彼の意見によれば
		nach seiner Meinung	(同上)
seit		seit der Erdbebenkatastrophe	震災以來
trotz		trotz dem Regen	雨にもめげず
bei	1.	[er wohnt] bei mir	[彼は]私の許に[住む]
	2.	beim Essen	食事の際
	3.	bei seiner Gelehrsamkeit	彼の博識にも拘らず
gegenüber		ihm gegenüber	彼と向ひ合つて [彼の正面に]
		dem Rathause gegenüber	市會議事堂の向側[むかひ]に
gemäß		seiner Lehre gemäß	彼の教へ通りに
		gemäß seiner Lehre	(同上)
entgegen	1.	seinem Befehle entgegen	彼の命令に背いて
	2.	dem Vater entgegen	父を迎へて
binnen		binnen 2 Monaten	二個月以内に
zunächst, nächst			
	1.	zunächst dem Könige	王の側近に [て]
	2.	zunächst dem Garten	庭のすぐ側に[庭に接し
samt, mitsamt			
		mitsamt dem Schiffe	船もろとも
nebst		nebst Frau und Kind	妻子も一緒に
zufolge	1.	seiner Aussage zufolge	彼の言明に依れば
	2.	deinem Rate zufolge	君の忠告通り
zuwider		der Vorschrift zuwider	掟に背いて
längs		längs dem Ufer	岸に沿うて

ab	1.	ab München	ミユンヒェンから先は
	2.	ab 10 Uhr	十時から[始まつて]
ob		ob dem Throne	玉座の上方に
außer		außer ihm	彼以外には

註 [1]——三格支配でも四格支配でも好いものが數個あります。前出のものと重複します。

dank	dieses Umstandes	此の事情のお蔭で
	diesem Umstande	〃
trotz	des Regens	雨にもめげず
	dem Regen	〃
	seinem Meister	彼の師にも劣らず
ob	dem Throne	玉座の上方に
	des Glücks	幸運に就て(欣ぶ)
zufolge	zufolge seinem Befehle	彼の命令に從つて
	seinem Befehle zufolge	〃
längs	längs dem Flusse	川に沿うて
	längs des Flusses	〃

註 [2]——gegenüber (……に相對して) は、代名詞が來ると必ず後置します。(mir gegenüber 私の向ひに) 名詞の場合は前置後置隨意。

234. 四格支配の前置詞

bis		[von 1] bis 10	[一から]十まで
für	1.	für den Kaiser	皇帝のために(死す)
	2.	dafür	その代り
ohne	1.	ohne Ausnahme	例外なく
	2.	ohne mich	我なくしては
um	1.	[rings] um den Teich	池の周圍に
	2.	um mich	私のために

durch	1.	durch den Ozean	大洋を横切つて
	2.	durch dieses Mittel	此の方法によつて
entlang		den Bach entlang	小川に沿うて
hindurch		den ganzen Tag hindurch	一日中ぶつ通して
gegen	1.	gegen den Strom	流に逆行して
	2.	gegen den Befehl	命令に反して
	3.	gegen 6 Uhr	六時近くに
gen	1.	gen Himmel	天に向つて
	2.	gen Norden	北向きに
wider		wider den Willen	意志に反して
sonder		(ohne と同樣)	

註 [1]——gen は、天、または方角の時以外には滅多に用ひません。sonder, wider も稀にしか用ひません。存在だけは知つておくことが必要。

235. 稀な前置詞

稀な前置詞も、それが存在する以上、ちよつと眼を通して置く事は必要でせう。必ずしも覺える必要はありません。凡て二格支配。(既出の部も登錄して置きます。)

namens seines Herrn	自分の主人の名義で
antwortlich Ihres Schreibens	貴翰に答へて
zwecks des Mordes	殺人の目的で
eingang(s) dieses Buchs	此の書の冒頭に
zugunsten meiner Kinder	我子達に利ある如く
anfangs dieser Schrift	此の書の冒頭に
ende dieser Schrift	此の書の終に
seitlich des Pfades	小徑から離れて
vorbehaltlich einiger Ausnahme	多少の例外を保留して
unterwärts des Berges	山の下方(麓寄り)に

unangesehen seiner Wunde	負傷をも顧みず
mangels Zahlung	支拂なき際は
exklusive dieses Falls	此の場合を除いては
inklusive dieses Falls	此の場合をこめて

其他、既出のものでも、nebst, mitsamt, samt, binnen, sonder, ob, gen, wider 等は稀な部に屬します。

ab は稀ですが、近頃盛に使はれ始めました。學校は何時からか？ といふと ab 8 Uhr [八時から] と云つたやうに。

また、六月の初め、中頃、終を、各々 Anfang Juni, Mitte Juni, Ende Juni と云ひますが、もう追々 anfang Juni, ende Juni になりつゝありますから、これらも前置詞としなければなりますまい。 ところが Juni が何格だかわかりません。

ab の場合も同樣です。 文法家連は、單に Nennform 〔名づけの格、引用の格、即ち嚴密に云ふと一格でもない形〕 を支配すると云ひます。

Nennform 〔引用形とでも譯しておきませう〕 は、たとへば、書物の題 (Aufschrift) や、「見出し」(Überschrift) や、單語として引用する時などに現れます。即ち主語でない際の一格と云ふものが存在すると考へても好い譯です。

236. **三格四格支配の前置詞** 三格を支配するか四格を支配するかに從つて意味の變つて來る前置詞が九つあります。 九つともよく使はれるものばかりです。

此の九つの前置詞はすべて位置を指すものばかりです。 そして、四格支配の時には、その前置詞によつて示されたる位置へ向つてする運動を表はします。 もしくは方向を示すと云つても好いでせう。 三格支配の時には、その點に於ける靜止、または其の位置の中に終始する運動を指します。 換言すれば、四格の際は、「上へ」「中へ」「下へ」等、日本語の「へ」を以て表はす事が出來、三格支配の場合は「上で、上に」「中で、中に」等、「で」又は「に」を以て表はす事が出來ます。 ドイツの文法學者は、普通、wohin (何處へ) の問に答へるのが四格支配であり、wo (何處で) の問に答へるのが三格支配であると敎へてゐますが、それはドイツ語に「で」とか「へ」とか云ふ便利な助詞 (Partikel) が無いからです。 其處へ來ると日本語には仲々微妙な道具が備はつてゐます。 一言で片附いてしまふのですからね。

その九個の前置詞といふのは——

	三格支配の場合	四格支配の場合
auf	上で、上に	上へ
an	そばで、そばに	そばへ
in	中で、中に	中へ
vor	前で、前に	前へ
unter	下で、下に	下へ
hinter	背後で、背後に	背後へ
neben	側で、側に	側へ
zwischen	間で、間に	間へ
über	上方で、上方に	を超へて

註 [1]——an は「何々に即して、接して、の表面に」といふ意味で、英語にはぴつたりあてはまる前置詞がありません。 an の色んな用法がわかり出せばドイツ語は卒業です。「そば」といふ譯語は窮餘の一策。

註 [2]——neben は「……と並んで」です。 an とは根本的に相違す。

註 [3]——über の四格支配の際だけは、最も普通な用法は最初に述べた一般的法則から外れます。 つまり über と三格は英語の above, über と四格は over です。

次に用例を示しませう。 譯はなるべく意譯をしますから、文字通りの譯は考へて頂きます。

1. Er sitzt auf **dem** Stuhl und sieht auf **den** Pudel herab.
   (彼は椅子に掛けて尨犬を瞰下してゐる。)
2. Er steht **am** Fenster und drückt sich an **das** Fensterbrett.
   (彼は窓邊に立つて、窓臺へ身をすり寄せる。)
3. Er dringt in **ein** Wäldchen, welches sich auf **seinem** Gute befindet.[15]
   (彼は彼の地所にある一つの小さな森の中へ分け入る。)

4. Er trat vor **den** König und stand unerschrocken vor **dem** ganzen Hofe.[16]

(彼は王の前へ進み出た、そして文武百官の前に神色自若として立つた。)

5. Er sah auch unter **den** Tisch, aber seine Uhr war auch unter **dem** Tische nicht zu finden.

(彼は机の下も見たが、机の下にも彼の時計は見出せなかつた。)

6. Hinter **dem** Rücken wird natürlich manches gemunkelt,[17] aber glücklicherweise kann niemand seine Ohren hinter **den** Rücken kehren wie ein Hase.

(勿論背中の邊ではよく變な噂がされるとしたものだが、幸にも人間は兎の樣に耳を背中の方へ向けるわけには行かないのでね。)

7. Neben **ihm** steht niemand, auch niemand wagt sich neben **ihn** heran.[18]

(彼と肩を並べる者はない、また敢て彼の側を侵さんとする者もゐない。)

8. Er tritt zwischen **die** zwei Gegner und sinnt auf einen Ausgleich, der zwischen **ihnen** möglich wäre.[19]

(彼は敵味方の中へ割り込んで、兩者の間に可能なる調停法に腐心する。)

9. Ein Luftschiff schwebt über **dem** Ozean, es fährt über **ihn** hin[20] nach Amerika.

(一艘の飛行船が大洋の上に浮んでゐる、それは海を越へてアメリカの方へ飛んで行くのである。)

文法家によると、außer (の外に) をもこれらの一つに數へる人がゐます。なるほど außer ihm (彼以外には) は三格支配で、außer Kraft setzen (無効にする) außer Stand setzen (不可能にする) の名詞は各々四格に見る可きですが、熟語の外には餘り使はれないから、單に附記しておくに止めます。

237. 前置詞の抽象的意味

具體的空間的な意味を持つてゐる前置詞が、抽象的な意味に用ひられるのは極く自然な成り行きです。次にその中でも最も普通なものを選んで、例で説明しませう。

(1) über (四格) は英語の about (……に就て)。

Seine Meinung [**über** die sozialen Fragen] ist mir nicht sympathisch.

[社會問題に關する] 彼の意見は私には同感できない。

(2) neben (三格) は、「……以外に」の意になる。即ち außer (三格) と同意。

[**Neben** seinem gewöhnlichen Charakter] hat er auch noch einen zweiten, der sich nur sehr selten zeigt.[21]

彼は、[彼の普通の性格以外に] なほ第二の性格を持つてゐるが、それはほんの稀にしか現はれない。

(3) in (三格) の次に主語を受ける物主代名詞が來ると、原因を意味することがある。

Die Liebenden können sich [**in** ihrem Eifer] nicht darum kümmern, was sich die Leute von ihnen erzählen mögen.[22]

愛し合つてゐる同志は、[あまり御精が出すぎると、] 人が自分たちの事を何と噂してゐようと、そんな事に構つてはゐられない。

(4) unter (三格の際も四格の際も) は、英語の among (……の間に、……の仲間に)。

[Unter den gewöhnlichen Soldaten] sind auch Doktoren, Professoren, Künstler und andere berühmte Leute.

[普通の兵士たちの仲間にも.] 博士、教授、藝術家、其他有名な人たちがゐる。

以上はほんの所謂片鱗です。二格、三格、四格のみ支配する前置詞については、その抽象的な意味をも述べて來ましたから玆では省きます。

238. **前置句なるものもあり** 數個の單語から成つた前置句といふものも在ります。前出の inmitten (……の眞只中で) や anstatt 等も、分解すればやはり前置句なのですが、既に一字に書き始めるとそれを前置詞と云ふのです。前置句だけは殆んど無限にあつて、その凝結の程度も種々ですから、それを全部掲げる事は出來ません。以下は單に例證として (beispielshalber) 念のために數例を示すに留めます。

in Bezug auf (四格)	に關して
in Hinsicht auf (四格)	(同上)
im Gegensatz zu (三格)	とは反對に
in Gemeinschaft mit (三格)	と共同に
zu Gunsten (二格)	に利ある如く
ohne Wissen (二格)	に隱れて [內緒で]
an die (der) Stelle (二格)	の代りに
in Einklang mit (三格)	と一致して
in Übereinstimmung mit (三格)	(同上)

239. **前置詞使用上の細則** 今までに述べる個所のなかつた個々の注意を玆にまとめます。

(1) bis の用法。—— bis の次にはすぐ四格の冠詞を附けてはいけない事になつてゐます。それ故、副詞、副詞的名詞 (Abend 等) 固有名詞、數詞等の際にのみ直かに bis Abend, bis Berlin, bis 10 等とし、普通の名詞の場合には、後にもう一つ前置詞を附けます。

bis in den Wald	森の中まで
bis auf den Markt	市場まで
bis zum Winter	冬まで
bis an die Kehle	喉元まで
bis über die Ohren	耳の上まで

(2) ohne の用法。ohne に二つの意味がある事は、四格支配の時に掲げておきましたが、その二つは大抵の場合冠詞があるかないかで區別されます。

1. ohne Familie — 家庭なく
2. ohne die Familie — 家庭さへなければ / 家庭が無かつたら

(3) 或人の「家」、或人の「許」を意味する前置詞が zu, bei と二個あります。兩方とも三格支配ですが、zu は方向を指し、bei は靜止狀態を指します。

Er bleibt bei mir.	彼は私の許に留る。
Er kommt zu mir.	彼は私の宅へ來る。

(4) 三格か四格かの場合に、三格は靜止狀態であると云ふのは少し語弊があります。次のやうな、その位置內に終始する運動もあるわけですから。

Er geht im Zimmer auf und nieder.[23]

彼は部屋の中を行きつ戻りつする。

Er schwimmt im Teich herum.[24]

彼は池の中を泳ぎ廻つてゐる。

(5) 從つて、たとへば或る人の横を並んで歩くといつたやうな際には、兩方ともが動きつつあるのですが、相對的には靜止ですから、その或人から見た一點を指す前置詞は三格です。斯う云ふ場合には必ず hergehen, herlaufen, herfahren 等、her- の分綴を有する動詞を使ひます。(her- は、一定の單調な不斷の運動を指す特種の任務を持つてゐます。—— やかましい前綴なるものの諸種つ複雜な場合が、斯ういふ風にして段々わかつて來るのです。)

Das Kind trippelt **neben** der Mutter **her.**

小兒が母と並んでちよこちよこと歩く。

Der Wolf schleicht **hinter** ihm **her.**

狼が彼のうしろから窃と跟けて來る。

Der Bahnhofsvorsteher schreitet **vor** Seiner Majestät **her.**

驛長が陛下の御先導を申上げる。

註——此の意味の her は、つまり einher- といふ前綴と同義です。einhergehen (ぶらぶらしてゐる、その邊をうろつく) einherschlendern (ぶらつき歩く) einherstolzieren (練つて歩く) einherziehen (ぞろぞろと行列して行く)

(6) von hinter (うしろから) von unter (下から) といふ代りに、單に unter, hinter と云つて、その代りに hervor の前綴を有する動詞を用ひます。

Ein Räuber tritt **hinter** der Hecke **hervor.**

一人の盜賊が生籬の後「から」現れる。

Ein Pudel kriecht **unter** dem Tische **hervor.**

一匹の尨犬が机の下「から」匍ひ出る。

(7) hinein-, hinaus-, herein-, heraus- 等の前綴を持つ動詞には、空間的關係を無視して zu を用ひる傾向があります。始めは入口なり出口なりを zu で現はしたのが、おしまひには場所全體に zu を附けるやうになつてしまつたのです。これも凝結形式 (erstarrte Formen) の典型式なものです。次に、段々と變つて行く順序通りに並べて見ませう。

Er geht **zum** Tore **hinein.**

彼は門から中へ這入る。

註——日本人は「門から」と云つて、「から」が正しいと思つてゐるし、ドイツ人は「門へ」と云つて「へ」が正しいと思つてゐる。いづれが正しいか Gott weiß! (誰が知らう!) ひよつとするとドイツ人の方が論理的かも知れません。Wer weiß! (さうで無いとは斷言できない!)

Der Dieb springt **zum** Fenster **hinaus.**

泥坊が窓から飛び出す。

今度はどうも日本語の方に軍配を上げたくなりますね。pure Einbildung (單なる慾目) かも知れません。それとも Vaterlandsliebe, Patriotismus (愛國心) ですか。

Der aufgebrachte Vater wies den verlorenen[25] Sohn zum Zimmer hinaus.

赫怒せる父は不良の忰に部屋を出て行けと命じた。 (weisen は右手を水平にあげて行手を示すこと。)

さあ斯うなるとドイツ語はどうかしてゐる。「部屋から出ろ」を、「部屋へ出ろ」と云ふ。Das ist mir zu bunt! (こいつはいくら何でもあんまりひどい!) まるで反對の云ひ方をする!

苦情があつたらドイツ人に言つて下さい。凝結形式といふ奴は尖鋭化するとこんな事になつて來るのです。

日本語でもそんな事があります。たとへば私が盛に云ふ「語尾をとる」といふ文句です。ある時教室で、生徒が、「父の」を、語尾をつけるのを忘れて des Vater と云ふから、des と云へば名詞も語尾を取らなければ不可ないと云つたら、des Vat と云つた。-er の語尾を取つてしまつたのです。

語尾を「採る」とでも書けば間違はないかと思つて時々さうしてゐますが、「語尾をとる」といふ文句がまだ完全に凝結し切らないので、分解して考へられるのも無理はないと思ひます。反對になるから恐ろしい。

最後に zu……hinaus の極端な例をもう一つ掲げておきませう。これは熟語です。

Der König wies ihn zum Lande hinaus.

王は彼を國外に追放した。

(8) für と gegen (又は wider) とをよく對照的に用ひますが、für は「…に贊成」の意、gegen と wider は「……に反對」の意です。

Wer wäre nicht gegen den Alkoholismus an sich?

飲酒の害毒そのものに對しては誰だつて反對しないものはない。

Sind Sie für die sogenannte „Einschränkung"?

君は所謂緊縮なるものに御贊成ですか?

Die Debatten für und wider den Antrag hatte kein Ende.

提案に對する贊否の論爭は涯しなく繼續した。

(9) bis auf といふのが、相反する二つの意味を持つてゐます。 bis auf den letzten Abschnitt と云ふと、「最後の一章に至るまで」か、「最後の一章だけを除いて」か、前後の文脈がなくてぽつんとそれだけ聞いたのでは全然わからないのです。 文脈 (Kontext) または前後の關係 (Zusammenhang) といふ奴は非常に必要です。文脈を離れて意味なしと云ふも敢て過言ではないのです。

けれどもこれだけは最初から言ひ切る事が出來ます。 即ち、「……に至るまで」の際には bis auf の次に來る名詞が、なるべく輕くなくてはいけない。何氣なく文脈の中へ這入つてしまつてゐる必要がある。「……を除いて」の際には、特にその存在を抽出して、出來るなら一度コンマで切つて文章外に出してしまふ事が必要です。

Ich habe den dicken Band bis auf die letzte Zeile gelesen.

私は此の分の厚い本を最後の一行まで讀んでしまつた。

最後の一章なぞといふと間違へる惧れがあるから、一そ受け取り易いやうに Seite (頁) または Zeile (行) とするのが好いのです。 これはまあ文法 (Grammatik) ではなくて Rhetorik (修辭學) の問題に屬しますがね。

Ich habe den dicken Band durchgelesen, bis auf den letzten Abschnitt.

私は此の厚い本を讀んでしまつた、但し最後の一章は殘して。

此の際は賢明にコンマを打ちました。 これならばたとへ口で云つても、durchgelesen といふ分詞の位置でわかります。

一體に、强めんとする句は、先置 (Spitzenstellung) を行ふ以外、補足的追加 (Nachträgliche Ergänzung) を行つても好いのです。

Hier ist der alte General, der im Weltkriege unzählige Siege erfochten hat für Gott und Vaterland.

これが大戰中神と祖國のために無數の勝利を贏ち得たる老將軍であります。

unzählige Siege (無數の勝利) がかなり强調されるから、その次の für Gott und Vaterland をすぐその次に持つて來ると文章が重厚になる、そこで erfochten hat (贏ち得た) と一旦文を切つて、追加的に後へ持つてきます。かう云ふ事は、ドイツ語の發音になれて、朗々と文章が讀めるやうになると自然會得できるのですが、わからない中は何だか文法を無視してゐるやうで變に思はれるのです。

その外、關係代名詞等で展げようと思ふ句は、構文法に構はず文外に出してしまひます。(即ち動詞よりも後におきます。)

Der Vater hatte dem Sohne die Erlaubnis, einen Ausflug zu machen, gegeben, **mit der Bedingung**, daß dieser sich nicht allzu[26] sehr von der Stadt entferne.

父は、倅に、あまり遠く市から離れない「といふ條件で」遠足の許可を與へたのであつた。(過去完了 hatte は、「……たのであつた」で、單なる「た」ではありません。)

前の例では erfochten hat の次にコンマが無く、後の場合ではコンマがあります。 これは、如何にも追加しますと云はんばかりに念を入れる時に限つてコンマを打つのです。 So weit die Entgleisung. (脱線はこれで終)。——(本當のドイツ語では脱線の事を Abstecher 寄り道と云ひますが。——これもまた ein Abstecherchen 又は Abstecherlein.)

240. 前置詞が後に曳く追加詞

例へば「山から」といふのを、單に vom Berge では何となく力が足りない。 そこで句總體をくつきりと浮び出させるために、後に herab, hinab (下へ) を附けて、vom Berge herab, vom Berge hinab と云ひます。 斯ういふ助けの詞を前置句の後曳する追加詞と云ひます。

nach der Stadt **zu**	市の方へ向つて
vom Dache **herunter**	屋根から下へ
auf ihn **los**	彼をめがけて
um den Teich **herum**	池のまはりをぐるつと
zum Fenster **hinaus**	窓から外へ

am Hause **vorbei**	家の前を通つて
ins Wasser **hinein**	水の中へざんぶと

大體わかるでせうが、この追加詞なるものは大抵の際動詞の前綴と一致するのです。Er geht auf sie los（彼は彼女に喰つて掛かる）と云へば、los は auf の追加詞でもあり losgehen の分離した接頭語であるとも云へます。

ところが凝結形式になると必ずしもさうならないのがあります。これらは特に覺えなければなりません。

von 1 Uhr **ab**	かつきり一時から
von nun **an**	唯今限り
von heute **an**	今日限り
von Jugend **auf**	子供の時からずつと
von klein **auf**	(同　上)
von Kindesbeinen **an**	(同　上)
von Grund **aus**	根底から

特に注目すべきは vor sich hin です。それは、自分だけで、自分だけを相手に、誰にといふ事はなく、と云ふ變な意味です。

Er sieht vor sich hin.
彼はぼかんと前を見てゐる。

Er singt vor sich hin.
彼は鼻歌を歌つてゐる。

Er spricht vor sich hin.
彼は獨語を云つてゐる。

此の vor sich は、實は für sich なのです。百五六十年も前までは、für と vor との區別がはつきりしないで、vortrefflich（天晴れな）を fürtrefflich なぞと云つた時代があつたのです。今では vor sich をやはり自分の前と考へますから、vor sich hinsehen（ぼかんと前を見る）等の際にはそれで丁度好いわけです。（古い物を讀む時には心得ておくべきです。）

241. 前置詞と指示詞、疑問詞、關係代名詞との結合

これは、各々第二卷の關係代名詞、指示詞の章に掲げておいた事ですが、復習しながら一寸纏めて置きます。

was との結合 [關係代名詞、疑問詞]

	疑問詞	關係代名詞	
wozu	何のために	そのために	
worauf	何の上に	その上に	
worin	何の中に	その中に	この區別に注意！
worein	何の中へ	その中へ	
worum	何の周圍に（爲めに）	その周圍に（爲めに）	
warum	何故に	(無)	

das との結合

daran	それに接して
darauf	その上に
danach / darnach	その後[のち]に
dahinter	そのうしろに

dies [之れ] との結合
(hier- となつて結合す)

hierzu	このために
hierauf	この上に
hierin	この中に
hierbei	このそばに、この際に
hiervon	これに就て

これらもすべて凝結形ですから、これに倣つてどしどし製造してはいけません。 daſeit (それ以來) なんてのは御法度です。 その代りに ſeitdem (それ以來) といふ字が別にあると云つたやうな譯です。 在來言語は、エスペラントとはちがつて、たとへば沙漠のやうに何處を通つても好いと云つたやうなものではありません。 路もあれば、藪もあり橋もかゝつてゐれば坂もあり、街道のない所には拔路があると云つたやうなわけで、つまり地形を踏査した上作製した地圖が文法ですな。 習慣！ すべてが習慣です。

242. **動詞、形容詞等の前置詞支配** これはもはや一般的規則 (allgemeine Regeln) を生命とする文法の範圍ではありませんが、とにかく斯ういふ現象があるから注意しろと云つて數へるだけです。それ以上の事は多讀によつて段々と語彙を豐富にして行くのみです。

先づ動詞の前置詞支配。次に二三例をあげませう。(これも凝結現象です。)

auf etwas beſtehen	ある事を固持する。
in etwas zerfallen	に分類される。
mit etwas zu tun haben	を相手にする。
etwas für etwas halten	を以て……と爲す。
an etwas glauben	或事を信ずる。
auf etwas kommen	或事を思ひ附く。
einen um etwas bringen	或人から或物を奪ふ。

ところで、上例の etwas に何か決まつた名詞が這入つてきて、それ以外の名詞を入れることが出來ないとなると、それは凝結形式が尙ほも進んでこんどは熟語 (Redensart) または成句 (fertiger Ausdruck) に結成したと云ひます。

in Stand ſetzen	可能にする
in Ehren beſtehen	立派に及第する
ums Leben bringen	殺す
aufs Spiel ſetzen	賭する
jemandem in die Karten gucken	或人の內幕を見すかす

die Rolle ſpielen	役を演ずる
durch die Finger ſehen	大目に見逃がす

それに何か深長な意味が這入つて來ると、これを俚諺的熟語 (ſprichwörtliche Redensart) と云ひます。

das Kind mit dem Bade gießen.
小供を湯と共に流す。
(小失の爲めに大得を一蹴する)

jemand auf[27] den St.-Nimmermehrstag beſtellen.[28]
或人に聖ニムメルメール祭の日にでも來いと云ふ。

Nimmermehr は「決して」といふ事で、つまり來年の二月三十一日にでもいらつしやいといふ事です。 日本では直ぐ盆とか正月とか云ひますが、西洋人には舊敎の聖者の祭日が曆の上で名高いから、例へば大晦日の事を Silveſterabend (聖ジルヴエステル祭) といふやうに、ほぼ時期を指す時にはすぐ舊敎曆を用ひます。 學校の三月末の休みなぞは、復活祭の休み (Oſterferien おーステルフエーリエン) と云つて夏休み (Sommerferien) と區別してゐます。 玆では、「名無しの權兵衛節に來い」とでも云ひますか。 (邦語の一昨日來いと同じ理)

不定形でなく定形の動詞になると、これは俚諺 (Sprichwort) と云ひます。

Guter Rat kommt über Nacht.[29]
思案は寢て待て

Eile mit Weile.[30]
急がば廻れ

Morgenſtunde hat Gold im Munde.
朝起きは三文の德

Hunger iſt der beſte Koch.[31]
空腹は三國一の料理番

註——朝の時刻が口に黃金を持つと云ふのは、一口喋舌るたびに口から金貨を吐くといふ娘の出てくる童話がある、それの引喩 (Anſpielung) です。

次に形容詞の格支配、これも二三見本をならべるだけにします。

stolz auf etwas sein	或事を鼻に掛ける
in etwas **bewandert** sein	或事に通曉してゐる
reich an etwas sein	或物に富む
arm an etwas sein	或物が貧弱である
von etwas **abhängig** sein	或物に依屬する
von etwas **frei** sein	或物を混へない

243. **als と wie** 後見人として (als Vormund) 惡魔の如く (wie ein Teufel) 等の als, wie は、用ひ方は前置詞の通りですが、文法の方では接續詞といふ事になつてゐます。

また此の二つは特に格支配をしません。その先行詞に從つて、何格にでも變るのです。

Ich sage es dir **als dein Busenfreund.**
僕は君の親友としてその事を君に云ふのだ。

Ich sage es dir **als meinem Busenfreunde.**
僕はその事を僕の親友としての君に云ふのだ。

244. **熟語に關する重要な注意** たとへば歸宅することを nach Hause gehen と云ひますが、斯う云ふ種類の前置詞を伴ふ動詞の熟語が隨分多い。さう云ふ際には、十中八九までは、名詞に冠詞が附いてゐません。熟語となつて結成した名詞は必ず冠詞を省くとは言へませんが——aufs Spiel setzen [賭する] 等があります——その反對に、理由なく冠詞の省いてある場合はすべて熟語であると云へます。

nach dem Hause と云へば、誰の家でも宜しい、とにかく一つの家屋に向つて〔近づく〕と云ふ事になりますが、nach Hause と云へば、それは必ず自分の家、自宅、しかも家屋そのものではなく、橋の下に住んでゐようと、それとも上野の公園で西鄕さんの銅像の下に住んでゐようと、とにかく自分の塒と決めたところへ行くこと、即ち單に「歸る」といふ概念だけが遊離して結成してしまつてゐるのです。

第三十二講

話法の助動詞(意味)

話法の助動詞 (modale Hilfszeitwörter) といふのは、たとへば können, müssen 等七個の助動詞の事で、時稱の助動詞 (temporale Hilfszeitwörter) 即ち完了形を作る haben, sein, 未來を作る werden の三個に對してさう謂ふのです。話法といふ譯語は蘭學時代の遺物ですが、本當は樣式の助動詞とでも譯す可きでせう。

此の七個の助動詞は既に第一卷に於て全部紹介濟みになつてゐますが、aus dem Auge, aus dem Sinn (去る者は日に疎し) と云ふ事があるし、それに、隨所に挿入してあつたのでは、纏まつた智識が得られませんから、玆に改めて systematisch (組織的) に論じ、同時に補追拾遺 (Nachlese 落穗拾ひ) を行ひます。

245. **können** können の最も普通の意味は、「……する事が出來る」です。(er kann gut deutsch sprechen 彼はドイツ語がよく話せる) けれども、それが一轉して、可能性 (Möglichkeit) を意味する樣になります。これは特に例をあげる必要があるでせう。

Das baufällige Haus **kann** jeden Augenblick einstürzen.
(朽ち果てた家屋は何時なんどき崩壞しない「とも限らない」)

Die chinesischen Truppen **können** womöglich auch plündern, morden und brennen.
(支那の軍隊は、稍ともすればまた掠奪、殺人、放火をも仕兼ねない。)

だから「そりやあさうかも知れないね」と云ふ時には色々な言ひ方があります。

Es **kann** leicht möglich sein.
Es **wäre** sehr gut möglich.

Mag sein!
Kann sein! (無い話ではない)
Wer weiß! (さうでないとは斷言できぬ)

können は助動詞として用ひる外に、本動詞 (eigentliches Zeitwort) としても用ひます。(Er kann Deutsch あいつはドイツ語ができる。)

註——細かい事になりますが、會話の際、相手の意を伺ふ時には好んで können を用ひます。(Kann ich Ihnen behilflich sein? お手傳ひ致しませうか?)

246. **dürfen** 英語の dare (敢てする) に相當する字ですが、意味は一寸違つて、「……することが許されてゐる」即ち「……してよろしい」「……しても構はない」の意です。(Ein unumschränkt herrschender Monarch darf alles tun, was ihm gefällt.——絶對無條件に支配する專政君主は、何でも自分の意に投じた事をして宜しい。)

故に、禁止の意味の時には nicht dürfen (nicht sollen, nicht können も使ひます) であつて、英語の must not のやうに、nicht müssen ばかりは用ひません。たとへば、「汝盜む可からず」は Du darfst nicht stehlen または聖書の文句によると Du sollst nicht stehlen です。Du mußt nicht stehlen と云ふと、「ねばならぬ」の丁度反對、即ち「ねばならぬ事はない」即ち「おまへはまさか盜みをするにも及ぶまい」「盜まなければならないといふのではあるまい」なぞと、全然別な意味になる事がありますから特に注意を要します。

dürfen には其の他「……しさへすれば宜しい」——否定ならば「するには及ばない」と云ふ意味があります。即ち brauchen といふ助動詞的動詞と同じことになります。

Ihr Herz war so voll, daß man ihr nur ein ganz unbedeutendes Wörtchen zu sagen **brauchte**, um sie weinen zu machen.

彼女の胸は一杯だつたので、ほんの一言何でもない事を云つても、もう泣き出すのであつた。

wörtlich (文字通り) に譯すると、彼女の心は (ihr Herz) 彼女を泣かせるためには (um sie weinen zu machen) ただ一つの全く無意味な一寸した言葉を (nur ein ganz unbedeutendes Wörtchen) 言ふ事を必要とした (zu sagen brauchte) 事ほど左樣に (so……daß) 一杯であつた (war voll).

上の例は brauchen を使つたのですが、こんどは dürfen を用ひて、同時に言ひ方を變へて見ると。

Man durfte ihr nur ein Wörtchen sagen, so weinte sie schon.[32]

最後に dürfen の第二式接續法 dürfte が könnte (かも知れない) と同意である事は既に第二式接續法の所で述べて置きました。助動詞の第二式接續法はすべて獨立した一つの助動詞と見て覺えなければならないのです。

247. **mögen** mögen は英語の may で、元來は können と同じ意味だつたのです。それは möglich (可能なる) と云ふ形容詞や、die Macht (威力) と云ふ名詞にその名殘を留めてゐます。ところが現在では用法がかなり多岐に亘つてゐますから、項目に分つて述べる必要があります。

(1) 「……らしい」と云ふ想像の意味。

Er mag es erraten haben.
彼奴は其の事を察したらしい。

Er mochte mehr oder weniger darum wissen.[33]
彼奴は多少その件に就いて關知する所があるらしかつた。

(2) wollen と呼應して、「……するならしろ」と云ふ、挑戰的、乃至啖呵的とでも云つたやうな語勢を示すことがあります。

Er mag sagen, was er will.
何とでも云ひたい事を云ひやがれ。

Er mag sterben, wenn er will.
死にたけりや死ね。

Es mag geschehen, was da[34] will.
なんとでも成るやうに成れ。

Mag kommen, wer da will.
誰が來ようとままよ。

Es mag regnen, wie es will.
どんなに降つても構ふものか。

Er mag gehen, wohin er will.
あんな奴は何處へ行つたつて好い。

從つてこれを過去形にする事も出來ます。その際には例の所謂 consecutio temporum (時稱の一致) なるものがその權利を要求して、日本語では變ですが、相棒の wollen も過去にならなければ不可ません。

Er **mochte** sagen, was er **wollte**, der Polizeidiener gab ihm kein Gehör.
彼が何と云はうと、警官は決して耳を貸さなかつた。

(3) wollen と相呼應せずとも、mögen は動ともすれば突つ離すやうな語氣を帶び勝ちです。

Das mag er selber wissen.
そんな事は御當人が知つてゐようさ。

Du magst dich damit befassen, mich geht es nichts an.[35]
そんな事はおまへだけで係り合つてゐれば澤山だ、我輩には何の關係もないよ。

(4) 今までのとは全然違つた「……を好む」といふ意味があります。本動詞として用ひる際は必ずさうです。

Ich mag nichts essen.
俺はなんにも食ひたくない。

Ich will, aber ich mag nicht.
「氣は」あるが、「氣が進む」といふ程ではない。

註——なぜこんなに元來の意味を離れてしまつたかと云ふと、或物、或人が好きであると云ふ熟字に einen gern leiden mögen といふのがあります。文字通りには、或人を (einen) 好んで (gern) 辛抱することが (leiden) できる (mögen) です。辛抱できると云ふのなら、やつとの事で我慢が出來る位の程度なのかと云ふと、決してさうではない、むしろその反對で、大變好きだと云ふ事です。かう云ふ風に、强烈な意味を弱い

語法で出すのを Litotes と云ひます。どうだ、此の魚はうまいか、と問はれて、「惡くないね」と云ひながら平げるのなんぞは正に Litotes です。「緩化語法」とでも譯しますか。Hyperbel (誇張語法) の反對です。

その gern leiden mögen が、何時の間にか gern mögen になりました。

Ich mag ihn gern [leiden]
俺はあいつがすきだ。

だから普通は gern と共に用ひます。ところがそのうちに、leiden をのけて用ひることが平氣になつて、遂には動詞の不定法まで置き得るやうになり、mögen だけが「好む」であるかのやうな形になつて、遂には wollen と同じやうな概念に結成してしまつたといふわけです。

(5) mögen の第一式接續法は、「何とぞ……するやうに」の意になります。(本卷 207 の (1) を見よ。)

Möge dich das Glück nie verlassen!
なにとぞ幸運がおまへの身を去りませぬやうに!

(6) 第二式接續法 möchte は英語の should like (……したい)——これも既に述べました——(本卷 216 の (6) を見よ。)

Ich möchte sie kennen lernen.
私はあの女と知合になりたい。

248. **wollen** wollen で先づ最初に斷はつておかなければならないのは、英語の will とは完全に一致しないと云ふ事です。英語では、特別に未來の助動詞 (ドイツ語の werden) と云ふものがないから、人稱によつて shall と will とを交々用ひて未來を現はしてゐます。

英語の未來時稱

I shall come	we shall come
you will come	you will come
he will come	they will come

shall は多少義務の色彩を帶びる傾向があり、will は意志を現はしますから、全然自分の意志に係らず生じて來る運命を云はうとすると、未來助動詞のない英語は、大いに困つて、苦しまぎれにこんな慣例を結成させてしまつたのです。

ドイツ語には、werden といふ未來專門の助動詞がありますから、wollen は其の本來の意味のみを保有し、「……せんと欲する」と云ふのが中心概念で、時に例外として後に述べるやうな使ひ方をします。

(1) 本來の意味。たとへば ich will Kaufmann werden (俺は商人にならうと思ふ)。

(2) 本來意志を有しない無生物に對して、我々側の利害關係に看點を据ゑて wollen を使ふことが無いではありません。

Die Arbeit will gar nicht mehr von der Stelle (vorwärts gehen).[36]

仕事がもはやどうも思はしく捗つて「呉れ」ない。

Die Fensterflügel[37] wollen sich gar nicht auftun.

窓がどうしても開「きやがらねえ」。

(3) 將に斯う斯うせんとする、といふ意味になる事があります。

Die Großmutter ist eingeschlafen, und will immer wieder vom Stuhle herabfallen.

お婆さんが眠り込んでしまつて、又しても又しても椅子から落ち「さうになる」。

(4) gesehen haben (見たこと) gehört haben (聞いたこと) 等、所謂過去の不定法なるものを伴ふ際には、必ず「……といふ事を主張する」「と稱する」といふ意味になります。必ず過去の不定法を伴ふ所に注目。

Er will ein Gespenst gesehen haben.

彼奴は幽靈を見たと稱してゐる。

Er will zweimal nach Amerika gefahren sein.

彼奴は二度も亞米利加へ行つたと云つてゐる。

此の wollen の用法中、「欲する」といふ第一項の元來の用法と、最後の「主張する」といふ用法とは、sollen の用法の丁度裏にあたるのですから、次の sollen の用法には必ず wollen を思ひ出して下さい。(これは非常に重要!)

249. **sollen** sollen は必ず wollen の裏です。sollen の定形の主語になつてゐる名詞又は代名詞——たとへば ich soll の ich——が、他の何人か、もしくは他の何物かから、意志を受け蒙つてゐる事を意味します。大變むつかしい樣だが、次の諸種の場合を考へ合せてみれば何でもなくわかります。

(1) 人みなが所有する道義心 (moralisches Gefühl) 一般の風習 (allgemeine Sitte) 健全なる常識 (der gesunde Menschenverstand) 等が左あらん事を要求 (wollen) してゐる際には、その要求を向けられてゐる人が sollen する (義務を有する) と云ひます。

Man soll nicht stehlen.

盜みをすべからず。(と道義心が要求してゐる。)

Ich weiß, was ich als ein ehrlicher Bürger[38] tun soll.

私は、一個の堂々たる市民として何をなす可きかを知つてゐる。(これは多分習慣の要求でせうな。)

(2) その場合場合の事情が要求する事柄にも sollen を使ひます。

Ich weiß nicht, was ich tun soll.

どうしたら好い [と云ふのだ] か見當がつかない。

Was soll aus ihm werden?

あいつは一體どうなる [といふの] だらう?

(3) 誰か或る一定の人が欲求してゐる際にも用ひます。

a. **Soll** ich es tun? それを致しませうか?
b. [**Wollen** Sie, daß ich es tue?]

a. **Soll** die Tür zugemacht werden? 扉を閉めませうか?
b. [**Wollen** Sie, daß die Tür zugemacht werde?]

(4) 主語が何か人間以外のものでも、wollen で云ひ表はせるやうな場合には、その逆で行くと sollen になります。

a. Was **soll** das heißen?[39] それは一たい何の事[謂ひ]だ?
b. [Was **will** das sagen?]
c. [Was **will** man, daß das bedeute?

註——c. は、それが (das) 何を (was) 意味せよ「と」(bedeute 接續法第一式)[ことを] (daß) 人は (man) 欲するか (will?)

此の構造は疑問文の構成を述べる際に說明します。[第四卷 291]

此の場合 sollen と wollen とが殆んど一致してしまふところに注目。

(5) 自分が欲する際にも使ひます。

a. Er **soll** sterben! 彼奴は死す「可き」だ。
b. [Ich **will**, daß er sterbe.]

a. Es **soll** gewiß anders werden. (それは必ず他の樣になる可きだ。)
きつとおれが模樣をかへてやる。(待つてゐろ。)
b. [Ich **will** das ändern.][40]

a. Du **sollst** es haben. (汝はそれを持つ可きだ。)
よし、それをおまへにやる(から待つてゐろ。)
b. [Ich **will** es dir geben.]

(6) Der Zufall will, daß…… 偶然 (運命) が斯く斯く斯樣な事を欲する、即ち、「たまたま」といふ云ひ方がありますから、從つてその逆が sollen で云へるわけです。その際には、とにかく運命の事だから非常に疑惑の意が差し込む。其所で、好んで第二式接續法 sollte を用ひます。

a. Wenn er [zufällig] sterben sollte, —
もし [萬が一] 彼が死ぬやうな事でもあつたら。
b. [Wenn der Zufall will, daß er sterbe.]

a. Sollte er so etwas getan haben?
あいつがそんなことをしたのだらうか?
b. [Wollte denn der Zufall, daß er so etwas tat?]

(7) wollen と過去不定法 (gesehen haben 等) とが合すると、「……と稱する」といふ意味になる事は既に wollen の最後の項で述べておきました。したがつて其の逆が sollen で云ひ得ます。

a. Er **soll** eine Schlange gegessen haben.
あいつは蛇を食つたさうだ。
b. Er **will** eine Schlange gegessen haben.
あいつは蛇を食つたと自稱してゐる。

a. Sie **soll** ihren Mann geprügelt[41] haben.
あの女は亭主をぶん毆つたつてね。
b. Man **will**, daß sie ihren Mann geprügelt habe.

斯う云ふ、噂を表はす sollen と、本人の吹聽を意味する wollen とは、他の場合と混同されないやうに、なる可く過去不定法と共に用ひることになつてゐますが、他の用法と混同する怖れのない時には單なる現在の不定法とでも結びつきます。

a. Er soll mich kennen.
あいつは俺を知つてゐるさうだ。
b. Er will mich kennen.
あいつは俺を知つてゐると云つてゐる。

この際 kennen (知つてゐる) は、kennen lernen (知合になる) 洞察する、人がわかる (erkennen) 等とは違つて、狀態をさす所謂 Durativa (狀態動詞) に屬しますから、Er will mich kennen と云つても、彼は私と知合ひになりたい、といふ場合と混同する怖れがないのです。

註——sollen と wollen との關係を註解するために哲學の術語を例に引きます。名詞的になつた das Sollen は、哲學上の術語としては、「當爲」と譯され始めてゐます。これは語學にも關係のある事ですが、Rickert によると、たとへば一つの文章の持つてゐる意味 (der Sinn eines Satzes) が、𝔄 か 𝔅 か、どちらかわからないと云ふ際には、萬人の私見の統計的綜合がその 𝔄 または 𝔅 を決定するのではなく、其處には萬人の意見如何にかゝはらず嚴然として 𝔄 か 𝔅 かどちらかが「存」する、即ち「眞である」即ち「眞であらねばならない」——星の世界に人間がゐるかどうかは自然科學的「事實」の問題であるが、文の意等もやはり或種の「事實」である。それは現在「實在

する」といふ意味で、また急に突きとめ得られないために茫然呆々として底止するところを知らないと云ふ意味では、火星人の存在問題と同じだが、その存在樣式に至つては根本的にちがふ。認識の對象、即ち眞理は、火星人の場合にあつては空間的事實、人間の心理的現象にあつては時間的事實、文章の意味が A の方か B の方かの問題に至つてはそれは時間空間の外にはみ出した事實、即ち sollen である。それが實際どう「である」かが眞理なのではなく、(wie ist es?) それがどうあらねばならぬか (wie soll es sein) が眞理なのである。換言すれば Wie will es die überindividuelle Vernunft? 超個人的な理性が這般の關係を如何樣に要求するか、これが認識の對象、即ち俗に所謂眞理 (Wahrheit) なのである。——これが Rickert の Sollen「當爲」で、荒つぽく逆にして云ふと理性の要求 (Wollen) です。(Postulata—所謂要求、—Hypothese 假定とはすつかり違ひます。これはまあ一寸厄介ですから止します。) とにかくドイツの哲學は文法と大關係があります。

250. **müssen** müssen を粗雜に「……ねばならぬ」と云ふと、sollen との區別が曖昧になりますから、いやにやかましい樣だが、「……せざるを得ぬ」と譯しておきます。周圍の事情、自然界の法則、人間の强制、論理上の歸結、さう云つたやうな、とにかく拔き差しのならぬ何者かによつて斯く斯く斯樣の事をすべく餘儀なくされると云ふ時に限つて müssen を用ひます。

呑氣な男が親から金を貰つて大學へ來てゐる……といふよりは、一番確かな所だけ云ふと、「東京」に來てゐる。ところが學校へは決して行かない。Er soll zur Schule gehen「彼は學校へ行かねばならぬ」筈なのです。Der Vater will es「親父がそれを要求してゐる」のですからね。ところが、居場所が下宿で、學期末にはノートを貸して貰へるから、Er muß zur Schule gehen「學校へ行かざるを得ない」のでは決してない。どう致しまして! (im Gegenteil!)

ところがそのうちに女が出來る。金に困る。Da **muß** er stehlen. (すると盜まなければならなくなる。) 相手が困つてゐれば、無くても出さざるを得ない (er muß geben) 情死もする、(Liebestod sterben) 鎌倉の海岸に二人の足駄があつたし、前後の事情を綜合すると、Die beiden **müssen** ins Wasser gegangen sein どうも二人とも入水した「らしい」。これが論理上の歸結です。

一たいドイツ人は müssen を亂用します。ちよつとでも「當然の成り行き」といふ事態があると、好んで müssen を使ひます。母親が小供を連れて表へ出る。小供の事だから何でも見たがる。母親は思はず溜息を吐いて、Ach,

es ist zu neugierig! (まあ此の兒はなんて物ずきなんでせう!) Es muß alles sehen! (なんでも見ないと承知ができないのね!) と云ひます。それから、新派悲劇みたいなもの (Melodramen, Rührstücke メロドラマ、感傷劇) 等を見ると、ich mußte weinen (思はず泣かされた) と云ひ、センチメンタルになると矢張り Da mußte ich um nichts und wieder nichts weinen (何てことは無しにただもう何だか泣けましてねえ) なんて云ふ。

註—um は wegen (の故に) と同意。nichts を强めると、nichts und wieder nichts になります。

過去の場合も同樣で、ich saß vor meinem Schoppen und alle Viertelstündchen mußte ich abtreten. (私はジヤッキ〔酌器!……〕を前にしてとぐろを卷いてゐた、そして十五分間に一度は便所へ通つた)——通はねばならなかつたと考へると考へすぎで、要するに通つたと云ふ事です。大小便は、つまりドイツ語でも seine Notdurft verrichten (やむを得ざる仕儀を仕る) と申す通り、行かうと思つて行くのぢやありませんからね。大分さがつて來た樣だから脫線はこれで止します。

51. **lassen** lassen は英語の let です。使役の助動詞と云つてゐるのはその一部で、日本語の「せしめる」「させる」といふ言葉の持つてゐる一部をだけしか擔當してゐません。(次項の machen 參照)

(1) 「許す」「放任する」。

Die Kinder lassen mich gar nicht arbeiten.
子供たちがどうしても勉强させて呉れない。

Laß das Vergangene vergangen sein.
過ぎたことは過ぎた事としておき給へよ。

Ich lasse mir so etwas nicht zum zweiten Male sagen.
私はそんなことを二度とは云はせておかないぞ。

(2) 自分でしないで人にさせる時に使ひます。次の例を見ればわかりますが、müssen の場合と同樣、日本語より論理的に嚴密なだけで、わざわざ lassen を譯さない方が好いのです。忠實な飜譯ぶりをこんな助動詞にまで發揮するのは、かへつて原意を損ねて不忠實になる虞れがあります。伊太利語

に traduttore, traditore (翻譯家は裏切者なり) と云ふ語呂洒落がありますが、私はそれに對抗して、「多少裏切るが裏切らざる所以なり」もしくは「裏切らざらんと欲すれば裏切らざる可からず」とやりたいと思ひます。

Ich lasse mir einen neuen Anzug machen.

(私は洋服を一着こしらへる) 〔つまり、拵へ「させ」る〕

Er läßt sich ein Haus bauen.

(あの人が家を建てる) 〔つまり 建て「させ」る〕

Er läßt sein Erstlingswerk drucken.[42]

(彼が處女作を印刷に附する)

Er läßt Sie fragen, ob Sie zu sprechen sind.

(あの人があなたにお眼に懸かれるかと訊いてゐますよ)

印刷に「附する」なぞは、「附する」で lassen の意が出ますが、家や服の際は、まさか自分で造るわけもなからうから、日本語の表現法だつて立派なものです。logisch (論理的) でないにしても、節約的 (ökonomisch) 且つ簡明 (lakonisch) です。

(3) 上のとは程度だけの區別になりますが、再歸代名詞の四格、または三格を伴ふ lassen は、單に受身 (られる) と同じです。

Ich habe mir sagen lassen 〔過去分詞の代り、次講參照〕, daß Sie das letzte Jahr in Frankreich waren.[43]

なんでも昨年はフランスへおいでになつたとか聞きましたが。

Er hat sich anbrüllen lassen.

あいつはがなりつけられた。

Ich ließ mir einen Paß geben.

私はパスを交附された。

Ich lasse mich einfach Bauer nennen.

私は單に「お百姓」で通つてゐる。〔……と呼ばせてゐる、は變です〕

註。——ドイツの田舍で Bauer と云へば大したもので、大きな地所の眞中にぽつんと一つの農園 (Hof) を持つてゐる Hofbauer でも、一段下つて群居してゐる Dorfbauer でも、此の der Bauer といふ呼びかけ (Anrede) は、まあ日本の「親方」「大將」みたいな勢を持つてゐるので、よくその純朴さが現れてゐます。

Das läßt sich nicht ausführen.

それは到底實現され得ない。〔自己を實現せしめない〕

Freund, laß dich belehren.

君、好い事を敎へてあげよう。〔君を敎へさせる〕

獨立して本動詞に用ひると、「ほつておく」「やめて置く」「殘す」等の意味になります。

252. 話法の助動詞と gehen 等の省略

wollen, sollen, können, dürfen, müssen の後ではよく gehen, kommen 等を略します。

Ich muß ins Amt.	私は役所へ行かねばならぬ。
Er will in den Krieg.	あいつは戰爭に行く。
Er soll in die Schule.	あいつは學校へ行く可きだ。
Ich kann nicht von hier fort.	僕は此處が離れられぬ。
Er darf ins Zimmer.	彼は部屋へ這入つても構はない。

253. 助動詞的な動詞

日本語の感じから考へると、殆んど話法の助動詞とは區別のつかない或種の動詞があります。次にあげるのは其の最も主なるものです。machen, tun を除く他の動詞は、助動詞とは違つて、凡て本動詞に zu を附します。形式からいふと、先づ此の zu を要求するだけが話法の助動詞と違つてゐるのだとも云へます。zu の事はいづれ第四卷で詳しく述べます。

(1) machen (せしめる)

「飲む」(trinken) に對する「飲ませる」(tränken), fallen (落ちる) に對する fällen (倒す) または fallen lassen (落とす) は、すべて他から力を加へて或る結果を生ぜしめるのですから、語學者はこれを Faktitiv (令動形) または Kausativ (惹起形) と呼んでゐます。梵語その他の古典語では、それを表はす一定の語尾みたいなものがあつたのです。ドイツ語では machen を用ひます。(他者を介して、やはり本人の責任を以てやる lassen の用法と混同してはいけません。)

Ich will dich heulen machen.

おまへを泣かしてやらうか。

Der tote Komei macht den lebendigen Tchudazu laufen.

死せる孔明生ける仲達を走らす。

Das macht mich lachen!

笑はせやがらあ!

Die Kinder muß man nicht arbeiten **lassen,** sondern arbeiten **machen.**

小供は、勉强させて置くだけでは駄目だ、勉强するやうに仕向けなくつちやあ。

(2) brauchen (nur と共に用ひて、「たゞかうしさへすればよろしい」の意) nicht brauchen (……するの要なし)

Du brauchst dich nur **zu** zeigen.

君はたゞ顔だけ出してくれれば好いんだ。

Du brauchst es nicht so oft **zu** sagen.

そんなに何度も云はなくつたつて分つてるよ。

註.——俗語では時として zu なしに本動詞と結びつくことがあります。助動詞化する傾向か、それとも dürfen の影響でせう。近頃の小說では殊に多くなりました。元來は地方訛です。

(3) pflegen (……するを例とする)

Er pflegte mich „Lausbub" zu nennen.

彼は私の事を「腕白」と呼び慣らしてゐた。

(4) wagen (……することを敢てする)

Er liebt sie, wagt es ihr aber nicht zu gestehen.

彼は彼女を愛してゐる、がその事を彼女に向つて告白するだけの勇氣がない。

(5) glauben (……すると信ずる)

Ich hatte mich getäuscht,[44] und dennoch glaubte ich in Wahrheit zu sein.

僕の思ひ違ひでした。でもなんだか事實を知り得たやうな氣がしてゐたんですが。

(6) hoffen (……と希望する) (……と期待する)

Mit diesen Komplimenten hoffte ich sie endgültig für mich zu stimmen.[45]

さう云ふ風に愛嬌を振り撒いて、それでもう斷然彼女の氣持を自分の方に向けようと思つた。(期待した。)

(7) scheinen (……やうに見える、思はれる)

Die Wolken scheinen sich nordwärts zu bewegen.

雲がどうやら北の方へ移動するやうに見える。

(8) vermögen (können と同意) 變化は mögen の通り。

Er will immer über[46] das hinaus (=gehen), was er wirklich zu leisten vermag.

彼奴はいつも自分が本當に成し遂げ得る範圍を突破せんとする傾向がある。

(9) heißen (……と命ずる)

註——zu を支配せず、直接に本動詞と結びつきます。

Er heißt mich aus dem Hause gehen.

彼奴は私に家を出ろと命ずる。

(10) lieben (……する事を好む)

Er liebt still vor sich hin zu pfeifen.

彼奴は一人で口笛を吹くのが好きだ。

(11) drohen (危ふくも將に……せんとする)

Es droht zu regnen.

今にも雨が降りさうだ。

(12) anfangen (……し始める)
aufhören (……し止む)

Es fängt an zu regnen.
Es fängt zu regnen an.

雨が降り出す。

註——Es fängt an の次にコンマを打たないのは動動詞に結成した證據です。

(13) kommen (……するに至る、する事になる)

Wenn man zwischen zwei stockfremde (od. wildfremde) Leute zu sitzen kommt, so sitzt man „wie eine geborgte Katze" da wie die Japaner sagen.[47]

全然顔を知らぬ二人の人の間に坐ることになると、まるで借りて來た猫のやうだと日本人は云ふ。

(14) tun.

これは英語の do と同じく、全く pleonastisch (贅語的) に使はれることがあります。特に田舍者の口調を滑稽化する樣な時に用ひます。全然無意味です。こんなことはまあ餘り特殊な事柄に屬するかも知れませんが、文學書を讀む人は心得て置くべきです。

Wenn der Vater mich prügeln tut, so tue ich auch schreien.

おやぢが俺をぶん毆りや、おれも負けじと泣き叫ぶ。

此の用法の tun の過去は tat でなくて tät です。

Da will ich Ihm gleich ein Exempel geben,
Ich tät's[48] vor kurzem selbst erleben. (Schiller)

では我輩が君に早速一例を話して聞かさう、
我輩はそれを最近親しく體驗する所があつたのだ。 (シルレル)

註——Ihm は古形で、今ならば ihr です。Er〔彼〕の大書したのを二人稱に使つた時代があつたのです。

☞ 讀本第二十課を讀め。

第三十三講

助動詞の用法(形式)

此處で助動詞といふのは、單に話法の助動詞のみではなく、時稱の助動詞も、その他助動詞の扱ひをする凡ての動詞が含まれてゐるのです。

254. **zu の問題** 既に前講の後半部で述べて來た事ですが、話法の助動詞七個は、たとへば ich will dich heute besuchen (私は今日汝を訪問しよう) と云つて、ich will dich heute zu besuchen とは云はない、即ち zu を介せずして直接に本動詞と結び附きます。これが助動詞の特徴です。——但し助動詞的な動詞中でも machen, tun は zu を採らない事も云つておきました。

此の事は、同じ意味を持つてゐる話法の助動詞と普通の動詞とを比べると露骨にわかります。「私は泳ぐ事が出來る」を本來の助動詞 können で云へば ich kann schwimmen ですが、前講の終に述べた vermögen で云ふと ich vermag zu schwimmen となります。

255. **Ich sehe ihn kommen.** ところが、二つの文章を一つに合併したやうな際には、ちよつと考へると、主になる動詞が客になる動詞の助動詞であるかの樣な體裁をとる事がありますから、これは一寸注意する必要があります。

「彼が來る」(er kommt) のを「私が見る」(ich sehe) と云つた樣な際には、これを二つの文章として結び附けると——

Ich sehe, wie er kommt.
私が彼が來るのを見る。

註——ich sehe, daß er kommt とは、斯う云ふ時には云ひません。强ひて云へない事はないが、意味が變つて、「扨ては到頭來たかな」と云つたやうな、「事實」を「看て取る」事になつてしまひます。

以上は二つの文を「結びつけた」のですが、これを「一體に合する」ことが出來るのです。すると、「私は彼を見る、來るのを見る」と、「見る」という

ふ動詞に四格の補足語なるものを二つ附けることになります。(つまり、彼なる人間も見れば、その人間の動作も見るわけです。)

Ich sehe ihn kommen.
私は彼が來るのを見る。

Ich höre ihn singen.
私は彼が歌ふのを聞く。

Ich mache ihn fallen.
私は彼を斃れさす。

Ich helfe ihm arbeiten.
私は彼が働くのを助ける。

Ich lehre ihn Ski fahren.
私は彼にスキーを教へる。

Ich lasse ihn kommen.
私は彼を來させる。

これらの sehen, hören, machen, helfen, lehren, lassen 等は、嚴密にいふと、二つの文の合體ですから、文法家によると lassen を助動詞の一部に加へない人もあります。此の場合をどうして本來の助動詞から區別するかと云ふと、ihn, ihm 等、三四格の形を取りながら、その次に來る動詞 kommen, singen, fallen 等の主語になるものがあるのでわかります。もつとはつきり云ふと、ich will gehen, ich kann gehen 等の際には、各々 wollen と gehen, können と gehen の主語は一致しますが、以上のやうな場合では二つの動詞が別々の主語を持つてゐるのです。

斯くの如く、論理的意學的に分解すると、本來の話法助動詞と、二文合體の際とは根本的に相違するわけですが、一寸見ると兩方ともよく似てゐますから、話法助動詞に關する文法上の法則を、後者にも適用する傾向があります。その中でも lassen には特に嚴重に適用しますから、その點で私は lassen だけ話法の助動詞の七番目に加へたわけです。

話法助動詞に關する文法上の法則といふのは、前述の zu の問題と、もう一つは次に述べる過去分詞の問題です。

256. Ich **habe** es nicht verſtehen **können.**
[話法助動詞は不定法を以て過去分詞とす]

念のために、助動詞全部の三要形を表にして見ませう。特に過去分詞に注意して見て頂きます。

時稱助動詞の三要形			
(1) 不定法	(2) 過去	(3) 過去分詞	〔獨立用法の過去分詞〕
ſein	war	geweſen	[geweſen]
haben	hatte	gehabt	[gehabt]
werden	wurde (ward)	worden*	[geworden]

話法助動詞の三要形			
(1) 不定法	(2) 過去	(3) 過去分詞	〔獨立用法の過去分詞〕
können	konnte	können*	[gekonnt]
dürfen	durfte	dürfen*	[gedurft]
mögen	mochte	mögen*	[gemocht]
wollen	wollte	wollen*	[gewollt]
ſollen	ſollte	ſollen*	[geſollt]
müſſen	mußte	müſſen*	[gemußt]
laſſen	ließ	laſſen*	[gelaſſen]

＊印を打つたところに注意して見て下さい。括弧をした獨立用法の過去分詞といふのは次の項で說明しますが、＊印を打つた普通の過去分詞といふのが、話法の助動詞では、みな不定法と同形です。故に完了形を作る際には、haben の定形と、此の形の過去分詞とが相呼應しなければなりません。

—— 現在完了 ——

1. Ich **habe** es nicht verſtehen **können.**
   私はそれを理解することができなかつた。
2. Du **haſt** mich töten **wollen.**
   君は僕を殺さうと思つたのだ。
3. Er **hat** mir helfen **müſſen.**
   彼は私を助けなければならなかつた。

—— 過去完了 ——

1. Wir **hatten** nicht ſchlafen **dürfen.**
   我々は [其時まで] 眠つてはならなかつたのだ。
2. Ihr **hattet** immer zu Hauſe ſein **ſollen.**
   諸君は [其時まで] 必ず在宅しなければならなかつた。
3. Sie **hatten** mich oft beſuchen **wollen.**
   彼等は[其時まで]度々私を訪問しようと思つたのだ。

未來完了は構造が複雜になつて、語順がまた一寸違つた事になりますから、後で述べます。

元來の意味に於ける助動詞ではないが、二文章が合體されたために、偶然二つの本動詞が、助動詞と本動詞とのやうな關係になつた際、即ち ich ſehe ihn kommen（私は彼が來るのを見る）と云つたやうな際にも、此の過去分詞に關する異則を適用します。但しこれは必ずしも行はれてゐません。現在の所は、その方が好いと云ふだけの規則になつてゐます。

1. Ich **habe** ihn kommen **ſehen.** (**geſehen**)
   私は彼が來るのを見た。
2. Du **haſt** mich ſingen **hören.** (**gehört**)
   汝は私が歌ふのを聞いた。
3. Er **hat** mir arbeiten **helfen.** (**geholfen**)
   彼は私に仕事の手助けをした。

此の場合は、前にも述べた通り、たとへば第一の場合の kommen sehen なら、sehen の主語は ich, kommen の主語は ihn と云つたやうに、必ず二つの動詞の主語が別々でなければなりません。それ故、「或人を見知る」と云ふ kennen lernen だとか、「散歩に行く」と云ふ spazieren gehen だとか云つたやうな熟字には、此の規則は適用しないで、普通の ge- 式過去分詞を用ひます。此の文法的論理的な分解をはつきりと區別して考へないと、色んなものがごつちやになりますから、特に御注意をねがひます。

1. Ich **habe** ihn kennen **gelernt.**
   私は彼と見知つた。
2. Er **ist** soeben spazieren **gegangen.**
   彼はたつた今散歩に出掛けた。
3. Du **bist** neben mir stehen **geblieben.**
   お前は私の脇で立ち止つた。

即ち、例へば第三の場合で云ふと、「立つ」のも「止まる」のも同一人なんです。前の場合とは根本的に違ふといふ事がわかりませう。

zu を介せずして二つの動詞が結び附く場合に、もう一つの類型があります。(これも過去分詞を不定法の形にしません。)

—— 現　在 ——

1. Ich **habe** es in der Schublade **liegen.**
   私はそれを抽斗の中に横たへて持つてゐる。
2. Du **hast** ein Klavier im Zimmer **stehen.**
   君は部屋にピアノを[立てらかして]持つてゐる。
3. Er **hat** Vögel im Käfig **fliegen.**
   彼は鳥籠に[澤山の]鳥を飛ばして置く。

こんなのを、habe —— liegen といふ形を見て、現在完了と間違へてはいけません。現在完了ならば次のやうになります。

—— 現在完了 ——

1. Ich **habe** es in der Schublade liegen **gehabt.**
2. Du **hast** ein Klavier im Zimmer stehen **gehabt.**
3. Er **hat** Vögel im Käfig fliegen **gehabt.**

257. Ich **habe** es nicht **gekonnt.**
[獨立用法の際は **ge-** の附く過去分詞]

助動詞とは、その名の示す如く、動詞を助けるものです。動詞を助けないで、獨りきりで用ひられる際は、もはや助動詞ではありませんから、今までに述べて來たやうな、過去分詞の代りに不定法を用ひるといふ變則は適用しません。

1. Ich **habe** es nicht **gekonnt.** (**können** に非ず)
   私はそれが出來なかつた。
2. Du hast es **gedurft.**
   君にはその權利があつたのだ。
3. Wir haben es **gewollt.**
   我々がそれを欲したのだ。

258. **werden の二つの過去分詞**
(1) worden. (2) geworden.

werden の二つの過去分詞も、今まで述べた用法に平行してゐます。即ち、「受身の助動詞」の際は——不定法ではないが——worden と云ふ、ge- の附かない特別な過去分詞を用ひ、「……になる」と云ふ獨立用法の際には正規の geworden を用ひます。

—— 獨立用法 ——

1. Ich **bin** [ein] Kaufmann **geworden.**
   私は商人になつた。
2. Du **bist** [ein] Offizier **geworden.**
   君は將校になつた。

3. Er **ist** [ein] Beamter **geworden.**
彼は役人になつた。

註——[ein] は、かう云ふ商賈、資格、役を指す名詞を容語（または述語）に用ひる場合には、附けても附けなくてもよろしい。但し、將校や役人ではなく商人にと、他と區別する際にはなる可く ein を省きます。(定冠詞は決してつけません。こゝいらが大分むつかしいところですね。)

—— 受身の現在完了 ——

1. Ich **bin** von ihr geliebt **worden.** (**geworden** は誤)
私は彼女から愛された。

2. Du **bist** mißhandelt **worden.**
君は暴行を加へられた。

3. Er **ist** gemordet **worden.**
彼は殺された。

259. 定形後置の變則 (1)
Da ich ihn nicht **habe** treffen können, —

255 に於て述べた通り、話法助動詞の過去分詞は不定法と同形になり、たとへば「私は彼に逢ふことが出來なかつた」は

Ich **habe** ihn nicht treffen können.

となりますが、これは正置法の場合で、これに接續詞を附けて全體を一つの副文章にすると、たとへば da (……故に) をつけて「私が彼に逢ふことが出來なかつた故に」とすると、元來ならば次の樣になるべき筈です——

Da ich ihn nicht treffen können **habe,** ——

ところが、**können** と云ふ不定法形の過去分詞を用ひるとさうはしないで、後置されるべき筈の定形 habe を、動詞群 (Verbalgruppe) の先頭に持つて來て——

Da ich ihn nicht **habe** treffen können, ——

とします。いづれにしても、副文章の際に動詞群が一番最後に來る事には些かの變りもありませんが、ただ定形の位置のみが變則になるわけです。

例

(1) Da ich gestern nicht **habe** kommen dürfen, so bringe ich die Botschaft erst heute.
(昨日來られなかつたのでやつと今日言傳てを持つてきたよ。)

(2) Der Schaffner gab mir zu verstehen, daß ich zu Shinjiku **hätte** umsteigen sollen.
(車掌が私に、新宿でお乘換へになるべきところでしたのにと云つて教へてくれた。)

(3) Die Summe, die er eigentlich für ein Wörterbuch **hatte** ausgeben wollen, vertrank er auf dem Wege nach der Buchhandlung.
(本當は一冊の辭書のために支出しようと思つてゐた金額を、彼は本屋への途上に於て飲み果たしてしまつた。)

(4) Er wanderte nach Australien aus, nachdem er Haus und Hof und alles, was er besaß, **hatte** verkaufen müssen.
(家邸、並びに凡そ彼の所有してゐた凡ての物を賣り拂はなければならなくなつた後、彼は濠洲に移住した。)

260. 定形後置の變則 (2)
Weil ich kein Kind **kann** schreien hören, —
[Weil ich kein Kind schreien hören **kann,** —]

上述の變則は、話法助動詞の過去分詞がある時ばかりではなく、一般に不定法が二つ重なる場合にも適用されることがあります。但し此の際には、上述の場合ほど嚴重ではありません。「私は子供の泣くのを聞いてゐられないので」は、weil ich kein Kind schreien hören kann と正規の語順にしてもよし、變則を適用して、weil ich kein Kind kann schreien hören としても好いのです。ただ後者の方がいくらか口調がなだらかになります。けれども前者の方を多く用ひます。

261. 動詞群の語順に關する一般的法則 (1)

前述の二つの場合から推して、おのづから一つの法則が出來上ります。即ち、動詞群に於

て、當然の順序に並ぶものが三つ以上あると、それはもはやドイツ人の耳には餘りに重苦しく感じられるのです。

當然の順序と云ふのは、その儘の順で日本語に譯すれば原意が出る順です。たとへば、schreien 叫ぶのを hören 聞くことが kann 出來る、と云つたやうな場合です。

私が此の際日本語を規準 (Maßstab) に用ひるのには、語學上の理由があります。何時か折があつたら述べるつもりでゐますが、日本語 (他のモンゴリア系統の言語も大體さうださうですが) は、語順と云ふ點に於て、西洋の諸語に見受けられない程極端な論理性を持つてゐるのです。即ち、規定するもの (Determinantia) は必ず規定されるもの (Determinanda) の前に置かれ、その連續が整然として一糸亂れず展開されます。故に、單語と單語との間の論理的順列を判斷する時には、理屈で考へるのを止して、日本語で言つて見るに限ります。(此の話は文章論の科學的研究の方に屬しますから、玆では一寸觸れておく程度に留めます。)

要するに、日本語の語順の儘に並べられる動詞が三つ以上あることは、あまりに語順が論理的になつて、ドイツ人の耳には少しおかしく感ぜられるのです。そのおかしさは、一寸簡單には云へませんが、たとへて見ると——「あの人は私の父の友達の妻君の里のすぐ傍にある村の村長の一人娘の友達の父だ」といふと、あんまり系統が連綿としてゐて、同時に單調で、馬鹿々々しくて、根氣よく筋路を追つて聞いてゐれば成程と首肯けるが、ふと意識して全體を見渡すと思はず苦笑を禁じ得ないでせう。—— さう云ふおかしさです。たとへば次の文をごらんなさい。正規の文法には違ひないが、動詞列を辿つて行くと、三字目ぐらゐで少し五月蠅くなり、四字目で苦笑し、五字目で吹き出すこと請け合ひです。吹き出さない人はまだドイツ語の感じが無いのです。

Wenn der Vater das Kind spazieren gehen lassen wollen haben wird, ——

もし父が小兒を散歩に行かせようと思つたであらう時には——

これはまた餘り極端で、wird といふ定形以外に不定形をした動詞が五個もあります。五個は斷然いけない。そんな文章を作らうとするのが間違つてゐる。そんな文章でしか言ひ表はせないやうな考へを抱くのが間違つてゐ

る。もしさう云ふ形でしか言ひ表はせない樣な思想を陸續として吐露したい人があつたら、そんな人こそ文部省に賴んで思想善導をして貰ふ可きです。

五個は斷然いけないが、四個もあんまり敬服すると云ふ程ではない、できる事なら三個も止した方が好い、二個はどうしても必要で、動詞を二個並べずに人世の複雜な關係を表現しろは、それはまたあんまりです。—— 其處でドイツ人の感じは、まづ二個を正規と見、三個は、あまり褒めたものではないが、先づ ein notwendiges Übel〔已むを得ざる、又は必要なる災〕として、まづ大目に見逃がす……と云つた樣な所に落ち着いてゐるのです。

ですから、前述の惡文を、せめて笑はずに聞いてゐられる程度にまで改修しようとすると——

Wenn der Vater das Kind **wird haben** spazieren gehen lassen wollen, ——

とするか、それとも、未來完了だつて未來だつてどうせ同じ事實になりますから未來完了を止して ——

Wenn der Vater das Kind **wird wollen** spazieren gehen lassen,——

もしくは一そ現在を使つて、——

1. Wenn der Vater das Kind spazieren gehen lassen **will.**
2. Wenn der Vater das Kind **will** spazieren gehen lassen.

それとも全然用語を變更して ——

Wenn der Vater das Kind spazieren führen will, ——

父が小兒を散歩に連れて行かうと思へば、

とでもすれば一等無難でせう。

262. 動詞群の語順に關する一般的法則 (2) 黃金截の法則

不定法形式のものを三つ以上並べないと云ふのが先づ第一の法則ですが、その次に、少しむつかしい第二の法則があります。それは、幾何の方に Analogie (類例) を求めて、少し洒落れて、Das Gesetz des goldenen Schnittes (黃金截の法則) と名づけて置きませう。命名の理由は後で述べます。

同じ例の方が好いでせうから、また例の惡文を引用します。日本語通りの順序に、都合上一寸番號をつけて見ます。

Wenn der Vater das Kind spazieren(1) gehen(2) lassen(3) wollen(4) haben(5) wird(6).

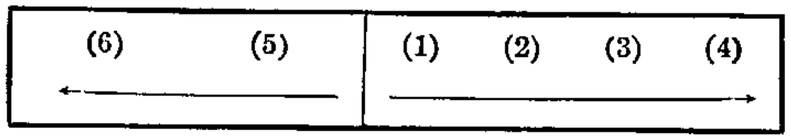
規定する (determinieren) といふ言葉を使つて云ふと、(1) が (2) を規定し、(2) が (3) を規定すると云ふ順序です。結局 (6) がすべての結末、或ひは基礎になつてゐます。

これを、上例の如く、(1) (2) (3) 等の順に列置すると單調滑稽になる、なんとかしてその順を亂さなければならない。かと云つて骨牌を切るやうに durcheinanderwerfen (ごつたかへす) されては堪らない。ドイツ人の Sprachgefühl (語感) には、その間に或種の Methode (方針) があります。無意識に、勿論。

それは次のやうに列べる事です。

Wenn der Vater das Kind (wird haben) (spazieren gehen lassen wollen.)

括弧に注意して見て下さい。結局動詞群だけを番號で現はすと——

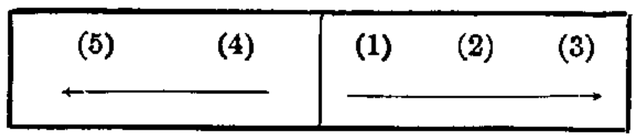


中央から左寄りに切れ目があつて、まづ中央から右へ、その次には中央から左へ番號が進んでゐます。

次に wird を省いた文では——

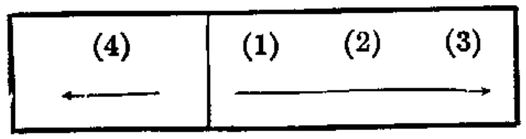
Wenn der Vater das Kind hat wollen spazieren gehen lassen.

即ち



次に hat を省くと——

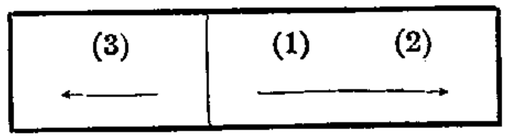
Wenn der Vater das Kind will spazieren gehen lassen.



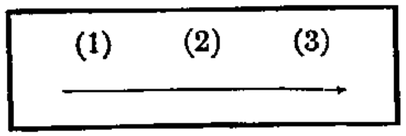
次に wollen を省くと——

Wenn der Vater das Kind spazieren gehen läßt.

gehen läßt. (が本當ですが、此の際は前述の通り、läßt spazieren gehen とも云へなくは無い、また、spaziereen gehen は、一種の熟字ですから一寸例になりません。そこで) Wenn der Vater das Kind hat schlagen wollen[49] (を一般的の典型としてあげると。)



次に例外として spazieren gehen läßt をあげると——(三個までは普通の順で好いのですから)



要するに或種の法則が支配してゐます。これを分解していふと。

(1) 多い時は二部に分ち、中間に切れ目を設けること。

(2) 切れ目の在所は、丁度眞中ではいけない。——さうするとまた單調になる故——

(3) 切れ目は左寄りでなければならない。

(4) その比例は 1:2, 1:3, 2:3, 2:4 であつて、結局の理想は、幾何學で云ふ黄金截點 (der goldene Schnitt) の在り場所に似てゐる。

註——黄金截點と云ふのは、a—b なる線を二つに分つ g といふその線上の點で、a—g の長さの g—b に對する比が g—b の a—b に對する比に等しくなる點です。(概ね 5:8)

これが ästhetisch (美學的) に或種の役割を演じてゐるといふことは、古來

の美學者の言ひ古した說です。たとへば町の全景を山から見下した寫眞を取る時に、近景に松の樹を一本入れたい。どの邊に入れやうかとなると、特別に天才的な奇拔な方法でもない限りは、やはり黃金截點に松の幹が來たのが一番落ち着くのです。——かどうか知らないが、とにかく美學者達はそんな事を云つたものです。（今ではもう古臭くて、そんな事を云ふと笑はれますが。）最後に一言斷はつて置きますが、前にも云つた通り、動詞群を膨脹させるのは最も拙劣な方法なので、できるなら黃金截なんぞを避けて通る（umgehen）方が好いのです。けれども文法は修辭學とは違ひますから、無意識に存在してゐる事實は、好いにしろ惡いにしろ知つておかなくてはなりません。

最後に一言斷はつて置きます。黃金截の法則ですら大抵の畫工は無視します。即ち近景の松の樹は必ずしも 5:8 の場所にはない。普通の感じではむしろもつと片寄つて、4:9 又は 3:10 でも構はない。むしろその方が好くなる。但し中央の方へ片寄るのは必ず拙い。たとへば近景の丁度 5:5 即ち中央の所に松の樹でもあつてごらんなさい。見られた圖ではありません。ドイツ語の語感もそれです。切れ目はうんと左へ寄つても構はない。要すれば左側と一致しても好い。けれども切れ目が黃金截より右に寄ることは絕對に不可です。次項の例を見て下さい。

63. Wenn die Regierung hat **bekannt** machen lassen wollen, daß……

本動詞と共に熟語に結成してゐる詞は、前述の「切れ目の中」へ入れてしまひます。その爲めに動詞群が多少長引いても、それは止むを得ません。

Wenn die Regierung hat **bekannt** machen lassen wollen, daß……
もし政府にして……なる事を天下に宣せんと欲したりとせば。

bekannt machen（宣する、公布する）は熟語で、離して用ひることは出來ません。

☞ 讀本第二十一課を讀め。

第三十四講

非人稱動詞

264. 非人稱動詞とは？

英語にも to rain（雨降る）to snow（雪降る）to thunder（雷鳴する）等の動詞があつて、それらを定形として用ひる時には it rains（雨が降る）it snows（雪が降る）it thunders（雷が鳴る）と云ひます。it のみを主語とするばかりで、其の他「私」や「汝」や、または名詞なぞを主語とする事がないから、無人稱動詞または非人稱動詞と云つてゐます。

獨逸語もそれに平行してゐて、——

regnen (to rain): es regnet (it rains)
schneien (to snow): es schneit (it snows)
donnern (to thunder): es donnert (it thunders)

つまり日本語ならば「雨」が「降る」と、雨が主語になりますが、獨逸語の regnen は既に「雨降る」といふ意味を持つてゐるのですから、その上もはや主語をつける必要がなく、單に文法上の形式を踏むために es（それ）と云ふ主語を附するのです。es には何の意味もありません。

265. 非人稱主語 es

その有形無意の非人稱主語 es は、名前の通り人稱に非ずで、詳しく云へば ich, du, er, sie, es の es ではないのです。中性三人稱單數を意味する es ではなく、それとは全然用法を異にする es です。

たとへば、野原を歩いてゐると、「草の中でガサゴソといふ音がする」。

Es raschelt im Grase.

rascheln といふ動詞は、「ガサゴソと云ふ聲がする」といふ、現象全體を指してゐるので、別に「何が」ガサゴソするかと云ふ事は此際別に問題になりません。たとへば何か中性の名詞を例に採つて、一匹の Kaninchen（兎）が逃げ出した。どこへ行つたかと思つて草の中を探すと、「そ奴め草の中でガ

サゴソやつてゐた」といふ es raſchelt im Graſe とは全然違ふのです。その際ならば es は人代名詞で、das Kaninchen を代表してゐますが、非人稱主語の es は何者をも代表しないのです。

此の點で、近代語を拉丁語と比較して見ると、非人稱主語 es なるものの正體がはつきりわかります。

英語	it rains それが雨降る
佛語	il pleut それが雨降る
獨語	es regnet それが雨降る
拉丁語	pluit 雨が降る

即ち拉丁語では全然主語のない定形動詞のみを用ひるのです。拉丁ばかりではなく、拉丁直系の言語はみなそれで、伊太利語も西班牙語も主語を附けずに定形だけで云ひ表はします。

伊	西	
piove	llueve	雨が降る
nevica	nieva	雪が降る
tuona	truena	雷が鳴る

266. 元來の非人稱動詞と普通動詞の非人稱的用法

必ず非人稱主語 es を主語とする動詞を元來の非人稱動詞と云ひます。それは何故かと云ふに、普通の動詞も時に應じて非人稱的に使用する事が出來るから、それらと區別せんが爲めです。

元來の非人稱動詞といふと、先づ regnen, ſchneien 等、天候又は自然界の現象を意味するものが主で、其の他に es hungert mich (私は空腹を感ずる) 等、人間の主觀的な氣持を意味するものがあります。それは次に項目に分けて、最も普通なものを擧げて見ることにします。

普通動詞を非人稱的に用ひるものに至つては其の場合が無限にあつて、これはむしろ一般的法則として說明することにします。先に例に引いた es

raſchelt im Graſe といふ句などがその一例です。その句では raſcheln が非人稱的に使つてありますが、さうかと云つて raſcheln が非人稱動詞であるとは云はれないのです。「彼女」や「我々」が raſcheln する事もありますから。

267. 元來の非人稱動詞 (1) ——天候氣象に關するもの——

天候氣候に關する動詞が最も典型的 (typiſch) な非人稱動詞です。

es regnet	雨が降る	es ſchneit	雪が降る
es friert	氷が張る	es taut	氷が解ける
es donnert	雷鳴する	es blitzt	稻妻が光る
es dunkelt	暗くなる	es dämmert	薄明(暮)である
es reift	霜が置く	es hagelt	雹が降る
es tagt	東が白む	es hellt ſich auf	晴れる
es wittert	嵐模樣である	es ſtürmt	嵐である

その他熟字的なものが澤山あります。

es iſt kalt	寒い	es iſt kühl	涼しい
es iſt heiß	暑い	es iſt warm	暖い
es iſt früh	早い	es iſt ſpät	晩い
es iſt hell	明るい	es iſt dunkel	暗い
es iſt Morgen	朝だ	es iſt Abend	晩だ
es iſt Nacht	夜だ	es wird Nacht	夜になる

その他、自然界の現象として扱ふ可きものは非人稱にして用ひます。

es zieht	何處からか風が洩れて來る
es ſpukt	[幽靈、お化等が] 出る
es poltert	屋鳴震動する。[妖怪出現の前後]
es wird rege	活動の氣配がし始める
es brennt!	火事だ!

その他 es gießt in Bächen (川をなして灑ぐ、即ち「土砂降りだ」) es grollt in der Ferne (遠方でゴロゴロ云ふ——遠雷のこと) 等非人稱動詞でないものを假に用ひる場合に至つては枚擧に遑ありません。

268. 元來の非人稱動詞 (2) ——氣持に關するもの——

人間の氣持に關するものは、es と云ふ文法上の主語の外に、その人間を意味する言葉を何等かの形で入れなければなりません。その言葉は、文字によつて、或ひは三格になり、或ひは四格になります。つまり、此等の非人稱動詞は、多少熟字的に結成してゐると云つた樣なわけです。(意味上の主格になるものを「私」で表はして見ると次の樣になります。)

es hungert mich	私は腹が空いた
es dürstet mich	私は喉が渴いた
es friert mich	私は寒い
es träumt mir	私は夢を見る
es reut mich	私は後悔する
es dauert mich	(同　上)
es ärgert mich	私は癪に觸る
es wurmt mich	(同　上)
es verdrießt mich	(同　上)
es gelüstet mich [nach etwas]	私は或物に慾を涌かす
es wundert mich	私は不審に思ふ
es ahnt mir	私は虫が知らせる
es schwant mir	(同　上)
es dünkt mir (mich)	私に……樣に思はれる
es deucht mir (mich)	(同　上)
es däucht mir (mich)	(同　上)
es ist mir [zu Mute]	私は……の氣がする
es graut mir [vor etwas]	私は……が怖ろしい
es schwindelt mir	私は目まひがする

es beliebt mir	私は欲する
es gefällt mir	(同　上)
es gelingt mir	私は成就する
es kommt mir vor	私には……樣に思はれる
es scheint mir	(同　上)
es tut mir leid	私は遺憾に思ふ
es tut mir weh	私は悲しく思ふ
es geht mir wohl	私は[健康等の]調子が好い
es geht mir gut	(同　上)
es geht mir schlecht	私は[健康等の]調子が惡い
es geht mir schlimm	(同　上)
es tut mir wohl	私は好い氣持である

その他、機宜に應じて、元來非人稱動詞として結成するに至らないものをも造ることが出來ます。

Es drückt mich im Magen.
胃の中で壓迫を覺える、腹が澁る、食滯を感ずる。

Es brennt mir unter den Sohlen.
足の裏が燒け付くやうだ、居ても起つてもゐられない。

Es reißt mich (mir) in allen Gliedern.
節々がヅキンヅキンと痛む。(傻麻質斯等で)

Es treibt mich unaufhaltsam in die Ferne.[50]
勃々たる旅情をそそられてぢつとしてゐられない。

Es schwimmt[51] mir vor den Augen.
眼の前が朦朧と霞む。

Es geht mir wie ein Mühlrad im Kopfe herum.
頭の中がまるで水車のやうにぐらぐらと廻る。

以上はほんの一例ですが、獨逸語の Sprachgefühl が涵養されて來ると、そ

の場合に應じて適切な非人稱句を造つて、自分の感じ（Gefühl）容態（Befinden）氣分（Stimmung）等を表現する事が出來るやうになります。

269. 非人稱動詞の心理的根據

非人稱動詞は一體どう云ふ風な心理現象から生れて來るものか？と云ふ問は、決して閑人の愚問（müßige Frage）ではありません。斯くまでも應用範圍の廣い一つの語學的範疇であつて見れば、一應その氣持の根底を究めて見ることは、學究的態度として當然の仕儀でありませう。

非人稱動詞中の最も非人稱動詞らしいもの、即ち unpersönliche Zeitwörter kategochen（非人稱動詞の粹）とも稱す可きは、一番最初に述べた、天候氣象、並にその他の天然現象に關するものですが、此の事が既に非常に特徴的（charakteristisch）です。即ち、非人稱動詞並びに非人稱主語 es は、人間が萬象を一つの奇異なもの、純客觀的なもの、自分の責任にも非ず他人の責任にも非ざる、孤立した著しい「現象」を名づけんとする時に當然起つて來る考へ方なのです。

西洋人は一たいに自然界を自然界として見ず、すべて人間側からの色眼鏡で打ち眺め、すべてを人格化し、責任化し、事務化し、合理化し、系統化し、組織化し、すべてのものを名詞と見る癖があります。其の根源は抑々ギリシヤの昔にあつて、ギリシヤ人は「美」といふ名詞を抽象すれば、それがもう一人の人格として考へられてゐて、從つてすぐに神と化してしまひます。それがアーリアン人種の特有性で、現今でも西洋語を日本語に直譯しようとすると、「空腹が歩行を妨げ」たり、「彼の意志が私に歩み寄つた」り、とにかく非常に固く理屈つぽくなる事が多い。それは何故かと云ふに、日本人ならば決して主語にしないやうなものを主語にして、或種の行動を取らせたり、一つの現象の責任を受け持たせたりするからです。それは決して抽象的概念的な頭を持つた教養ある人士ばかりではない、その邊のお神さんでも馭者でも靴屋でも、みんなさうなんです。つまり es steckt ihnen im Blute 彼等の血の中に宿つてゐるのですね。

さう云つた樣な、極端に主觀的な、人間的餘りに人間的（menschlich, allzu menschlich）な觀方をするのは、アーリアン系の中でも、特にギリシヤ、ラテン系、即ち南歐の先進民族が主で、極く後からその班に列したゲルマニア民族は、必ずしもさう云ふ合理化的傾向では割り切れない性質を持つてゐて、

殊に南方文化の洗禮を根本的に經てゐると、何等かの機會に客觀的、非人間的な見方、即ち或種の現象を全然人間界の聯關（Zusammenhang）に入らない、奇異な、孤立的な、「現象的」な、珍らしいものとして非合理的に言ひ現はさうとする傾向がむしろ反動的に强まるものと見えます。非人稱的な形式の最も著しいものは南方諸語に見えますが、それが凝結現象とならずに、有りと有らゆる內容に融通が利くやうになつてしまつた最も面白い場合がドイツ語である所を見ると、私の觀察には決して根據がなくはないのです。

直ちに結論を云ふと、非人稱動詞は、自然界に於けると觀念の世界に於けるとを問はず、一つの表象を、多少に拘らず一つの物珍らしき「現象」として觀る所に其の心理的根據を持つてゐます。非人稱といふのは、一種の靜かな、虛心坦懷な、冷靜な、多少無關心な、謂はば驚異の眼を瞠つて物を熟々と打ち眺める、その觀方なのです。自分といふものが何等かの利害關係のためにゆとりが取れないと、「私は空腹を感ずる」なぞと云ひますが、（現に佛語では j'ai faim 私は空腹を持つ）多少たりとも達觀すれば es hungert mich と云つて、利害關係の中心を天然自然界に置き移し、自分（mich）といふものを少しその圈外にずらせてしまひます。それは言ひ換へれば、「自分の中に今空腹といふ現象が起つてゐる」と云ふ事です。謂はば一寸「人ごとのやうに言ふ」或ひは「餘所事のやうに言ふ」わけです。

ところがどうも、此の餘裕のない娑婆とか人生とか申す混沌たる現象の中に沈沒してゐる間は、仲々さうは達觀できないもので、たとへば、激しい悲しみに浸つてゐる最中に、「俺といふ人間の中樞のあたりに悲痛といふ現象が起つてゐるな。」とはどうも一寸考へられない。やつぱり人間の弱味で「俺は悲しい」と考へてしまふ。科學的には單に悲しみといふ現象が「俺」の中を通過しつゝあるきりなんで、なあに、俺に限つて通過するといふ程個性的な神秘的なものではない、汝だつて彼だつて彼女だつて通過する、謂はば豆腐屋や納豆賣とちつとも違はないのですがね。今豆腐屋が自分の家の前を通るからと云つて、あれは己の豆腐屋だ、と云つたつて始まらないやうに、今悲しみが自分を通過するからと云つて、それを正直に自分の悲しみだなんて思つて一生懸命に氣を腐らすのは——人間的あまりに人間的です。

さういふ人はどうしたら好いかと云ふに、そのために非人稱動詞といふものがあるのです。凡ては人稱に非ずと考へたが宜しい。腹が立つたら es zürnt in mir と云つて自分を三格にしてしまふ。立腹なんぞといふ下品な現象には一格として關與してやらない方が宜しい。現象を傍觀すればよろし

い。さうすれば現象の本來の姿がはつきりと現れます。今までは、其處までが自己の一部だと思つてゐた地帶が、自分ではなくて自然界の一部だつた事に氣がつきます。

何？ 已達は說教を聽くために講義錄を買つたのではない？——ではまあ此の邊で止めませう。

一言だけ人間學的 (anthropologisch) な觀察を附記しておきます。人間は一たい最も客觀的な事實（天候、氣象）と、最も主觀的な現象（氣持、感情）とを最も早く驚異の眼を以て打ち眺めるとしたもので、その中間地帶（卽ち兩者の交涉、接觸區域、人生、社會、仕事、努力、情實、境遇、交易、事務、關係等）が最も心身をあげて沈沒してしまふ、永久に達觀し切れない危險區域です。（禪僧が議論で喧嘩するなんてのがそれですね。）——故に非人稱動詞の元來のものが、天候氣候に關するものと、人間の異常な氣持に關するものに限られてゐるのは、けだし故なきに非ずと言はなければなりません。（主觀、客觀の兩極が先んじて現象扱ひされるといふことは歷史的にも根據があります。卽ち、天然自然に關する自然哲學、自然科學と、その反對の人情、喜怒哀樂に關する形而上學、倫理、宗敎等は、古代から學問化されてゐましたが、社會、人生、關係、仕事、等に關する學問は十九世紀に至つて始めて生れ（始め？）ました。現今はその誕生の時代です。社會科學は、人世の中心がむしろ客觀主觀の中間區域にあつた事に氣のついた健全なる時代の特產物です。）

270. 普通動詞の非人稱化

必ずしも天候氣象、人間の氣持に關するものではなくても、「何が何をどうする」なぞと分解して云ひ表はす事の出來ない單純な現象は、よく非人稱的な語法で表現します。それらは主として、眼に觸れ、耳朶を打つと云つたやうな感覺的現象です。これは無限に製造する事が出來るものですから、二三の例をあげるにとどめます。

es schlägt [drei]	[三時を] 打つ。
es schäumt	泡立つ
es rauscht	ざわめく
es säuselt	そよぐ
es pocht	トントンと音がする
es hämmert	(同　上)

es klopft	戶を敲く音がする
es lärmt	どよめく
es poltert	騷々しい
es zuckt	ビリッと顫える
es knarrt	ガタビシ音がする
es braust	轟然たる響きがする
es hallt	反響する

Schiller が der Taucher (潛水者) といふ Ballade (譚詩) で、巧みに Onomatopöie (擬音詞) を用ひて、岩間から涌き出る澎湃たる潮の壯觀を描寫してゐる次の句なぞは、典型的なものとして人口に膾炙してゐます。

Und es wallet und siedet und brauset und zischt.

みなぎり、涌き立ち、ざわめき、さざめく。

潮が澎湃として眼らみ、漲り、溢れるのが wallen, ぶくぶくと音を立てて煮え立つのが sieden, それが崩れて轟然たる音響を發するのが brausen, 岩に寄せた無數の泡が、しゆうしゆうと音を立てて消えるのが zischen です。

271. 非人稱の熟語

今までに擧げたものの中にも多少熟語的なものがありましたが、これも數が非常に多く、多少に拘らず慣例となつた凝結形式です。これらは使用法が仲々むつかしいから、一寸不定形を見ただけではその用法は呑み込めないかも知れません。

es gilt [Mut]	勇氣が必要な時だ
es steht [schlecht] mit [ihm]	彼は悲境に在り
es steht [schlecht] um [ihn]	(同　上)
es steht zu hoffen, daß	期待する事が出來る
es steht zu fürchten, daß	云々の懼れあり
es ist um ihn geschehen.	彼が事窮す。
es ist um ihn getan.	(同　上)
es hat [viel] auf sich.	重大事なり。

es hat keine Eile damit.	火急を要せず。
wenn es nach mir geht.	私の思ふやうになるものなら。
es kommt auf etwas an.	云々次第による。
es liegt ihm viel daran.	彼はそれを重大視す。
es tut not.	必要なり。
es findet sich.	何とかならう。
es setzt [Schläge]	[痛い目]を見ずにはすまぬ。
es gibt [Schläge] ab.	(同　上)
es ist ihm um etwas zu tun.	彼の目的は云々にあり。
es trifft sich, daß.....	偶々.....云々が起る
es trägt sich zu, daß.....	(同　上)
so geht es in der Welt.	世は斯くの如し。
es geht um [Geld.]	問題は金だ。
es handelt sich um etwas.	問題は.....云々だ。
es geht lustig zu.	大分賑やかだ、座が賑ふ。
es ist aus mit ihm.	彼はもうおしまひだ。
es bleibt dabei.	その邊にしておく。
es ist nichts dabei.	別に大した事もない。

272. **es gibt**

非人稱熟語の中でも特に注意して頂きたいのは es gibt etwas (或物が存在する) といふ形式です。es gibt は「それが與へる」といふ構造ですから、etwas に相當する字は勿論四格になります。此の熟語の意味は大體次の二點から觀察するとわかります。

(1) 多くのものの中に或物が見受けられると云ふ意味。即ち、es gibt Leute, die ihr Lebtag ein Kind bleiben (生涯小兒の樣な氣持で終始する人がある) と云へば、es finden sich Leute, es lassen sich Leute finden, man findet Leute, つまり、さういふ人々が見受けられるといふのと同じです。(es finden sich の es に就ては直ぐ後で說明します。)

(2) 其處に「現在」人がゐると云ふ際には、es ist ein Mann da, es sind Leute da 等、sein の動詞で云ひ現はしますが、世の中には斯樣な人々が「あるとしたものだ、」と一般的論結の形式を取らうとすると es gibt を用ひます。

In den Gebirgsgegenden gibt es Leute, die noch kein Schiff gesehen haben.

山嶽地方には、まだ船といふものを見た事のない人達がゐる。

Unter vielen Büchern gibt es immer welche, die gar schlecht geschrieben sind.

多くの本の中には、とても拙く書かれてゐるのがある。

註——welche は時に einige (若干) と同じ意味に使ひます。

273. **文章の非人稱化又は文法上の主語と意味上の主語**

たつた今例に引いた句に es finden sich Leute または es lassen sich Leute finden といふのがありました。それは各々 Leute finden sich, Leute lassen sich finden (人々が見出される) と云ふのと同じです。前者は後者を非人稱化した文であると謂ひます。

es finden sich Leute といふ非人稱化した文を檢べて見ると、其處には二つの主語が發見されます。まづ有形無意の非人稱主語 es, これを文法的主語 (grammatisches Subjekt) と謂ひます。次が本當の意味のある主語、これを意味上の主語、または論理的主語 (logisches Subjekt) と謂ひます。そして finden といふ動詞の定形は、論理的主語に從つて複數になつて居り、決して es を受けて單數になつてゐない事がわかるでせう。

即ち一般的法則が生れます。凡そ如何なる文章と雖も、それを一つの珍らしき現象として描寫的に表現しようとする時には、es を主語にし、その次に動詞の定形を置き、その次に意味上の主語を持つて來る事が出來ます。その際定形は意味上の主語に從つて變化します。

例 1.	Das Meer braust.	海がざわめく
2.	Es braust das Meer.	(同　意)
1.	Der Frühling kommt.	春が來る
2.	Es kommt der Frühling.	(同　意)
1.	Die Wolken ziehen.	雲が行く
2.	Es ziehen die Wolken.	(同　意)

1. Die Wölfe heulen. 狼が唸る
2. Es heulen die Wölfe. (同　意)

現象として打ち眺め、特異なるものとして意識し、達觀しつつ表現するこれが文の非人稱化の本質です。たとへば詩人、哲學者は好んで非人稱化を用ひ、文の調子を高め詩化すると同時に、現象化し、繪畫化します。表象を造型美術化 (plastisch gestalten) するのです。Goethe の句を引用してみると、たとへば Erlkönig (魔王) といふ有名な詩の中で、小供が物凄い夜景の中に魔王を認めて怯えると、抱いてゐる父が——

Es scheinen die alten Weiden so grau.[52]
黒きは柳の切株ぞ。

——と云つて宥めます。また Faust の中で、名句として名高いのに——

Es irrt der Mensch, solang er strebt.[53]
人間は强行力進する限り必ず運命に齟齬さる。
[迷へるこそ眞に努力せる證據なり]

——といふのがあります。

最後に、非人稱の es が決して代名詞の es ではないと云ふ、露骨にはつきりした場合を一つあげませう。sein を本動詞として用ひると「存在する」と云ふ意味になる事は改めて斷はるまでもありますまい。

1. Es ist ein Gott. (es を代名詞とすれば)
それは一人の神である。
2. Es ist ein Gott.＝Ein Gott ist の非人稱化
一體の神存在す。

274. **主語と客語より成る文章の非人稱化**
Es ist eine eigene Sache um die Liebe.

客語といふのは所謂 Prädikat 又は Aussagewort〔宣言詞〕の事で、主語について何等かの宣言をし、聲明をし、說明をし、命名をする詞です。たとへば Er ist ein Schafskopf (彼は馬鹿野郎だ) と云へば Schafskopf が Er の客語 (一名述語) です。形容詞で云へば、Er ist dumm (彼は馬鹿だ) の dumm が客語又は述語です。

たとへばさういふ形の——

Die Liebe ist eine eigene[54] Sache.
戀は異なもの。

これは正規の形ですが、これを前項の法則に從つて非人稱化すると、——

Es ist die Liebe eine eigene Sache.

——と云ひさうなものですが、さうは云はないで、客語 eine eigene Sache をすぐ定形の次に置き、同時に、論理上の主語に um といふ前置詞をつけます。

Es ist eine eigene Sache um die Liebe.

之れは、A は B であるといつたやうな、主語と客語とのみから成つてゐる簡單な文章に限られます。

同樣に、「論理上の主語に附ける前置詞」と普通謂はれてゐるものに、外にまだ mit があります。

Es ist aus mit ihm. 彼はもうおしまひだ。
Wie steht es mit ihm? 彼はどんな樣子か。
Hinaus mit ihm! 彼奴を出してしまへ。

併し此の意味上の主語、または論理上の主語といふ概念をあまり濫用すると、おしまひには alles durcheinanderwerfen すべてをごつたにするやうな、無茶な事になります。Es hungert mich (私は腹が空いた) の mich を意味上の主語と云ふ位はまだしも辛棒するとしても、es fehlt an Geld (金がない) の Geld が意味上の主語だつたり、es ist ein schönes Wetter heute (今日は上天氣だ) の heute が意味上の主語だつたりするのは、それは「意味」と「日本語」との混同で、日本語で主語になるものがすべて論理上の主語だなぞと云ふのは、それは日本的、餘りに日本的です。Es ist eine eigene Sache um die Liebe でも、嚴密に考へればやはり es が「意味」上の主語で、um die Liebe は、やはり um die Liebe herum「戀といふ現象を取り卷いて」とドイツ人の Sprachgefühl は考へてゐるのです。ドイツ語はドイツ語に即して考ふ可し、日本語化して考ふ可からず。

275. **自働詞の非人稱化**
es schläft sich gut

自働詞を再歸代名詞と共に非人稱化する特殊の形態があります。

Es schläft sich sehr gut in dieser Stube.
此の部屋では非常によく寢られる。

Es geht sich ganz angenehm in diesem Hain.
此の林の中は非常に愉快に歩ける。

Es denkt sich schön am stillen Orte.
靜かな所では氣持よく考へられる。

Es sitzt sich hier ganz behaglich.
此處は大變坐り心地がよろしい。

どれも同じ形式の事を云ふので、言ひかへれば、

1. Es läßt sich in dieser Stube sehr gut schlafen.
2. Man schläft sehr gut in dieser Stube.

どれも必ず副詞をつけて、斯く斯く斯樣の行爲を「なすことが出來る」といふ意味です。要するに或種の事實の「現象化」です。

276. **非人稱の受働形**

これは既に受働形の話をする時に一寸述べて置きました。非人稱主語なるものの紹介が濟んだ後では、それが非人稱的形式の一形態である事がはつきりとわかると思ひます。(第二卷 117 參照)

1. Es wird gesungen und getrunken.=Man singt und trinkt.
2. Es wird tapfer gekämpft.=man kämpft tapfer.
   (勇敢なる戰鬪が行はれる。)
3. Es wurde lange gewartet.=man wartete lange.
   (待つ間が長かつた。)

277. **非人稱主語 es の省略**
——倒置 (Inversion) の場合——

倒置法の場合には往々にして非人稱主語 es を省略する事があります。倒置の際は必ず省略するといふのではありません。それには制限があります。

(1) 氣持を意味する非人稱動詞に限つて、その支配する三格又は四格の代名詞を先頭に置くと、倒置されるべき es が消えます。

Es hungert mich=Mich hungert.
Es friert ihn=Ihn friert.
Es ist mir, als ob=Mir ist, als ob.

例.——Es war mir, als ob ich in meiner Heimat wäre. (又は)
Mir war, als ob ich in meiner Heimat wäre.
私はまるで私の故鄕にゐるやうな氣がした。

(2) 276 に述べた非人稱主語の受働形は、倒置の際 es を省くことがあります。(省くことがあるので、必ず省くとは限りません。)

Es wird hier nicht geraucht.
此處では喫煙しないことになつてゐます。

Hier wird (es) nicht geraucht.
(同　　上)

(3) 其他の場合の非人稱主語 es は、次に es の代りになる daß…… の副文章が來る時には省いてもよろしい。

Es tut jetzt not, daß er sich eiligst dorthin begebe.[55]
今は彼が至急彼地に赴く事が必要である。

Jetzt tut not, daß er sich eiligst dorthin begebe.
(同　　上)

天候氣象に關する非人稱動詞は、倒置の際 es を決して省略しません。

278. **有形無意の es の四格 ——Füllwort (塡詞)——**

熟字の中には、別に其の場合何をも指さない、つまり非人稱主語の es の四格に相當するものを採るものがあります。これも單に形式と云へば形式で、ただ場所を塡めるだけの役目を持つ故、普通 Füllsel (塡充物) Füllwort (塡詞、贅語、虛字) と謂つてゐます。(此の項は後の參照用として挿入するに止めます。)

es an etwas fehlen lassen	或物に不足させる
es bei etwas bewenden lassen	云々としておく
es kurz machen	省略する
es weit bringen	捗る、進歩する
es mit jemand zu tun haben	或人を相手とする
es genau nehmen mit etwas	或事をやかましく云ふ
es gut meinen (mit jem.)	或人に好意を持つ
es zu etwas bringen	或事にまで漕ぎつける
es an (dem Beine) haben	[脚] が痛い
es gut haben	富裕である / 樂をしてゐる

279. **關係代名詞を受ける不定指示詞の es ——ich bin es, der——**

何物をも指さない、即ち指示詞に非ざる非人稱の es を述べた序に、それとは異る不定指示詞 es の事を一寸述べて置きませう。

「それは私の父である」等の際に、父が男性だからと云つて Der ist mein Vater とは云はず、改めて紹介する時には das ist mein Vater 又は dies ist mein Vater といふと云ふ事は既に指示詞の所で述べておきました。また單に「父だ」と云ふ際に es ist mein Vater, 複數の際には es sind meine Eltern (それは私の兩親だ) 等、定動詞が、主語たる es に依らず、むしろ客語たる Eltern に支配されて sind になる事も述べておきました。

今述べるのは、その不定指示詞 es (主語) が、關係代名詞によつて展げられる際の語法です。即ち、「私を教育したのは私の父です」等の構造です。

Es ist mein Vater, **der** mich erzogen hat.[66]

一寸考へると甚だ理屈に合はない樣に思はれます。何故かと云ふに、es を先行詞としてゐる關係代名詞が、es の性數、即ち中性單數の das にならないで、むしろ mein Vater の性を受けて der となる事です。

これは關係代名詞ばかりではありません。動詞も、意味ある方の言葉 mein Vater 等を受けて、此の際は單數になつてゐます。複數になると sind になつて、es はその儘です。

Es **sind** meine Eltern, **die** mich erzogen haben.

要するに、「……云々するのは誰それである」と云ふ文に於ては、關係代名詞も動詞も、俱に es でない方の言葉を先行詞と見なしてその形を決めます。第一 es を受けようにも無性無數の不定代名詞だから、受けやうがないではありませんか。

此の語法はまた es の方を後にする事も屢々あります。

Meine Eltern sind es, die mich erzogen haben.

それから、關係代名詞の文章を省いて用ひることが屢々ありますが、その際の形は、よく覺えておくことが必要です。何故といふに、動詞の定形が bin, bist 等になり、同時に、一定の形のみを用ひますから。

Wer klopft?	Ich bin es. (Ich bin's.)
戸を敲くのは誰だ?	僕です。(僕がそれです)

80. **名詞以外の詞をも指す不定指示代名詞 es ——ich bin es——**

不定指示詞の es は、名詞以外の品詞、即ち形容詞、動詞をも受け得ます。名詞を受け得る事は勿論です。

1. Jetzt bin ich noch nicht **dein Feind**, aber mit der Zeit kann ich **es** werden.

俺は今はまだおまへの敵ではない、けれどもその中には時と共にさうなるかも知れぬ。（これは名詞を es で受ける例）

2. Sie war **reich**, aber ihr Bruder war **es** nicht.
彼女は金持だつたが、彼女の兄弟はさうではなかつた。
（形容詞を受ける例）

3. Er versprach, **für mich zu sprechen**, tat **es** aber nicht.
彼は私の爲めに辯ずると約束をしたが、遂にそれをしなかつた。（動詞を受ける例）

英語では、日本語とよく似た so といふのを用ひますが、ドイツ語は、やはり so と云ふ言葉があるにも拘らず、かういふ際には用ひません。つまりその點に注意して貰はうと思つたのです。

此の講の最後の二項は、別に非人稱動詞とは關係がありませんが、es と云ふのが盛に出た後ですから、混同しないやうにといふ老婆心からです。所謂 nur zur Erinnerung（ただ念のために）。

☞ 讀本第二十二課を讀め。

文法講座文例譯註

註 1 (222頁) 或人に對して復讐する、と云ふ時は、再歸動詞 sich rächen を用ひ、同時に相手を意味する名詞には an〔三格支配〕を附ける。

註 2 (228頁) vierzig (四十) fünfzig (五十) 等に -er の語尾をつけると、四十「だい」五十「だい」と云ふ意になる。故に in seinen vierziger Jahren stehen (自分の四十だいの年に立つ) は、四十を越すの意になる。

註 3 (229頁) stünde は stehen の第二式接續法。これは例外で、過去が stand 故 stünde となる可きところですが、此の方を多く用ひる事は、既に 215 頁の表で示した通り。

註 4 (232頁) mildtätig は勿論「慈善をする」といふ動詞ではなく、「情深い」「慈善的な」といふ形容詞です。

註 5 (234頁) 直譯すると＝Noch もう einen Schritt 一歩を (進んでゐたら) und そしたら (so と同じ) ich 私は in den Abgrund 淵の中へ hätte mich hineingestürzt 自分を投り込んでゐたらう。

註 6 (同じ頁) dächte は denken (考へる) の第二式接續法。

註 7 (238頁) durchfallen (落第する)。

註 8 (239頁) begleiten は英語の accompany で、或人のお伴をすることを、或人「を」begleiten すると云ふのです。

註 9 (同じ頁) na! は nun! 卽ち英語の well! と同じで、「おい！」とか「どうだ」とか云つた樣な意。發音は「な」で、「なア」ではありません。ごく短かく、强く發音します。

註 10 (240頁) etwas Wahres an sich haben (それ自身に於て多少眞なるものを持つ) それには多少の根據がある、と云ふ熟語。讀本の部にも出て來ます。

註 11 及び **12** (245頁) 不定冠詞の場合は男性も中性も各々 ein で、無語尾ですが、「一人」といふ意味になつたり、「一個」といふ意味になつたりして、つまり獨立した一つの名詞として用ひられる時には、例の强語尾なるものが附いて、男性は einer, 中性は eines〔略すると eins〕になります。つまらない事の樣でかなり重要です。

註 13 (250頁) dreißig (三十) に -er を附けたもの。註 2 を見よ。

註 14 (254頁) Traube は葡萄の房で、つまり英語の bunch of grapes です。何だか特殊な事の樣ですが、その國語によつて常識の範圍がちがひます。たとへば日本人は、牡でも牝でも「牛」といふが、西洋人はそこをはつきり區別して、牡なら Ochs, 牝なら Kuh といふ。それと反對に、西洋人は、兄でも弟でも

Bruder だが、日本人は其處がやかましくて、兄とか弟とか、長幼の區別をはつきりと云ひ表はす……と云つたやうなものです。だから Traube なぞを特殊扱ひにしてはいけません。

註 15 (263頁) sich befinden (自分を見出だす) は、殆んど sein (在る、ゐる) と同じ意に用ひます。日本語でも近頃は「彼は何處そこに自からを見出した」なぞといふバター臭い言ひ方が流行つて來ました。つまり英語にでも何語にでもある熟語なのですが、こんなので「再歸動詞」といふものがよくわかります。

註 16 (264頁) der Hof は「宮廷」の意ですが、日本語の宮「廷」法「廷」等の廷はすべて此の Hof または英語の court の直譯なんで、幸ひ漢語に丁度都合の好いのがあつたのです。けれども「廷」だからと云つて別に場所、廣場、庭を指すのではなく (たとへばテニスコートの樣に) むしろ其處に集まつてゐる役人等を一團として指すのです。

註 17 (同じ頁) munkeln は「つぶやく、耳語し合ふ」の意で、玆では manches 多くが wird gemunkelt 囁かれる、といふ構造。

註 18 (同じ頁) sich heranwagen 敢て近づく、近づく事を敢てする、といふ再歸動詞。

註 19 (同じ頁) 直譯＝Er 彼は zwischen die zwei Gegner 二人の相手の間へ tritt 歩み入つて und そして zwischen ihnen 彼等の間に möglich wäre 可能でもあらうところの auf einen Ausgleich 調停を sinnt 考へる。

註 20 (同じ頁) über……hin で、「何々の上を越へて」の意になる。hin は、少し先の 240 項で述べられる筈の、「前置詞が後曳する追加詞」なるもの。

註 21 (265頁) sich zeigen (自からを示す) 即ち「顯れる」。これも再歸動詞の好適例。

註 22 (同じ頁) 直譯＝Die Liebenden 愛する人たちは in ihrem Eifer 彼等の熱心さに於ては die Leute 人々が von ihnen 彼等に關して sich〔人々〕自身に (即ち お互ひに) erzählen 話し〔合ふ〕mögen でもあらう was ところの darum その事に就て sich kümmern 心配する (介意する、頓着する) können nicht ことは出來ない。

特に注意して貰ひたいのは、同じ sich のつく動詞でも、sich kümmern (um etwas) の方は純然たる「再歸」動詞であるが、sich erzählen の方は「相互」形の再歸動詞だといふ點です。第二卷の文法の 169 頁の第 158 項から 159 項へ掛けての說明を參照。

註 23 (267頁) auf und nieder gehen または auf und ab gehen といふのは、非常に亢奮した場合、または腰掛けるのに疲れて少し足の凝りを解かうとするとき (その事を sich die Füße vertreten 足を歩み癒す、足を踏み和げる、と云ひますが) その他少し考へ事をしようと思ふ時に、部屋の中なぞを、同じところを往來して歩くことです。auf は「こちらへ近づく」方で、ab 又は nieder は「あちらの方へ去る」ことです。

註 24 (267頁) herum- と umher- とは大抵の場合は「あちこち」といふ意味で、同じ用法ですが、本當は herum- はクルクルと轉回、一周すること、umher- は、別に方向を定めず、「あちこち」といふ事です。けれども herum- を umher- の意に用ひます。玆の場合でも、泳ぎ「廻つて」ゐるからと云つて別にクルクル轉回してゐるのではないやうに、つまり umher と同意で、日本語と同じ關係にあります。

註 25 (269頁) der verlorene Sohn (失はれたる息子) といふのは、バイブルに出て來る典型的人物なので、それから一般に勘當された悴の意に用ひます。

註 26 (271頁) allzu (餘りに) は單に zu といふのと同じ。(英語の too)

註 27 (275頁) 將來を指して、「何日に」「此の次の何曜日に」と云つた樣な際には auf と四格とを用ひます。auf nächsten Freitag (次の金曜日に)。
それから St. は Sankt (聖) の略符。

註 28 (同じ頁) jemand bestellen は、或人を呼び寄せる、招く、召喚する。

註 29 (同じ頁) Guter Rat 良き案は über Nacht 宵越しに kommt 來る。

註 30 (同じ頁) mit Weile 暇を以て (ゆつくりと) eile! 急げ!

註 31 (同じ頁) Hunger 空腹は der beste Koch 最良のコック ist である。

註 32 (279頁) 直譯＝Man 人は ihr 彼女に nur ein Wörtchen ほんの一言 durfte sagen 云ひさへすればよかつた so すると weinte sie schon 彼女は既に泣いた。

註 33 (同じ頁) mehr oder weniger は、「より多くか、或ひは、より少くか」即ち「多かれ少なかれ」。—— etwas wissen (或事を知る) と etwas を四格に用ひた時と、um etwas wissen (或事について知るところがある) と um を用ひる時との間には一寸微妙な差がある。つまり「知悉」と「關知」との差で、後者は、「うすうす」感づくとか、「多少」察してゐる、とか云つたやうな色彩 (Schattierung) を帶びてゐる。言葉には必ず其の大まかな「意味」(Bedeutung) の外に、微妙な「色彩」があるものです。佛語と英語とでは、かういふ微細な差の事を nuance〔ニユアンス〕と云つてゐます。たとへば同じ青でも、黑みがかつたのがあり、コバルトの樣なのがあり、青磁色がかつたのがある、それらはつまりニユアンスがちがふと云ふ。「氣味」「色彩」「調子」とでも云ふより仕方がないでせう。これをドイツ語では Schattierung〔影彩、濃淡〕と云ひますが、言葉づかひのむつかしいのは、つまりかう云ふ所にあるのです。だから、ニユアンスを問題にし始めると、どの國語にでも、二つの完全なる同義語 (Synonym) は無いと云へます。

註 34 (同じ頁) da (其處に) は、「凡そ」といふ意味に用ひます。次にある文例の da も同樣。

註 35 (280頁) sich mit etwas befassen (或事と係り合ふ) は sich mit etwas beschäftigen,

sich mit etwas abgeben, mit etwas zu tun haben 等と同意の熟語。—— es geht mich nichts an (それは私に關係なし) といふ熟語。

註 36 (282頁) von der Stelle 其の場所から vorwärts gehen 前へ進む、といふ構造。

註 37 (同じ頁) 日本語では窓 (Fenster) と窓の戸框 (Fensterladen) とを區別する普通の言葉がなくて、兩方とも窓と云つてゐます。Fensterflügel (窓翼) は外部へ轉回して開くもの。

註 38 (283頁) ehrlicher Bürger の ehrlich は、其の文字としては「正直な」といふ意ですが、或る種の場合には「體面ある」「堂々たる」「非難なき」の意になります。故に ein Bürger von Ehre といふのと略同じです。天下の良民、又は單に良民と云へば好いわけです。

註 39 (284頁) heißen には色んな意味がありますが、玆では bedeuten (意味する) の意。sagen wollen (謂はんと欲する、即ち、……の謂ひである) といふ熟語もあります。

註 40 (同じ頁) ändern (變へる) といふ動詞が ander (他の) といふ形容詞から來てゐる所に注意。

註 41 (285頁) prügeln は「棍打つ」の意。けれども單に毆るといふ意に用ひます。

註 42 (288頁) drucken は「印刷する」で、drücken は「壓す、壓迫する」—— 一すした發音の相違で意味がずゐぶん違つてきます。

註 43 (同じ頁) Ich habe mir sagen lassen (私は私に言はせた」) が「云はれた」の意に用ひられるわけです。次の例文も同樣で、「彼は彼自身をがなり附けさせた」が「どなられた」の意になります。これらは再歸動詞の時に詳しく說明した事實と同じ部類に屬します。つまり文字通りに馬鹿正直に考へると飛んでもない事になるから、特に項を設けて說明する必要があつたのです。
in Frankreich waren の waren は「居た」といふ意味だのに、譯では「行つた」となつてゐるのに氣を留めて下さい。つまり、「行く」とか「來る」とか云ふ代りによく sein を使ふのです。英語でも、「私は東京へ行つた(ことがある)」を I have been in Tokyo と云ひます。各國語ともその例があります。西洋語の癖ですから特に注意を要します。

註 44 (291頁) täuschen (騙す) から sich täuschen (思ひ違ひをする) が生ずる。變音符なしの tauschen (交換する) と混同すべからず。—— in Wahrheit sein は「眞理の裡に在る」即ち「事實を把捉してゐる」こと。

註 45 (同じ頁) endgültig「斷定的に」「決定的に」「確實に」—— stimmen は、die Stimmung (氣持、氣分) を決定 (bestimmen) することである。für mich は、文法本卷 239 項の (8) に說明した意味。

註 46 (同じ頁) das は指示代名詞の das で、次の was の先行詞。

註 47 (292頁) so 以下の直譯＝so すると wie die Japaner sagen 日本人の言ふ樣に

man 人は „wie eine geborgte Katze" 借りて來た猫の如く sitzt man da 人は其處に坐る。—— da (其處に) と云ふのは、「ぽかーんと」「つくねんと」「きよとんとして」と云ふ意味。

註 48 (293頁) tät's の 's は es の略。—— 次の vor kurzem は「最近」といふ熟語。

註 49 (305頁) 逐次譯＝もし父が子供を打たうと思つたならば。

註 50 (311頁) Es それが mich 私を unaufhaltsam 抑へやうもなく in die Ferne 遠方へ treibt 驅り立てる。

註 51 (同じ頁) schwimmen は元來「泳ぐ」。

註 52 (318頁) 逐次譯＝古い柳があんなに物凄く〔灰色に〕見えるのだ。

註 53 (同じ頁) irren は「迷ふ」。streben は「努力する」。これを「人間は努力せる限り迷ふ」と直譯してしまふと、其の趣旨が徹底しません。「だから努力なんぞするもんぢやない」と解釋された日には原意の反對になつてしまひます。故に本文の下の方の意譯に注意して下さい。

註 54 (319頁) eigen は元來「固有の」といふ意味で、それが一寸轉じて「獨特の」となります。Sache は英語の matter (事柄)。

註 55 (321頁) es tut not が「云々の必要あり」といふ非人稱句。sich begeben は「赴く」。

註 56 (323頁) 分解すると＝der mich erzogen hat 私を敎育したところの es それは mein Vater 私の父 ist である……といふ風に考へられますが、嚴密に文法的に云ふと、むしろ「父」が主語で、—「私の父が、私を敎育した所のそれである」もしくは「私の父が私を敎育したのだ」といふことです。意味はどうせ同じになるにしろ、文法では斯う云ふ理屈が仲々厄介です。

正　誤　表

第　一　卷　(第一次正誤)

(1) 文法 9 頁——第 10 項の例中 Liebelei, Heilkunde を抹殺する事。

(2) 文法 22 頁——第 28 項の quaken の發音假名「クヴーケン」は「クゥーケン」の誤。同じく次行の Qualle の發音假名「クルヴレ」は「クゥルレ」の誤。

(3) 文法 50 頁——下から三行目の右端から四行目へ掛けての、「母に (der Mutter)」を「父に (dem Vater)」と訂す。

(4) 文法 72 頁——下から三行目を、〔問題七「私にこそ彼女は今日それを贈るならめ」〕と訂す。

(5) 文法 78 頁——中央の語表中、Mutter, *m.* は Mutter, *f.* の誤。

(6) 文法 81 頁——上から三行目の右、Hand, *f.* は Hand, *f.* の誤。

第　二　卷　(第一次正誤)

(1) 文法 121 頁——下から六行目左の「fein 居る」を「weilen 留まる」に變へる。〔fein は fein 支配〕

讀　本　の　部

獨文　關口存男
譯註　多田　基

讀本の部も、此の邊から心持ち複雜にして行きます。それから、これからは、丁度教室で譯を附ける時の樣に、獨逸語の單語を「先」にして、その「後」へ日本譯を附ける事にします。此の方法は勿論第六卷末に到るまで保持します。

第一卷以來の讀本を忠實にお讀みになつてゐる方々には申し上げるまでもないと思ひますが、本講座の讀本の部は、絶えず同じ單語を繰り返し繰り返し用ひながら、其の課其の課で問題になる或ひは接續法、或ひは非人稱動詞といつたやうな文法上の根本問題を實地で修得して行かうといふのですから、單語も單語ですが、第一此處では何が問題になつてゐるのか？　といふ事を終始念頭から離さないやうにして頂きたいと思ひます。どうもよく解らんと思つたら、それが取りも直さず此の課の主眼目で、ちやんと文法の部に說明があつた…… と云つた樣なトンチンカン (Dummheiten) が動もすると起きがちです。御注意をれがひます。

それから序でに種明かしをして置きます。此の「讀本の部」は、實は拉丁語の讀本の McMillan's Shorter Latin Course から思ひついたのです。同書でもやはり極く數少い單語の數を限つて、その範圍でもつて、まるで手品のやうな話ですが、次へ次へと變つた文章が續つて行かれてゐて、讀む方では、速くも讀めれば、讀めたやうな氣もする。うつかりすると初學の癖につけ上つてしまつて、おしまひには書物を輕蔑するほどに自信がつく……と云つた樣な具合になつてゐます。投げ出されるよりは輕蔑される方が初步の書物の本望です。大體好いと思つたから其の方針を根こそぎ眞似てしまひました。斯ういふ種類の讀本のもつと複雜な、たとへば論文を讀むための根本的な獨習書といつたやうなものも計畫して見ようかと思つてゐます。

そのかはり、さう立派なドイツ語でない事だけは餘りにも確かです。初步の讀本といふ奴は、たとへば橋のやうに、どんどんと人が渡つて行つて呉れれば好いので、渡りよくさへあれば橋の理想だとして置きませう。(關口)

第十六課

接續法第一式

weiter	續けて	bestimmt, *a.*	一定の
Weltall, *n.*	宇宙	Durchmesser, *m.*	直徑
Eintritt, *m.*	入場	begehren	求める
verachten	輕蔑する	aussprechen	述べる
falsch, *a.*	誤つた	immerhin	いづれにしろ
annehmen	假定する	beweisen	證明する
Dummkopf, *m.*	馬鹿者	Mars, *m.*	火星
Beweis, *m.*	證明	Sicherheit, *f.*	確實性
einst	何時か	zugrunde gehen	滅びる
nachfolgen	後に續く	neidisch, *a.*	妬み深き
selten	稀に	leise	微と、小聲で
Ohr, *n.*	耳	Freude, *f.*	喜悅
zutrauen	信ずる	Treue, *f.*	實、信義
es ist anzunehmen＝それは假定すべきである			
in Frage stehend	問題の	vorbereiten	準備する
abtun	なし畢へる	Geschäft, *n.*	仕事、事務
sonst	然らずんば	ausruhen	休む
		aufnehmen	採用する、入れる

1. Sie glaubt, ihr Mann liebe sie, aber dieser kann unmöglich[1] glauben, daß sie ihn liebe. 2. Ob er müde ist oder nicht, davon weiß ich nichts Bestimmtes,[2] aber er antwortete nichts, als ich ihn fragte,[3] ob er noch weiter arbeiten könne. 3. Er lehrt, das Weltall habe einen bestimmten Durchmesser, aber wie groß dieser sei, davon sagt er fast gar nichts. 4. Sie sagt, er sei ein Verräter, und er sagt, sie sei eine Verräterin: man[4] weiß nicht, wem von beiden man glauben soll. 5. Der Bediente[5] trat ein[6] und meldete, ein Reisender[7] stehe vor der Tür und begehre Eintritt.

〔譯〕 1. Sie 彼女は、ihr Mann 彼女の夫が sie 彼女を liebe 愛すると glaubt 信じて居る、aber が dieser 後者は（夫は）、sie 彼女が ihn 彼を liebe 愛する daß ことを glauben 信することが kann unmöglich 出來ない。2. er 彼が müde 疲れて ist ある oder か nicht ないか ob どうか、davon そのことに就て ich 私は weiß nichts Bestimmtes[2] 確かなる何事も知らない、aber けれども er 彼が noch weiter 尙續けて arbeiten könne 働くことが出來るか ob どうかと ich 私が ihn fragte[3] 彼に質ねた als 時、er 彼は antwortete nichts 何事も答へなかつた。3. das Weltall 宇宙は einen bestimmten Durchmesser 一定の直徑を habe 有すると Er lehrt 彼は教へる aber が、dieser 後者が（卽ち直徑）wie groß どれ位の大きさで sei あるか davon と云ふ事に就て er 彼は fast 殆んど gar 全く nichts 何事も sagt 言はない。4. er 彼は ein Verräter 裏切男で sei あると Sie sagt 彼女は言ひ、und そして sie 彼女は eine Verräterin 裏切女で sei あると er sagt 彼は言ふ：von beiden 兩者の內 Wem 誰に man[4] 人は glauben soll 信用すべきであるか man weiß nicht 人は知らない。5. Der Bediente 下男は trat ein 入つて來て、und そして ein Reisender 一人の旅行者が vor der Tür 扉の前に（家の前に）stehe 立つて und そして begehre Eintritt 入場を求めて〔案內を乞うて〕ある と meldete 告げた。

〔注〕 1. の〔1〕kann unmöglich は kann nicht と同じに譯す。——2. の〔2〕nichts Bestimmtes. nichts 及び etwas の後には形容詞を大書して中性 —es の語尾を附ける。nichts は英語の nothing と同義である。詳細は文法 183.——2. の〔3〕ihn fragt. fragen は他動詞であるから四格を取る。然し日本語にて補語を〔を〕に譯すと〔彼を質れた〕となつて意味が變つて來るから ihn〔彼を〕は日本語法で〔彼に〕と譯す。ihn grüßen も〔彼を御辭儀する〕と譯さずに〔彼に御辭儀をする〕と譯すのである。かゝる例は其他にも多い。——4. の〔4〕man weiß の man は一定の人を示すのではなく〔吾人は、人々は、世間は〕の意である。從つて man を譯さずに〔知られてゐる〕と受身にしてもよい。der Mann（男、夫）と混同するべからず。man は不定代名詞である。——5. 〔5〕及び〔7〕der Bediente 及び ein Reisender は形容詞が名詞となつたものである。從つて語尾變化は形容詞の法則に從ふ。文法 193, 194.——5. 〔6〕tritt ein は分離動詞で、現在は eintreten. 文法 148.

6. Es ist billig, daß[1] man auch die Schlechten nicht verachte. 7. Es ist hier Sitte, daß die Damen vor den Herren ihre

Meinung aussprechen.[2] 8. Es ist genug, daß man sechs Tage arbeite; am Sonntag muß man doch seine Ruhe haben. 9. Es sei wahr oder falsch, daß er Frau und Kind verlassen habe: Immerhin ist es anzunehmen,[5] daß die Leute keine gute Meinung von ihm haben. 10. Er mag noch so kühn sein, wie er will, allein kann er doch das Dorf nicht verteidigen gegen hundert Soldaten.

【譯】 6. man 人が die Schlechten 惡人輩を auch も nicht verachte 輕蔑しない daß[1] と云ふ事は Es それは ist billig 至當だ。 7. die Damen 淑女達が vor den Herren 紳士達の前で ihre Meinung 彼女等の意見を aussprechen[2] 述べる daß と云ふ事 Es それが hier 當地では ist Sitte 習慣である。 8. man 人は sechs Tage 六日 arbeite 働く Es ist genug, daß と云ふ事で充分である；am Sonntag 日曜日には man 人は doch 少くとも seine Ruhe 己が休養を muß haben 持たなければならない。 9. er 彼が Frau und Kind 妻子を verlassen habe 棄てた daß と云ふことは Es それは sei wahr oder falsch 眞であれ又は僞りであれ（眞僞確かでないが）、Immerhin いづれにしろ die Leute 人々が von ihm 彼に就いて keine gute Meinung haben 好い意見を持つてゐない es.....daß と云ふ事は ist anzunehmen[5] 考へられる（假定される）。 10. Er 彼は wie er will 彼が欲する樣に（どんなに）mag noch[5] so kühn sein 勇敢であらうとも（あるだらうかも知れないが）allein 一人きりでは er 彼は doch まさか gegen hundert Soldaten 百名の兵士(複) に對抗して das Dorf 村を kann nicht verteidigen 守ることは出來ない。

【註】 6. の〔1〕daß は Es と關係してゐて、Es は daß 以下の文章を受けて主文章の主語となつてゐる。以下に例多し。——7. の〔2〕aussprechen は分離動詞だから aus に强聲がある。文法 142.——9. の〔3〕anzunehmen の zu は前置詞で、annehmen は分離動詞であるから an の次に位置して居る。sein＋zu＋他動詞の不定法は〔何々すべきである〕とか〔……られる〕の如く受動的に譯す。——10. の〔4〕mag（又は sei）noch so＋形容詞 は〔何々であらうと——かも知れないが〕の意。この mag は認容、讓步を現はす。

11. Er sei noch so klug,[1] wie er wolle, wir wollen ihm beweisen, daß er doch ein Dummkopf ist. 12. Daß Menschen auf dem Mars wohnen, ist doch nicht anzunehmen, da wir noch keinen Beweis dafür haben. 13. Man sagt, es gebe[2] Gelehrte, die[5] mit Sicherheit annehmen, die Erde gehe einst mit allen ihren Bewohnern zugrunde. 14. Gott möge ihn und seine Freunde bewahren, so sagen alle, die ihn kennen. 15. Wer mit mir sterben will für Gott und Vaterland, der folge mir nach!

【譯】 11. Er 彼は wie er wolle 彼が欲する樣に（どんなに）sei noch so klug[1] 賢明であらうとも、er 彼は doch 矢張り ein Dummkopf ist 馬鹿者である daß といふ事を wir 我々は ihm 彼に wollen beweisen 證明してやらう。 12. Menschen 人間(複數)が auf dem Mars 火星の上に wohnen 住んでゐる daß と云ふことは、wir 我々は dafür それに對して noch keinen Beweis haben 未だ何等の證據も持つてゐない da から、ist doch nicht anzunehmen どうも考へられない。 13. die Erde 地球が einst 何時か mit allen ihren Bewohnern 凡ての彼女の（地球の）住民と共に gehe zugrunde 滅亡すると mit Sicherheit 確實に annehmen 思惟してゐる（假定する）die[5] ところの Gelehrte 學者（達）が es gebe[2] 居ると Man sagt 人は言ふ（言はれる）。 14. Gott 神樣が ihn und seine Freunde 彼と彼の友人達を möge bewahren お守り下さる樣にと so 斯く ihn 彼を kennen 知れる die ところの alle 凡ての人達は sagen 言ふ。 15. mit mir 私と一緒に für Gott und Vaterland 神と祖國のために sterben will 死なんと欲する wer[4] ところの der その人は mir 私に folge nach 隨いて來い〔我と偕に來れ〕。

【註】 11. の〔1〕sei noch so klug..... に就いては 註 10. を見よ。——13. の〔2〕es gebe は直接法では es gibt で英語の there is（又は are）と同じく〔.....がある〕で、一般的存在を現はす。es gibt の次に來る名詞は必ず四格。文法 269.——13. の〔3〕die は Gelehrte を受けてゐる關係代名詞複數第一格。——15. の〔4〕Wer は不定關係代名詞の人を現はすもので、主文章中の der 指示代名詞と關係してゐる。この場合 wer と der とは同格の名詞であるが故に主文章の der は省略するも可なり。文法 168.

16. Wollen Sie bitte hinausgehen zum Manne, der vor der Türe steht, und ihm sagen, er möge[1] hereintreten? 17. Mögest[2] du so tapfer sein wie dein Vater und das Land gegen die neidischen Nachbarn schützen! 18. Es ist nicht mit Sicherheit anzunehmen, daß aus ihm einst ein großer Schauspieler werde. 19. Bei solcher Gelegenheit bleibe ich immer stumm und sage kein Wort, weil der Vater mir immer gesagt hat, man müsse seine Meinung so selten wie nur möglich[3] aussprechen. 20. Er spricht nie eine bestimmte Meinung aus,[4] und sagt immer, er wisse nichts Sicheres.

【譯】 16. Sie 貴方は bitte どうぞ vor der Türe steht 扉の前に立つてゐる der ところの zum Manne 人の處に hinausgehen 出て行つて、und そして er その方が möge[1] hereintreten お入りになるやうにと ihm 彼に（その方に）sagen 言つて Wollen 下さいませんか。 17. du 汝は so tapfer sein wie dein Vater 汝の父の如くにその樣に勇敢で und そして gegen die neidischen Nachbarn 妬み深き隣人達に對して das Land 國を schützen 護 Mögest[2] らんことを! 18. aus ihm 彼より einst 他日 ein großer Schauspieler 偉大なる俳優が werde (aus と werden と關係して) 出來る daß と云ふ事 Es それは mit Sicherheit 確實に ist nicht anzunehmen 信じられない。 19. Bei solcher Gelegenheit 斯くの如き機會に際しては ich 私は immer 何時も bleibe stumm 默つたまゝで居り、und そして sage kein Wort 一語も言はない。Weil 何故なら（…… からである）man 人は so selten wie nur möglich[3] 出來る限り稀に seine Meinung 彼の意見を müsse aussprechen 陳べなければいけないと der Vater 父が mir 私に immer 常に gesagt hat 言つたからである。 20. Er 彼は eine bestimmte Meinung 一定の意見を spricht nie aus[4] 決して言ひ出さない und で、er 彼は wisse nichts Sicheres 確實な事を何んにも知らないと sagt immer 常に言ふ。

【註】 16. の〔1〕möge は文法 207 の (1)。——17. の〔2〕Mögest も同所を見よ。——19. の〔3〕so+形容詞+wie nur möglich は〔出來る限り……〕の成句。文法 228。——2). の〔4〕aus は sprechen の前綴。aussprechen〔發言する〕は分離動詞。

21. Die Gelehrten sagen, der Mars sei von[1] keinem großen Durchmesser. 22. Er trat an mich heran[2] und sagte mir[3] leise ins Ohr, seine Schwester lasse mich grüßen[4]; das hat mir eine große Freude gemacht. 23. Sie fragte mich, ob ich die Bedeutung dieses Wortes kenne, und ich antwortete ihr, ich kennte sie nicht. (kennte = 文法 206). 24. Ich ging zu ihm und fragte ihn, was man in der Stadt annehme,[5] daß dem König dessen[6] Bruder nachfolgen werde oder daß der junge Königssohn es tue[7]? 25. Er sei neidisch oder nicht neidisch, ich kann ihm nicht recht zutrauen, weil er mir noch niemals seine Treue bewiesen hat.

【譯】 21. Die Gelehrten 學者達は、der Mars 火星は von[1] keinem großen Durchmesser 何等（…… ない）大なる直徑のもので sei ないと sagen 言ふ。 22. Er 彼は an mich 私の側へ trat heran[2] 近づいて來て、und そして mir[3] ins Ohr 私の耳に leise 小聲で、seine Schwester 彼の姉妹が lasse mich grüßen[4] 私に宜しく言つてゐると sagte 言つた。das この事は mir 私に eine große Freude 非常な喜びを hat gemacht 與へた。 23. Sie 彼女は、ich 私が die Bedeutung dieses Wortes 此の言葉の意味を kenne 知つてゐる ob かどうかと mich 私に(を) fragte 質ねた。und それで ich 私は sie それを（意味を）kennte nicht 知らないと ihr 彼女に antwortete 答へた。 24. Ich 私は zu ihm 彼の處に ging 行つた、und そして man in der Stadt 人々が町で was……annehme[5] 假定してゐるところでは、dessen[6] Bruder その人の（王樣の）兄弟が dem König 王樣の（に）nachfolgen werde 後を嗣ぐであらう（daß と云ふ事）oder か又は der junge Königssohn 若き王子が es tue[7] そうなるであらう（daß と云ふ事）かを ihn 彼に（を）fragte 質ねた。 25. Er 彼が sei neidisch oder nicht neidisch 妬み深くあれ、或は妬み深くなかれ、ich 私は kann ihm nicht recht zutrauen 彼に全く信用を置くことができない。weil 何故なら（……からである）er 彼は mir 私に seine Treue 彼の信實を noch niemals bewiesen hat 未だ一度も示したことがないからである。

【註】 21. の〔1〕von は所有を表はす前置詞。——22. の〔2〕heran は trat の分離

せる前綴。不定法は herantreten.——〔3〕 mir ins Ohr「私に耳の中へ」といふ語法.——〔4〕 grüßen は他動詞であるから四格の補足をとる。然し日本語では fragen (質れる) の場合の如くに〔に〕と譯さなければ意味が通じない。だから誰々「に」お辭儀をする又は挨拶をすると譯す。Seine Schwester lasse mich grüßen を直譯すると〔彼の姉妹が(彼をして) 私に挨拶せしめる——卽ち宜しくと言つた〕の意。——24. の〔5〕人が町では何と取沙汰してゐるか、斯うか？ ああか？ と云ふ構造。——〔6〕 dessen は指示物主代名詞で sein (彼の) に相當するものであるが、それが受けた名詞は直ぐ其の前にあるのを通常とする。從つて dessen は dem König の代名詞である。——〔7〕 tue は調はば代動詞である。卽ち es tue で dem König nachfolgen werde の代役をしてゐるのである。

26. Er zeigte auf[1] einen Dichter, der eben aus dem Theater ging, und sagte mir leise ins Ohr, er verachte ihn, begehre auch sein Hauptwerk nicht zu lesen, weil er nur ein Dummkopf sei. 27. Das Kind kommt zurück[2] und ruft mit Freude, der Onkel und die Tante seien da. 28. Die Zeitung meldet, die gange Stadt sei zugrunde gegangen. 29. Die Schüler meinen alle, die deutsche Sprache sei so[3] schwer, daß man nicht einmal zwei Seiten an einem Abend vorbereiten könne. 30. Das deutsche Reich erklärt, die[4] in Frage stehende Eisenbahn gehöre nicht Frankreich, sondern Deutschland.

【譯】 26. Er 彼は eben 丁度 aus dem Theater ging 劇場から出た der ところの zeigte auf[1] einen Dichter 一人の詩人を指さし und て、er 彼 (詩人) は nur ein Dummkopf sei 愚物に過ぎない weil が故に er 彼は ihn 彼を (詩人を) verachte 侮蔑し、auch sein Hauptwerk 彼の主要作品をも zu lesen 讀むことを nicht begehre 望まぬと sagte mir leise ins Ohr 私の耳に小聲で言つた。27. Das Kind 子供は kommt zurück[2] 歸つて來て und そして der Onkel und die Tante 叔父と叔母とが seien da そこに居る (來た) と mit Freude 喜んで ruft 叫ぶ。 28. Die Zeitung 新聞は、die ganze Stadt 全市が sei zugrunde gegangen 滅亡せりと meldet 報道する。 29. Die Schüler 生徒は alle 凡て、die deutsche Sprache 獨逸語は sei so[3] schwer, daß 至難であるから、man 人は (生徒は) an einem Abend 一晩に nicht einmal zwei Seiten vorbereiten könne 二

頁豫習することさへ出來ないと meinen 言ふ。 30. Das deutsche Reich 獨逸國は、in Frage stehende 問題の內に立てる (問題となつてゐる) die[4] ……Eisenbahn 鐵道は Frankreich 佛蘭西に nicht, sondern ではなく Deutschland 獨逸に gehören 屬すと erklärt 聲明する。

【註】 26. の〔1〕 auf einen (etwas) zeigen は〔或人 (或物) を指ざす〕の意。——27. の〔2〕 zurück は kommt の前綴。この分離動詞の不定法は zurückkommen.——29. の〔3〕 so＋形容詞＋daß は英語の so＋形容詞＋that と同じく、前より譯せば〔何々であるから——〕となり、後より譯せば〔——する程そんなに何々である〕となる。——30. の〔4〕 die は Eisenbahn の定冠詞で、die と Eisenbahn の間に in Frage stehende と云ふ附加語が挿入してあるのである。

31. Der Vater schreibt, er hoffe bald nach Japan zurückkommen zu können, da sein Geschäft in Paris schon abgetan sei. 32. Die Kirche verlangt von allen Gläubigen, man solle[1] sechs Tage[2] arbeiten und einen Tag[3] ausruhen, sonst könne man nicht in den Himmel aufgenommen werden. 33. Er trat an sie heran und fragte, wie sie sich befinde,[5] und sie antwortete ihm, sie sei eine Zeitlang[6] krank gewesen, jetzt befinde sie sich aber ganz wohl und könne auf die Straße gehen, wie er es sehe. 34. Er sagt mir, er sei immer arm und habe oft gar nichts zu essen, aber er habe immer gewußt, sich zu helfen.[7] 35. Als er sah, daß ich ins Zimmer hereintrat, sagte er mir höflich, ich möge mich auf den Stuhl setzen[8] und ihm etwas Neues erzählen.

【譯】 31. Der Vater 父は、sein Geschäft in Paris 巴里に於ける彼 (父) の仕事が schon 既に abgetan sei なし終へられた da ので er 彼 (父) は bald その內に nach Japan 日本へ hoffe zurückkommen zu können 歸ることが出來るつもりであると、schreibt 書いて寄越してゐる。 32. Die Kirche 敎會は von allen Gläubigen 凡ての信者から verlangt (次の事を) 要求する。man 人は sechs Tage[2] 六日 arbeiten 働き und そして einen Tag[3] 一日 ausruhen 休養すべきである、sonst 然らずんば man 人は in den Himmel 天國へ könne

nicht aufgenommen werden 迎へられることが出來ないだらう。 33. Er 彼は an sie 彼女の側へ trat heran[4] 歩み寄り und そして wie sie sich befinde[5] 彼女は自分自身を如何に見出すか（御機嫌如何ですか）と fragte 質ねた、und すると sie 彼女は ihm 彼に（次の樣に）答へた、sie 妾は eine Zeitlang[6] 暫くの間 sei krank gewesen 病氣であつた、aber が jetzt 今では sie 彼女は befinde sich ganz wohl 全く工合よく自分自身を見出し（全く達者で）und それで、wie er es sehe 彼がそれを見る如く〔御覽の通り〕auf die Straße gehe 往來に出る könne ことが出來るんですと。 34. er 彼は immer 何時も sei arm 貧乏で und そして oft 時々 habe gar nichts zu essen 全く食べるものを持たない aber が er 彼は immer 何時も sich zu helfen[7] 要領よくやることを habe gewußt 知つてゐたと Er 彼は mir 私に sagt 言ふ。 35. er 彼は ich 私が ins Zimmer 室へ hereintrat 入つた daß 事を sah 見た als 時に、er 彼は mir 私に、ich 私が auf den Stuhl 椅子へ mich setzen[8] 腰を掛け und そして ihm 彼に etwas Neues 何か新しい事を erzählen 物語つて mögen くれる樣に と höflich 叮嚀に sagte 言つた。

【註】 32. の〔1〕solle の裏には必ず Wollende Person（意欲せる人）がある。此文章では die Kirche が wollen してゐるのである。——〔2〕及び〔3〕sechs Tage も einen Tag も副詞。——33. の〔4〕heran は trat の前綴。不定法は herantreten.——〔5〕sich befinden は sein (to be) と同じ意味を有する再歸動詞。——〔6〕eine Zeitlang〔暫くの間〕を意味する時の副詞。——34. の〔7〕sich helfen は〔自衛する。切りぬける〕の意。——35. の〔8〕mich setzen は再歸動詞。〔私を置く。……へ坐る〕の意。

36. Er war so grob, daß er mich fragte, ob ich allein zurückbleiben wolle, wenn alle meine Kameraden in den Krieg gehen. 37. Als ich an seine Tür klopfte, rief er aus dem Zimmer heraus,[1] wer es sei. 38. Ein Mann von Ehre mache seine Feinde nicht lächerlich,[2] sondern verzeihe ihnen[3] großmütig, daß sie sich seiner[4] immer mit Freude erinnern mögen. 39. Der Nachbar wollte ihn lächerlich machen und machte in der Stadt bekannt,[5] er fürchte[6] sich so sehr vor Dieben, daß er die Haustür noch vor Abend zumache und niemand dann[7] zu ihm hineingehen dürfe, wenn man nicht

zuerst bewiesen habe, daß man ein Mann von Ehre sei. 40. Dieser Dichter mag noch so sehr arbeiten wie er will, er kann nichts Großes schreiben.

【譯】 36. alle meine Kameraden 私のすべての朋輩が in den Krieg gehen 出征する wenn〔時に、＝〕のに ich allein 私ばかりは zurückbleiben wolle 居殘る心算 ob かと daß er mich fragte 私を詰つた事 so ほど左樣に Er war grob 彼は失禮であつた〔失禮にもそんな事をぬかした〕。 37. ich 私が an seine Tür 彼の戸を klopfte 叩いた als 時、er 彼は aus dem Zimmer 室から、es それは wer 誰で sei あるかと rief heraus[1] 外へ呼ばはつた。 38. Ein Mann von Ehre 體面の士は seine Feinde 彼の敵（複）を mache nicht lächerlich,[2] 嘲弄する勿れ sondern むしろ sie 彼等が（敵が）immer 常に mit Freude 喜んで seiner[4] 彼を sich erinnern 思ひ出す daß mögen やうに großmütig 寬大に verzeihe ihnen[3] 彼等を（に）恕す可きである。 39. Der Nachbar 隣人は ihn 彼を wollte lächerlich machen 嘲弄しようと思つて、und それで、er 彼は（ihn を指す）sehr 非常に vor Dieben 泥棒（複數）を fürchte[6] sich 恐れてゐる so, daß ので er 彼は noch vor Abend 未だ 夕方前に die Haustür 戸口を zumache 閉め und て man 人が ein Mann von Ehre 體面の士で sei ある daß ことを、man 人が zuerst 先づ nicht bewiesen habe 證明しなかつた wenn 時、dann[7] その場合には zu ihm 彼の所へ niemand 如何なる人も（……ない）hineingehen dürfe 入つて行くことを許されないと in der Stadt 町中に machte bekannt[5] 知らしめた（觸れた）。 40. Dieser Dichter 此の詩人は wie er will 彼が欲する如くに（どんなに）mag noch so sehr arbeiten 甚だしく勉强しても、er 彼は kann nichts Großes schreiben 何等偉大なものを書くことが出來ない。

【註】 37. の〔1〕heraus は rief の前綴。この分離動詞不定法は herausrufen〔內から外へ向つて叫ぶ〕。——38. の〔2〕lächerlich machen は〔嘲弄する。笑草にする。〕の意。——〔3〕ihnen は譯語の便宜上〔を〕に譯す。——〔4〕seiner は人代名詞第二格。sich erinnern は補足として二格をとる。從つて便宜上 seiner を〔彼を〕に譯す。sich erinnern は再歸動詞。文法 161.——39. の〔5〕bekannt machen は〔廣告する。公にする〕。——〔6〕sich vor etwas fürchten は〔或物を恐怖する〕。——〔7〕dann は次の wenn 接續詞と關係してゐる。

第十七課

接續法第二式

[an-] bieten	提供する	vorziehen	選ぶ
Möglichkeit	可能性	Hilfe, *f.*	助け
das letzte	後者	gelten [と三格]	に向けられる
mitleidig, *a.*	憐れみ深き	lächeln	微笑む
dazu	それに對して	heutig, *a.*	今日の
behandeln	扱ふ、あしらふ	schlimm, *a.*	困つた、厄介な
wenigstens	せめて	bewundern	嘆稱する
schaffen	創る	Stoff, *m.*	材料
Roman, *m.* [ロまーン]	小說	wirklich	本當に
im stillen	窃かに	Gelegenheit	機會
vorausbezahlen [分離]	前拂する	vertrinken	飲み果たす
wissenschaftlich	科學的	schildern	叙述する
armselig	憐れな、けちな	Fall, *m.*	場合

1. Wie? Was? Ich wäre nicht glücklich mit meinem schönen Weib und meinen neun Kindern? Was verlangst du noch mehr? Vielleicht, daß ich ein reicher Mann werde? Freund, wenn man reich ist, ist man nicht so glücklich, reiche Leute haben größere[1] Sorge als wir. Wenn man mir zwei Möglichkeiten anböte, entweder[2] reich oder glücklich zu sein, würde ich mir sicher das letzte vorziehen.

【譯】 1. Wie えつ? Was 何んですつて? Ich 私は mit meinem schönen Weib und meinen neun Kindern 私の美しい妻とそして私の九人の子供と一緒にゐて wäre nicht glücklich? 幸福でないんですつて? (實際は幸福だのに變な疑惑を持つてゐるものだ。) du 君は noch mehr 尙この上 Was 何を verlangst 要求しますか。Vielleicht 多分 ich 私が ein reicher Mann 富者にでも werde なる daß 事を (事でも要求するのか。) Freund 友よ、wenn 若し (……なら)

man 人が reich ist 金持であるなら、man 人は so そんなに ist nicht glücklich 幸福ではない、reiche Leute 富める人々は、wir 我々 (が心配を持つてゐる) als より größere[1] 大なる Sorge 心配を haben 持つてゐる。Wenn 若し (……ならば) man 人が mir 私に reich (zu sein) 金持である entweder[2] か (……oder と共に) glücklich zu sein 幸福である oder かの zwei Möglichkeiten 二個の可能性を anböte 假りに提供するならば、ich 私は mir 私に sicher 吃度 das letzte 後者を (幸福であるの方を) vorziehen 採る würde でせうね。

【註】 1. の [1] größere は groß の比較級にして Sorge の附加語である。この比較級は als (英語の than) [より] に關係してゐる。——[2] entweder は oder と關係して、[……か或は……か] の意である。英語の either……or と同じ。これと反對に [……でも……でもない] は weder……noch である。これは英語の neither……nor と同じ。

2. Dein Bruder hatte uns[1] einen Brief geschickt, worin er uns[2] um Hilfe bat[3] Aber wir haben ihm[4] nicht geholfen, denn er ist uns nicht lieb Wenn er auch unser eigener Bruder wäre, so hätten wir ihm doch keine Hilfe gegeben.

【譯】 2. Dein Bruder 汝の兄弟は uns[1] 吾々に einen Brief 一通の手紙を hatte geschickt 寄越した、worin その中で er 彼は uns[2] 吾々に um Hilfe bat[3] 助けを乞うた。Aber 然しながら wir 吾々は ihm[4] 彼を (に) haben nicht geholfen 助けなかつた。denn 何故なら (……から) er ist uns nicht lieb 彼は吾々に可愛くない (吾々は彼を愛さない) からである。Wenn auch たとへ (……とも) er 彼が unser eigener Bruder 吾々自身の兄弟で wäre あらうとも、so それでも doch 矢張り wir 吾々は ihm 彼に keine Hilfe いかなる助けも (……しない) hätten gegeben 與へなかつたに違ひない。

【註】 2. の [1] uns は三格。——[2] uns は四格。——[3] bat は bitten の過去形。um etwas bitten は [或物を乞ふ] の意。bitten は他動詞であるから [2] の uns は四格なのである。——[4] の ihm は helfen (geholfen の現在形) が三格支配の自動詞であるから、三格となつてゐる。

3. Meine erste Liebe galt einem Mädchen aus der besten Familie unserer Stadt. Sie war aber zu reich für mich armen Knaben[1] und wenn ich ihr meine Liebe erklärt hätte, würde sie dazu wohl mitleidig gelächelt haben.

【譯】 3. Meine erste Liebe 私の初戀は unserer Stadt 吾々の町の aus der besten Familie 名門の出の einem Mädchen 少女に galt 向けられた。Sie 彼女は aber 然しながら für mich armen Knaben[1] 貧しい少年である私にとつて zu reich 餘りに富裕で war あつた、und そして wenn 若し ich 私が ihr 彼女に meine Liebe 私の戀を erklärt hätte 打明けたなら、sie 彼女は dazu それに對して wohl 恐らく mitleidig 憐憫の情を以て würde gelächelt haben 微笑んだであらう。

【註】 3. の〔1〕armen Knaben は mich と同格語で、für mich armen Knaben で〔私卽ち貧しき少年にとつて〕の意。

4. Die Männer, die mit mir in demselben Zimmer saßen, redeten alle so gelehrt über dies und über das, daß ich die ganze Zeit[1] stumm da saß und nur dumm lächelnd zuhören mußte. Auch getraute[3] ich mir nicht, um eine Erklärung desjenigen Ausdrucks zu bitten, den ich nicht verstand, denn, auch wenn[4] sie ihn mir erklärt hätten, würde ich sogar diese Erklärung selbst nicht verstanden haben.

【譯】 4. mit mir 私と一緒に in demselben Zimmer 同じ室に saßen 坐つてゐた die Männer, die ところの人々（男達）は、alle 一人殘らず über dies und das これやあれやに就いて〔so〕gelehrt…… 〔daß〕博識に（……から）redeten 談つた〔から、〕ich 私は die ganze Zeit[1] その間中 stumm 默つて da saß 其處に坐つて、und そして nur 單に dumm lächelnd 愚かに微笑しながら zuhören mußte 傾聽しなければならなかつた。Auch それに ich 私は、ich 私が nicht verstand 解らなかつた den ところの desjenigen Ausdrucks その言葉の

um eine Erklärung……zu bitten 說明を乞ふだけの getraute[3] mir nicht 勇氣がなかつた。denn 何故なら（……から）auch wenn[3] 假に（……としても）sie 彼等が ihn それを（その言葉を）mir 私に erklärt hätten 說明したとしても、ich 私は sogar diese Erklärung selbst この說明そのものすらも würde nicht verstanden haben 理解しなかつたらうから。

【註】 4. の〔1〕die ganze Zeit は時の副詞で四格である。四格の場合には〔……の間〕を表はす。二格の時の名詞が副詞になつて居ると時點を表はす。——〔2〕getraute mir は〔……自信がある、……勇氣がある〕の意。getrauen は三格支配の再歸動詞。——〔3〕auch wenn は假定を表はす接續詞。

5. Die Eltern behandeln ihre Söhne und Töchter, als ob[1] diese noch kleine Kinder wären. Diese dagegen behandeln ihre Eltern, als ob sie gar nichts von der heutigen Welt wüßten, d. h.[2] als ob auch sie kleine Kinder wären.

【譯】 5. Die Eltern 兩親は ihre Söhne und Töchter 彼等の悴達や娘達を、als ob[1] 恰も（……かくの如に）diese 是等のものが noch 未だ kleine Kinder wären 小さい子供等であるかの如くに behandeln あしらふ。dagegen これに反して Diese 是等のものは（悴、娘達）は、ihre Eltern 彼等の兩親を、als ob 恰も sie 彼等が（兩親が）von der heutigen Welt 今日の世界に就いて gar nichts wüßten 全く何んにも知らないかの如く、d. h. 卽ち als ob 恰も auch sie 彼等も又 kleine Kinder wären 小さい子供達であるかの如くに behandeln あしらふ。

【註】 5. の〔1〕als ob は〔恰も……の如くに〕の意。英語の as if と同じ。——〔2〕d. h. は das heißt の略で、〔それは意味する〕から轉化して〔卽ち〕となつたものである。丁度英語などで使ふ i. e.（ラテン語の id est の畧で「卽ち」「換言すれば」の意）と同じ。

6. Man ist nie zu[1] alt, zu lernen. Dagegen ist es sehr gut möglich, daß man mit der Zeit zu[2] alt wird, um lernen zu wollen: das ist das Schlimme. Und doch bleibt[3] man immer

jung genug, um sich sagen zu können: ach, hätte ich doch[4] wenigstens etwas gelernt!

【譯】 6. Man 凡そ人は zu lernen 學ぶにしては zu[1] alt 餘りに老年だ〔なんて事は〕ist nie 決してない。Dagegen それに反して mit der Zeit 時日の經つ中には um lernen zu wollen 學ばんと「欲する」にしては zu[2] alt wird 餘りに年を取り過ぎる daß なんて事は ist es sehr gut möglich 兎かく有り勝ちなものである。Und doch その癖 ach, hätte ich doch[4] wenigstens etwas gelernt! 「あゝ、俺もせめて何か學んで置くのだつたになあ！」um sich sagen zu können と獨語し得るだけの bleibt[3] man immer jung genug 若さは何時だつて持つてゐる（から面白い）。

【注】 6. の〔1〕形容詞の前の zu は〔何々過ぎる、餘りに何々である〕の意。英語の形容詞の前にある too と同じ。——〔2〕zu＋形容詞、um zu＋動詞は〔何々であるべく餘りに何々である、即ち餘りに何々であるから何々できない〕、の意を表はす形式。英語の too＋形容詞＋to＋動詞の形式と同じ。——〔3〕bleibt jung の bleiben は狀態の繼續を表はす。英語の to remain と同じ種類の動詞である。——〔4〕doch wenigstens で「せめて」。

7. Er war drei Jahre lang in Berlin und hatte seinem Freunde kein Wort geschrieben. Er hätte es eigentlich tun sollen, denn er liebte diesen früher wie seinen eigenen Bruder.

【譯】 7. Er 彼は in Berlin 伯林に drei Jahre lang 三年の間 war ゐた、und そして seinem Freunde 彼の友人に hatte kein Wort geschrieben 一言も（手紙を）書かなかつた。Er 彼は es それを（手紙を出すこと）eigentlich 實は hätte tun sollen 爲すべきであつたのだ。denn 何故なら er 彼は diesen 後者を（友人を）wie seinen eigenen Bruder 彼自身の兄弟の如くに früher 昔 liebte 愛してゐたのだから。

8. Dieser weltbekannte Dichter blieb sein Leben lang arm und starb auch sehr jung. Und doch, wenn er nicht arm gewesen wäre, so hätte er wohl nicht ein Meisterwerk, wie man es überall bewundert, geschaffen. Gesetzt,[2] er wäre ein reicher, glücklicher Mann gewesen, woher hätte er wohl einen Stoff zu seinem Roman genommen?

【譯】 8. Dieser weltbekannte Dichter この世界に知られたる詩人は sein Leben lang 彼の一生の間 blieb arm 絶えず貧乏で und そして auch sehr jung 又非常に若くて starb 死んだ。Und doch 然しながら、wenn 若し er 彼が nicht arm gewesen wäre 貧乏でなかつたとすれば、so 然らば er 彼は wohl 多分、man 人が überall 到る處で bewundert 歎稱する wie[1] es (welches) ところの ein Meisterwerk 傑作を hätte nicht…… geschaffen 創作しなかつたであらう。er 彼が ein reicher, glücklicher Mann 富める幸福な人で wäre gewesen あつたと Gesetzt[2] 假定すれば、woher 何處から er 彼は einen Stoff zu seinem Roman 彼の小說の材料を wohl 恐らく hätte genommen? 採つたであらうか。

【注】 8. の〔1〕wie は es と一緒にして關係代名詞 welches と同樣に譯す〔文法第二卷 173〕。——〔2〕gesetzt は setzen の過去分詞にして、gesetzt, daß は〔云々であることを假定すれば〕の意〔文法 207 の (3)〕。

9. Wer hätte gedacht, daß aus[1] dem Sohne eines armen Arbeiters, oder besser[2] eines Bettlers — Sie wissen doch, wie sein Vater leben mußte — einst ein weltberühmter Gelehrter werden würde?

【譯】 9. eines armen Arbeiters, 一人の貧しい勞働者の、oder besser[2] 或はもつと精確に言へば eines Bettlers 乞食の aus[1] dem Sohne 倅から—— Sie 貴方は、sein Vater 彼の父が wie どんな leben mußte 生活をしなければならなかつたかは wissen doch 御存じのことではありませうが—— einst 他日 ein weltberühmter Gelehrter 世界的に有名なる學者が werden würde 出來上るであらう daß とは Wer 誰が hätte gedacht? 考へたであらうか（思ひ掛けなかつた）。

【註】 9. の〔1〕aus は werden と一緒にて、〔から生ずる、から出來る〕の意。——〔2〕oder besser は〔或はもつと精確に、明白に言へば〕の意。英語の or rather と同じ。

10. Sie hat vor kurzem ihren Mann verlassen und lebt jetzt mit ihren Kindern bei ihren Eltern. Ich glaube, wenn sie ihren Mann nicht verlassen und ihm geholfen hätte, so würde er nicht ein Dieb[1] geworden sein, wie er es wirklich tat.[2]

【譯】 10. Sie 彼女は vor kurzem 先達て、ihren Mann 彼女の夫を hat verlassen 棄てた、und そして jetzt 今では mit ihren Kindern 彼女の子供達と一緒に bei ihren Eltern 彼女の兩親の許で lebt 生活してゐる。Ich glaube 私は信ずる、wenn 若し sie 彼女が ihren Mann nicht verlassen (hätte) 彼女の夫を棄てずに、ihm geholfen hätte 彼を(に)助けたならば、so そしたら er 彼は wirklich 實際に es tat[1] それをなした(そうなつた……泥棒になつた) wie やうに würde nicht ein Dieb geworden sein 泥棒にはならなかつたに違ひないと。

【註】 10. の〔1〕werden が〔……に成る〕の意を有するときは次に來る名詞は一格なり。從つて ein Dieb は一格。——〔2〕tat は tun の過去形で、代動詞の役を演じてゐる譯である。だから er es tat で〔彼が泥棒になつた〕の意になる。

11. Ich wußte, daß er mich im stillen liebte. Aber er war mir zu jung und darum bot ich ihm keine Gelegenheit, mir seine Liebe zu erklären. Wenn er es dennoch getan hätte, so würde ich ihm nicht einmal[1] zugehört, sondern ihn nur wie ein kleines Kind behandelt haben und ein mitleidiges Lächeln wäre alles[2] gewesen, was ich ihm als Antwort gegeben hätte.

【譯】 11. Ich 私は、er 彼が im stillen 密かに mich liebte 私を愛してゐる daß 事を wußte 知つてゐた。Aber けれども er 彼は mir 私にとつて war zu jung 餘りに若くあつた、und darum それ故、ich 私は ihm 彼に、seine Liebe

彼の愛を mir 私に zu erklären 打明けるべき bot keine Gelegenheit 何等の機會をも與へなかつた。Wenn 若し er 彼が dennoch それでも矢張り es getan hätte, それをしたならば(愛を打明けたならば)、so そしたら ich 私は ihm 彼に(彼の言葉に) würde nicht einmal[1] zugehört (haben) 耳すら傾けない sondern で nur 單に wie ein kleines Kind 小さい子供の如くに ihn 彼を (würde) behandelt haben あしらつたことでせう、und そして ein mitleidiges Lächeln 憐れみの微笑が、ich 私が ihm 彼に als Antwort 答として gegeben hätte 與へた was ところの alles[2] 凡てで wäre gewesen あつたでせう。

【註】 11. の〔1〕nicht einmal は〔すら……しない〕の意。——〔2〕alles[2] をうける關係代名詞は常に was である

12. So einen Taugenichts wie diesen Arbeiter habe ich noch niemals gesehen. Ich weiß nicht, wie ich ihn behandeln soll. Bezahlte[1] ich ihn voraus, so vertränke er das Geld und käme nicht zur Arbeit; bezahlte ich ihn aber nicht voraus, so würde er auch nicht arbeiten wollen.

【譯】 12. Wie diesen Arbeiter 此の勞働者の如き so einen Taugenichts 斯樣なやくざ者を ich 私は noch 未だ habe niemals gesehen 見たことがない。Ich 私は、ich 私が ihn 彼を wie どの樣に behandeln soll あしらふべきか weiß nicht 解らない。(若し) ihn 彼に (を) ich 私が bezahlte[1] voraus 前拂をするとすれば、so さうすれば er 彼は das Geld その金を vertränke 飲んで費ひ、und そして zur Arbeit 働きに käme nicht 來ないだらう; aber 然しながら (若し) ihn 彼に ich 私が bezahlte nicht voraus 前拂をしないとすれば、so さうすると er 彼は auch 又 würde nicht arbeiten wollen 働かうとはしないであらう。

【註】 12. の〔1〕Bezahlte は本來ならば vorausbezahlen となつて、Bezahlte の位置に wenn が來るべきであるが、wenn を省略したゝめに動詞が文の初めに來たのである〔第二卷 129〕。voraus は分離されたる前綴にして、vorausbezahlen が不定法なり。

13. Dieser Roman behandelt einen wissenschaftlichen Stoff, d. h. es wird darin geschildert, wie schön es wäre, wenn wir Menschen

unsere kleine, armselige Erde einmal verlassen, in einem Fahrzeug durch das Weltall fahren und Mond und Mars und unsere andere Bruderwelten besuchen könnten.[1]

【譯】 13. Dieser Roman 此の小說は、einen wissenschaftlichen Stoff 科學的材料を behandelt 取扱つてゐる。d. h. 卽ち darin その中には (小說の中には)、wenn 若し wir Menschen 吾々人間が unsere kleine, armselige Erde 吾々の小さい貧弱な地球を einmal 一度 verlassen 去つて、in einem Fahrzeug 乘物に乘つて durch das Weltall 宇宙を通つて fahren 行き、und そして Mond 月 und 及び Mars 火星 und 及び unsere andere Bruderwelten 其他の吾々の同族世界を besuchen 訪れる könnten[1] ことが出來るならば、es その事は (wenn 以下の文章を受ける) wie schön どんなに愉快で wäre あるだらうか es と云ふそれが (wie 以下の文章を受けてゐる) wird geschildert 述べられてゐる。

【註】 13. の (1) könnten は verlassen, fahren にも、besuchen と同樣に關係してゐる。fahren は乘物で行く時——それが汽車、汽船、馬車であらうと、——に用ひられる。

14. Ich wollte, ich wäre ein Vogel. Ich flöge dann frei durch die Luft, verließe bald meine Heimat, um durch die ganze Welt zu reisen. Ich hätte[1] auch nicht bei meinem Vater zu arbeiten, sondern spielte, sänge und freute mich[2] vom frühen Morgen bis tief in die Nacht, und wie glücklich wäre ich, wenn ich mitten im grünen Wald meinen Tod finden könnte!

【譯】 14. Ich 私は、ich 私が wäre ein Vogel 鳥であれば wollte 〔いゝ〕と思ふ。dann そしたら、Ich 私は frei 自由に flöge durch die Luft 宙を通つて飛んで、durch die ganze Welt 全世界を通じて um zu reisen 旅行するために、bald 早速 meine Heimat 私の故鄕を verließe 去るであらう。Ich 私は auch 又 bei meinem Vater 父の側で hätte[1] nicht……zu arbeiten 働くには及ばなく sondern て、spielte 遊び、sänge 唄ひ vom frühen Morgen 早朝から bis tief

in die Nacht 夜晩くまで freute mich[2] 樂しむであらう、und そして wenn 若し ich 私が im grünen Wald 綠の森の mitten 眞中で meinen Tod 私の死を finden konnte 見出すことが出來るなら、ich 私は wie glücklich どんなに幸福で wäre あらう。

【註】 14. の (1) hätte は zu arbeiten の zu と關係してゐる。haben zu は云々す可く持つ、卽ち云々せねばならぬ、の意。英語の have to も同樣なり。——(2) freute mich は 再歸動詞 sich freuen の變化形。〔喜ぶ、樂しむ〕の意。

15. Ist es wahr, daß unser Onkel krank ist? Wenn es wahr ist, so müßte ich gleich nach Japan fahren, denn es ist billig, daß man einen Mann, von dem[1] man wie ein Sohn geliebt wird, wieder wie seinen eigenen Vater ansehe und ihn in seinem Unglück nicht allein lasse.

【譯】 15. unser Onkel 吾々の叔父が krank 病氣で ist ある daß と云ふ事は es それは Ist wahr? ほんとか。Wenn 若し es それが wahr ist ほんとであるならば ich 私は gleich 直ちに nach Japan 日本へ müßte fahren 行かねばならないだらう。denn 何故なら、man 自分が wie ein Sohn 子息の如くに von dem[1] ……geliebt wird その人に依つて愛されてゐるところの einen Mann (その) 人を (男を)、wieder 再び wie seinen eigenen Vater 彼自身の父の如くに ansehe 思ひ、und そして ihn 彼を in seinem Unglück 彼の不幸の中に nicht allein lasse 獨りで放つて置かない daß といふ事は es それは ist billig 正當であるからである。

【註】 15. の (1) dem は einen Mann を受けて居る關係代名詞。

16. Nun ist unser großer König tot. Ich war immer sein Freund, für ihn hätte ich alles getan, hätte sogar mein Leben angeboten, wenn mir eine Gelegenheit dazu gegeben worden wäre, und das wäre vielleicht ein Beweis gewesen, wie er von seinem Volke geliebt war

【譯】 16. Nun 今や unser großer König 吾々の偉大なる王樣は ist tot 死んだ。Ich 私は immer 常に sein Freund 彼の友人（崇拜者）で war あつた。für ihn 彼のために（なら）ich 私は alles 凡ての事を hätte getan なしたであらう、sogar mein Leben 私の生命さへ hätte angeboten 提供したであらう、wenn 若し mir 私に dazu それに對する eine Gelegenheit 機會が gegeben worden wäre 與へられたなら。und そして das その事は、er 彼が von seinem Volke 彼の國民に依つて wie どんなに geliebt war 愛されてゐたかといふ ein Beweis 證據で vielleicht 恐らく wäre gewesen あつたであらう。

17. Das wäre nicht so schlimm, wie du glauben magst, denn wenn du das[1] in Frage stehende Geld nicht vertrunken hättest, wie du es wirklich tatst, Gott[2] weiß, was du damit[3] angefangen hättest! Glaube mir, du hast von zwei Unglücksfällen den bessern vorgezogen.

【譯】 17. Das それは du 汝が glauben magst 信じて居るだらう wie やうに so そんなに schlimm 困つた事では wäre nicht なからう、denn 何故なら wenn 若し du 汝が das[1] in Frage stehende Geld 問題の金を、du 汝が wirklich 實際に es tatst それをなした（飲んで使つた）wie 樣に nicht vertrunken hättest 飲んで使はなかつたとすれば、du 汝は damit[3] それ（その金）を以て was 何を angefangen hättest! おつ始めただらうかは Gott[2] weiß 神樣が御承知だ（蓋し想ひ半ばに過ぐるものあり）。Glaube mir 私に（私のいふ事を）信用しなさい、du 汝は von zwei Unglücksfällen 二個の不幸の場合の内の den bessern より良き方を hast vorgezogen 選んだのだ。

【註】 17. の〔1〕das は Geld の定冠詞。in Frage stehende は Geld の形容詞句。文字通りには「問題中に立てる」。——〔2〕Gott weiß は〔神樣が知つてゐる。即ち誰も知らない〕の意。——〔3〕damit の da は Geld を受けて居る。mit は anfangen と關係して、etwas mit etwas anfangen といふ熟語。

18. Die Arbeiter und die Arbeiterinnen trauen diesem Herrn nicht, wollen gar nicht bei ihm arbeiten, er müßte sie denn[1] vorausbezahlen.

【譯】 18. Die Arbeiter 男勞働者達 und 及び die Arbeiterinnen 女勞働者達 は diesem Herrn この主人に trauen nicht 信用しない、gar 且つ（のみならず）bei ihm 彼の所で wollen nicht……arbeiten 働かうとはしない、er 彼が sie 彼等に（を）vorausbezahlen 前拂を müßte denn[1] してやるならば格別。

【註】 18. の〔1〕denn は否定的條件を表はし、außer wenn, wofern nicht の意である。例。Er hat mich verleumdet, ich müßte mich denn irren.〔彼は私を中傷した。さなくば私の思ひ違ひであらう。〕——〔2〕Ich lasse dich nicht, du segnest mich denn.〔私は汝を放さない、私を祝福してくれなくては。〕本卷の文法 216 の 2 を見よ。

19. Könnten Sie mir nicht mit Sicherheit sagen, was aus demjenigen Diebe geworden ist, der mir[1] vor kurzem auf der Straße eine Uhr stahl?

【譯】 19. Sie 貴方は、mir 私から[1] vor kurzem 先達て auf der Straße 往來で eine Uhr 時計を stahl 盜んだ der ところの aus demjenigen Diebe その泥棒が（から）was どう（何が）geworden ist なつたか（出來たか）、mit Sicherheit 確實に mir 私に könnten nicht……sagen? 仰言つては下されないでせうか。（本卷の文法 216 の 3 を見よ）。

【註】 19. の〔1〕mir は 三格の奪格にして、〔…… から〕の意。einem etwas stehlen は〔或人から或る物を盜む〕の意。奪格に就ては第四卷 416 に詳しき說明ある筈。

20. Die Neuigkeit, daß sein Onkel als reicher Mann von Amerika zurückkommt, dürfte doch etwas Wahres an sich[1] haben.

【譯】 20. sein Onkel 彼の叔父が als reicher Mann 金滿家として（となつて）von Amerika 米國から zurückkommt 歸る daß と云ふ Die Neuigkeit ニュースは doch 兎に角 an sich[1] それ自體に etwas Wahres いくらか眞實さを dürfte haben 持つてゐるらしい。

【註】 20. の〔1〕「多少」眞實性があると云ふ熟語が etw. W. an sich haben.

第十八課

形容詞副詞の比較級最高級

Ähnlichkeit, *f.*	相似性	mächtig	强大なる
Herrscher, *m.*	支配者	Griechenland	希臘
damals	當時	ersteigen	登り切る
bildende Kunst	造形美術	Gebirge, *n.*	山嶽
hineindringen	進入する	Rhein, *m.*	ライン河
[ein] atmen	吸ふ	Stelle, *f.*	地位
freiwillig, *a.*	自發的の	Winterpracht, *f.*	冬の壯觀 冬の裝ひ

1. Wenn Sie noch etwas Genaueres über diese wissenschaftliche Frage wissen wollen, so gehen Sie bitte zu einem Gelehrten hin,[1] ich habe Ihnen alles erzählt, was ich weiß.

【譯】 1. Wenn 若し Sie 貴方が diese wissenschaftliche Frage この科學的な質問に über 就いて noch 尙 etwas Genaueres 一層精確なことを wissen wollen お知りになりたいならば、so それならば Sie 貴方は bitte 何卒 zu einem Gelehrten 學者のところへ gehen hin[1] 行つて下さい、ich 私は、ich 私が weiß 知つてゐる was ところの alles 凡てを Ihnen 貴方に habe erzählt 申し上げました。

【註】 1. の〔1〕 hin は gehen の前綴。不定法は hingehen なり。

2. Von diesen beiden Werken des Dichters hat doch das frühere eine größere Bedeutung für mich.

3. Vor kurzem hat er sich mit der jüngsten Tochter des berühmten Kaufmannes, der reicher ist als er, verheiratet.[1]

【譯】 2. des Dichters 詩人の Von diesen beiden Werken この二つの作品の內、doch どうしても das frühere 初めのものゝ方が für mich 私にとつて eine größere Bedeutung より大なる意義を hat 持つてゐる。

3. Vor kurzem 先達て er 彼は、reicher als er 彼より金持で ist ある der ところの des berühmten Kaufmannes 有名な商人の der jüngsten Tochter 末の娘(一番年少の娘) mit と hat sich verheiratet[1] 結婚した。

【註】 3. の〔1〕 verheiraten は再歸代名詞 sich と共に sich mit einem verheiraten は〔或人と結婚をする〕の意。

4. Sein Vater hält ihn für[1] dümmer, als er es wirklich ist, und das macht ihn immer[2] dümmer. Wenn jener eine bessere Meinung von diesem hätte, so würde es diesem wenigstens eine Möglichkeit geben, sich klüger zu zeigen.

【譯】 4. Sein Vater 彼の父は ihn 彼を、er 彼が wirklich 實際に es ist それである als より dümmer 以上に馬鹿だ für[1] として hält 考へる、und そして das そのことが ihn 彼を immer[2] dümmer 益々馬鹿に macht ならしめる。Wenn 若し (假に) jener 前者が (父が) von diesem 後者 (彼) に就いて eine bessere Meinung より良き意見を hätte 持つとするならば、so 其の時は es それは diesem 後者に (彼に)、sich 自身を klüger より利巧に zu zeigen 示すべき eine Möglichkeit 可能性を wenigstens 尠くとも würde geben 與へるでせうに。

【註】 4. の〔1〕 für は、〔……として〕、の意。halten は、(考へる、思ふ、) の意。für etwas halten は屢々用ひられる成句。——〔2〕 immer の次に比較級が來ると (益々……)、の意。immer besser は、(益々良い)。

5. Was man auch darüber sagen möge, mit ihrem ältesten Bruder hat sie die meiste Ähnlichkeit.

6. Zwar[1] war ich früher mit ihm und seinen Kameraden

befreundet, das ist wahr, aber in nähere Beziehung mit ihnen bin ich noch niemals getreten.

【譯】 5. man 人が darüber それに就いて Was sagen möge 何を言はうと (構はない)、sie 彼女は ihrem ältesten Bruder 一番年上の兄弟と die meiste Ähnlichkeit 一番多くの相似性を hat 持つてゐる。

6. Zwar[1] 成程 ich 私は früher 以前 ihm 彼 und 及び seinen Kameraden 彼の仲間達 mit と war befreundet 親しくあつた、das それは ist wahr ほんとである、aber が然し ich 私は noch 未だ niemals 決して (……ない) mit ihnen 彼等と in nähere Beziehung[2] より近い間柄に bin getreten 入つたことはなかつた。

【注】 6. の [1] zwar (成程、實に) があれば、次の文章中には aber, jedoch, doch が必ず來る。——[2] 本卷文法 221.

7. Demosthenes war einer der berühmtesten Redner seiner Zeit, und Philipp von Mazedonien der mächtigste Herrscher in ganz Griechenland.

8. Damals stand Griechenland noch allein in der Welt und hatte die höchste Stufe seiner Kultur erstiegen.

【譯】 7. Demosthenes デモステネスは seiner Zeit 彼の時代の der berühmtesten Redner 最も有名なる演說家の中の einer 一人で war あつた。und そして Philipp von Mazedonien マケドニアのフイリツプ (王) は in ganz Griechenland 全希臘に於ける der mächtigste Herrscher 最も强大な支配者で (war) あつた。

8. Damals 當時 Griechenland 希臘は in der Welt 世界に於て stand noch allein 未だ一人天下で und ゐて seiner Kultur それの(希臘の)文化の die höchste Stufe 最高階段に hatte erstiegen 達してゐた (登り切つてゐた)。

9. Andere Länder mögen auch ihre Schönheiten besitzen, in Griechenland finden wir aber die allerschönsten Werke der bildenden Kunst.

10. Da mein Onkel ebenso sparsam war wie mein Vater, so hatte ich weniger zu essen als früher, und mehr zu arbeiten als bei meinen Eltern.

【譯】 9. Andere Länder auch 他の諸國も ihre Schönheiten それ等の美を mögen besitzen 所有してゐるかも知れない、aber けれど in Griechenland 希臘に於て、wir 吾々は der bildenden Kunst 造形美術の die allerschönsten Werke 極美の諸作品を finden 見出す。

10. mein Onkel 私の叔父は mein Vater 私の父 ebenso sparsam wie と同樣に儉約で war あつた Da から、so それで ich 私は als früher 以前より weniger zu essen 食べ物は尠く、als bei meinen Eltern 私の兩親の許でよりも hatte mehr zu arbeiten なすべき仕事が多かつた。

11. Die Aussicht wird immer schöner, aber der Abend wird immer dunkler.

12. Je mehr man in das Gebirge hineindringt, desto kälter wird die Luft.

【譯】 11. Die Aussicht 眺望は immer schöner 益々美しく wird なる aber が der Abend 夜は immer dunkler 益々暗く wird なる。

12. man 人は (吾々は) in das Gebirge 山地の中へ je mehr.....hineindringt 進入すればする程益々、desto それに應じて die Luft 空氣は kälter 段々冷く wird なる。

13. Ich hatte ihn für einen schlechteren Menschen gehalten, als er wirklich war, denn der Haß ist gerade so blind wie die Liebe.

14. Von allen Flüssen in Deutschland ist natürlich der Rhein der größte und der schönste. Die Deutschen nennen[1] ihn „Vater Rhein."

【譯】 13. Ich 私は ihn 彼を er 彼が wirklich war 實際にあつた als よりは einen schlechteren Menschen 悪い人間 für と (として) hatte gehalten 思つて

ゐた、denn 何故なら der Haß 憎惡は wie die Liebe 戀と gerade 丁度 so blind 同樣に盲目で ist あるからである。

14. in Deutschland 獨逸に於ける Von allen Flüssen 凡ての河川の中 natürlich 勿論 der Rhein ライン河が ist der größte und der schönste 最も大きく、そして最も美しい。Die Deutschen 獨逸人は ihn 彼を（ライン河を）„Vater Rhein"「父ライン」と nennen[1] 呼ぶ。

【註】 14. の〔1〕nennen は二個の四格を補語とする他動詞である。從つて „Vater Rhein"〔父ライン、ライン父さん〕は ihn と共に四格である。

15. Unter allen Völkern der Welt ist das deutsche das fleißigste.

16. Der junge Knabe arbeitet am fleißigsten, wenn er allein in seiner Stube sitzt. Darum lasse ich keinen von seinen Spielkameraden zu ihm hineingehen.

【譯】 15. der Welt 世界の Unter allen Völkern 諸國民の間で das deutsche 獨逸國民が das fleißigste 最も勤勉で ist ある。

16. Der junge Knabe この若い少年は er 彼が（この少年が）allein 獨りで in seiner Stube 彼の室內に sitzt 坐つてゐる Wenn とき、am fleißigsten 一番勤勉に arbeitet 勉强する。Darum が故に ich 私は von seinen Spielkameraden 彼の遊び仲間達の內の keinen 一人も（……ない）zu ihm 彼の處へ lasse hineingehen 入らしめない。

17. Die Wälder sind im Sommer am schönsten, aber die deutschen Wälder, besonders diejenigen, die tief im Gebirge liegen, muß man auch in ihrer Winterpracht bewundern.

18. Ich werde möglichst schnell zurückkommen, spätestens um drei Uhr will ich wieder hier sein.

【譯】 17. Die Wälder（諸々の）森は im Sommer 夏に於て sind am schönsten 一番美しいものである、aber が die deutschen Wälder 獨逸の（諸々の）森は、besonders 特に tief im Gebirge 連山の奧深くに liegen 橫はつてゐる die とこ

ろの diejenigen それ等のものは（森を）man 人は auch in ihrer Winterpracht 亦それ等の冬の壯觀に於ても muß bewundern 嘆稱〔賞翫〕する必要がある。

18. Ich 私は möglichst schnell 出來るだけ早く werde zurückkommen 歸つてくる、spätestens 遲くとも um drei Uhr 三時には ich 私は wieder また hier こゝに will sein ゐようと思ふ（歸つてくる心算だ）。

19. Um gesund zu bleiben, muß man so früh wie nur möglich aufstehen und die frische Morgenluft einatmen.

20. Wenn man seine Ehre verloren hat, so gibt[1] es höchstens zwei Möglichkeiten: entweder[2] verläßt man seine Stelle oder man gibt sich[3] einen freiwilligen Tod.

【譯】 19. Um gesund zu bleiben 健康を保たんが爲めには、man 人は so früh wie nur möglich とにかく出來得る限り早く aufstehen 起き und そして die frische Morgenluft 新鮮な朝の空氣を muß einatmen 吸はねばならない。

20. Wenn 若し man 人が seine Ehre 自己の（彼の）名譽を verloren hat 失つた so ならば、man 人は seine Stelle 自己の（彼の）地位を verläßt 棄てる entweder[1] か oder 又は man 人は sich[3] 自身に einen freiwilligen Tod 自發的な死を gibt 與へるかの zwei Möglichkeiten 二つの可能な場合が höchstens 精々（高々）es gibt[1] あるのみである。

【註】 20. の〔1〕es gibt は一般的存在を示す。英語の there is, there are と同じ。この場合次に來る名詞は、單、複、孰れにしても四格である。——〔2〕entweder……oder は〔……か又は……の孰れかである〕の意。——〔3〕sich は三格の再歸代名詞。

第十九課

前置詞

vergleichen	比較する	Erderschütterung, *f.*	地震
Einwohner, *m.*	住民	Abwesenheit, *f.*	留守
regieren	支配する	Statthalter, *m.*	代官、知事、統治代理
Kanal, *m.*	運河	Eigentümlichkeit, *f.*	特有性
heutzutage	現今	Sterngucker, *m.*	天體望遠鏡
Lebewesen, *n.*	生物	fest, *a.*	確乎たる
Stunde, *f.*	時間	rauben	奪ふ
Waffe, *f.*	武器	bei sich	手許に
antreffen	出合ふ	Umweg, *m.*	廻り路
deshalb	それ故	jemals	曾て、一度
betrachten	觀察する	der obere Stock	二階
Blumentopf, *m.*	花鉢	Katze, *f.*	猫
schauen	眺める	Bevölkerung, *f.*	人口
Inselreich, *n.*	島國	bald	すぐに〔動もすれば〕

1. Japan wird[1] wegen seiner Schönheit und der Ähnlichkeit der Sprache oft mit Italien verglichen. 2. Unser Lehrer hat uns von den Städten erzählt, die infolge einer großen Erderschütterung mitsamt ihren Einwohnern zugrunde gegangen[2] sind.

【譯】 1. Japan 日本は seiner Schönheit その美 und と der Ähnlichkeit der Sprache 國語の相似性の wegen ために oft 屢々 Italien 伊太利 mit と wird[1] verglichen 比較せられる。 2. Unser Lehrer 吾々の先生は einer großen Erderschütterung ある大地震の infolge 結果 ihren Einwohnern それ等の (諸都市の) Einwohnern 住民 mitsamt 諸共 zugrunde gegangen[3] sind 滅亡した die ところの den Städten 諸都市 von に就いて uns 吾々に hat erzählt 物語つた。

【注】 1. の〔1〕 wird は受身の助動詞。本動詞である verglichen は vergleichenの過去分詞。——2. の〔2〕 zugrunde gehen は〔滅亡する。衰滅する〕の意の熟語。

3. Denjenigen, der während der Abwesenheit des Herrschers an dessen Statt regiert, nennt man einen Statthalter. 4. Die Eigentümlichkeit der Stadt Venedig ist, daß sie anstatt der Straßen Kanäle hat.

【譯】 3. des Herrschers 元首の der Abwesenheit 留守の während 間 an dessen Statt 其の人の代りに regiert 統治する der ところの Denjenigen その人を man 人々は (吾々は) einen Statthalter 統治代理と nennt 名付ける。 4. der Stadt Venedig ヱニス市の Die Eigentümlichkeit 特有性は、sie それが (都市が) der Straßen 道路 (複數) の anstatt 代りに Kanäle 運河 (複數) を hat 持つてゐる daß と云ふ事 ist である。

5. Unweit des Bahnhofs steht die Kirche, und neben dieser[1] befindet[2] sich eine Schule. 6. Heutzutage hat man vermittelst des Fernrohrs, welches auch Sterngucker genannt wird, entdeckt, daß auf dem Mars, der oft mit unserer Erde verglichen wird, Kanäle zu sehen sind,[3] wie sie[4] nur bei höheren Lebewesen möglich sind.

【譯】 5. des Bahnhofs 停車場の Unweit 程遠からぬ處に die Kirche 教會が steht 立つて居り、und そして dieser[1] これの (教會の) neben 傍らに Schule 一つの學校が befindet sich[2] ある。 6. Heutzutage 現今 man 人々は auch 又 Sterngucker 天體望遠鏡とも genannt wird 稱せられる welches ところの des Fernrohrs 望遠鏡に vermittelst 依つて(を用ひて) oft 屢々 unserer Erde 吾々の地球 mit と verglichen wird 比較せられる der ところの dem Mars 火星の auf 上に、höheren Lebewesen 高等なる生物の bei 許に於て nur のみ möglich sind 可能である wie sie 樣な Kanäle 運河 (複數) が zu sehen sind[3] 見られる daß 事を hat entdeckt 發見した。

【注】 5. の〔1〕 dieser は die Kirche の指示代名詞三格。——〔2〕 本書「文法講座文

例の註」15 參照。——6. の〔3〕 sein＋zu＋他動詞の不定法は受動に譯す。——〔4〕 wie sie に就ては第二卷文法 173.

7. Jenseit des Kanals liegt ein schöner Park, und unweit dieses Parkes steht das Schloß des Fürsten. 8. Seit dem großen Erdbeben ist diesseit des Flusses kein Haus gebaut worden.[1]

【譯】 7. des Kanals 運河の jenseits 向ふ側に ein schöner Park 一つの美しい公園が liegt ある (横はつてゐる)、und そして dieses Parkes この公園から unweit 遠くない處に(近くに) das Schloß des Fürsten 公爵の(殿樣の) お城が steht 立つてゐる。 8. dem großen Erdbeben 大地震 Seit 以來 kein Haus 一軒の家も (ない) des Flusses 河の diesseit こちら側には ist gebaut worden[1] 建てられなかつた。

【註】 8 の〔1〕 worden は受動の助動詞 werden の過去分詞。本動詞 werden (…に成る) の過去分詞は geworden.

9. Die große Kirche der Stadt steht trotz dem Krieg und Erdbeben noch ganz fest. 10. Mir gegenüber saß ein fremder Gast mit seiner Frau.

【譯】 9. der Stadt 町の Die große Kirche 大敎會は dem Kreig 戰爭 und 及び Erdbeben 地震 trotz にも拘はらず noch 尙 ganz fest 儼然として steht 立つてゐる。 10. Mir 私に gegenüber 向ひあつて、ein fremder Gast 一人の見知らない客が seiner Frau 彼の妻 mit と共に saß 坐つてゐた。

11. Dem Befehl des Fürsten entgegen drangen die Soldaten in die Stadt und innerhalb einer Stunde war alles geraubt, was von Wert war. 12. Ohne meine Hilfe hätte er sicher seinen Tod gefunden, denn er hatte keine Waffe bei sich.

【譯】 11. Dem Befehl des Fürsten 領主の命令に entgegen 背いて die Soldaten 兵士達は in die Stadt 町へ drangen 侵入した und そして einer

Stunde 一時間の innerhalb 內に von Wert war 價値のあつた was ところの alles 凡てのものが war geraubt 奪はれた。 12. meine Hilfe 私の助力が Ohne なければ er 彼は sicher 確かに seinen Tod 彼の死を hätte gefunden 見出したであらう、denn 何故なら er 彼は keine Waffe 何等の武器も (……ない) bei sich 手許に hatte 所有してゐなかつたから。

13. Er wollte niemand antreffen, deshalb machte er einen Umweg rings um die Stadt herum. 14. Haben Sie jemals den Mond durch ein Fernrohr betrachtet?

【譯】 13. Er 彼は niemand 誰にも (……ない) wollte antreffen 出會ふことを欲しなかつた。deshalb それ故 rings um die Stadt 町の周圍を herum ぐるりと einen Umweg 廻り路を machte した。 14. Sie 貴方は jemals 嘗て ein Fernrohr 望遠鏡を(に) durch 通じて(よつて) den Mond 月を Haben betrachtet? 觀察したことがあるか。

15. Wo hast du dein Buch gelassen? — Mein Buch liegt bei[1] mir im oberen Stock auf dem Zimmer des Vaters neben seinem Schreibtisch unter dem Stuhl. 16. Die Katze springt vom Boden auf den[2] Stuhl, vom Stuhl auf den Tisch, vom Tische zwischen zwei Blumentöpfe, von den Blumentöpfen neben das Bett herunter.[3]

【譯】 15. du 汝は dein Buch 汝の書物を Wo 何處に hast gelassen? 置いて來たか。——Mein Buch 私の書物は bei mir[1] 私の處の im oberen Stock 二階の(に於ける) des Vaters 父の auf dem Zimmer 室の內の neben seinem Schreibtische 彼の机の側の unter dem Stuhl 椅子の下に liegt 横はつてゐる。 16. Die Katze 猫は vom Boden 床から auf[2] den Stuhl 椅子の上へ、vom Stuhl 椅子から auf den Tisch 机の上へ、vom Tische 机から zwei Blumentöpfe 二個の花鉢の zwischen 間へ、von den Blumentöpfen 花鉢 (複) から neben das Bett 寢床の傍へ springt herunter[3] 跳び下りる。

【註】 15. の〔1〕 bei, im (in dem), auf 等の前置詞が三格支配である事に注意せよ。

——16. の〔2〕auf, zwischen, neben が四格支配であることに注意せよ。——〔3〕herunter は springen の前綴。この分離動詞の不定法は herunterspringen〔跳び下りる〕である。hinunterspringen〔跳び下りる〕との差は？（第二卷文法 145.）

17. Der Mond geht hinter dem Walde hervor und das Kind schaut zum Fenster hinaus. 18. Jedes Land ist stolz auf seine Eigentümlichkeit, das eine auf[1] seine Schönheit, das andere auf seine Bevölkerung.

〔譯〕17. Der Mond 月は hinter dem Walde 森の後から geht hervor 現はれ、und そして das Kind 子供は zum Fenster hinaus 窓から外を schaut 眺める。18. Jedes Land 各々の國は auf seine Eigentümlichkeit 己が特有性を ist stolz 誇る。das eine 一の國は（甲國は）auf[1] seine Schönheit その美を、他の國は（乙國は）auf seine Bevölkerung その人口を（誇る）。

〔註〕18. の〔1〕auf の前に ist stolz が略してある。而して stolz と云ふ形容詞は auf を「支配する」と謂ふ。

19. Japan ist ein Inselreich, darum ist es sehr reich an[1] kleineren Flüssen, aber sehr arm an größeren.[2] 20. Wer sich vor[3] den Leuten fürchtet, wird bald von ihrer Meinung abhängig.[4]

〔譯〕19. Japan 日本は ein Inselreich 島國で ist ある、darum それ故に es それは（日本は）an kleinern Flüssen 小さい川には ist sehr reich 非常に富んでゐる、aber が an größeren[1] 大なる川には sehr arm 非常に不足してゐる。20. vor[2] den Leuten 人々を sich fürchtet 恐れる Wer ところの人は bald すぐに（動もすれば）von ihrer Meinung 彼等の意見に wird abhängig 左右せられる事になる。

〔註〕19. の〔1〕an etwas reich, arm sein〔或物に富んでゐる、缺乏してゐる〕の意。——〔2〕größeren の次に Flüssen が省略せられてゐる。（同時に文法 221 參照）。——20. の〔3〕sich vor einem fürchten は〔人を恐れる〕の再歸動詞。——〔4〕von einem (etwas) abhängig は〔或人（或る物）に頼る、依存する、從屬する〕の意。

第二十課

話法助動詞の意味

einstürzen	崩壞する	gelegentlich	ちよいちよい
Christ, *m.*〔弱〕	基督教徒	ärztlich behandeln	醫療する
Zeitung, *f.*	新聞	hübsch	可愛い、綺麗な
bevor	……する前に	Rathaus, *n.*	市會議事堂
gewaltig	甚だしく	so etwas	左樣な事
Abreise, *f.*	出發	sich täuschen	思ひ違ひをする
Bibliothek, *f.*	藏書。圖書館	jederzeit	何時でも
Erlaubnis, *f.*	許可	benutzen	利用する
auffordern〔分離〕	督促する	arbeitsam, *a.*	勤勉なる

1. Ohne Stoff kann niemand einen Roman schreiben. 2. Deine Mutter kann sterben, wenn ihr dieser Arzt nicht helfen kann. 3. Ein Dichter kann einen Stoff nicht wissenschaftlich behandeln.

〔譯〕1. Ohne Stoff 材料なしでは niemand 誰だつて（……ない）einen Roman 小說を kann schreiben 書くことは出來ない。2. Deine Mutter 汝の母は wenn 若し dieser Arzt 此の醫者が ihr 彼女を（に）nicht helfen kann 助けることが出來ないなら、kann sterben 死ぬかも知れない。3. Ein Dichter 詩人は einen Stoff 材料を wissenschaftlich 科學的に kann nicht……behandeln 取扱ふことは出來ない。

4. Bei jedem schwächsten[1] Erdbeben kann unsere Kirche einstürzen. 5. Ich wußte schon, daß er ein schlechter Mensch war; daß er aber auch noch gelegentlich stehlen konnte, das hatte ich mir[2] nicht gedacht.

〔譯〕4. Bei jedem schwächsten[1] Erdbeben 如何なる微弱な地震の場合です

ら も、unsere Kirche 吾々の教會堂は kann einstürzen 崩壞するかも知れない。5. Ich 私は schon 既に、er 彼が ein schlechter Mensch 惡人で war ある daß ことは wußte 知つてゐた; aber 然し er 彼が auch noch 其上に gelegentlich ちよいちよい stehlen konnte 盜む事さへ仕兼ねなかつた daß といふ事は、das こいつは ich 私は hatte mir² nicht gedacht 考へたことがなかつた。

【註】 4. の〔1〕schwächsten は最上級であるから語意を强めるために、〔……さへも、すらも〕も附加して譯すがよい。——5. の〔2〕mir denken 卽ち不定形 sich denken は〔想像する、思ひ遣る〕の意 (文法第二卷 155)。

6. Jedermann darf in die Kirche gehen, wenn er auch kein Christ ist. 7. Niemand darf einen Kranken ärztlich behandeln, wenn er kein Arzt ist. 8. In Abwesenheit des Vaters darf keiner von den Bedienten in dessen Zimmer hineintreten.

【譯】 6. Jedermann 各人は、wenn auch たとへ er 彼が kein Christ ist 基督教徒でなくても、in die Kirche 教會へ darf gehen 行つて差支へない。7. Niemand 如何なる人も (……ない)、wenn 若し er 彼が kein Arzt ist 醫者でないなら、einen Kranken 病人を ärztlich behandeln 醫療することは darf (niemand と關係して) 許されない (出來ない)。8. des Vaters 父の In Abwesenheit 留守中に von den Bedienten 召使 (複數) の中の keiner 誰も (……ない) dessen 彼の (父の) in Zimmer 室へ darf hineintreten 入ることは許されない。

9. In Japan war vor kurzem eine starke Erderschütterung; du magst es in der Zeitung gelesen haben. 10. Die Zeitungen mögen berichten, was sie wollen, zu einem Kriege wird es doch nicht kommen.

【譯】 9. In Japan 日本に vor kurzem 先達て eine starke Erderschütterung 强い地震が war あつた; du 君は es それを in der Zeitung 新聞で gelesen haben 讀んだことで magst あらう。(玆では想像の意)。10. Die Zeitungen 諸新聞は、sie それ等が (諸新聞が) wollen 欲する was ことを mögen berichten 報道するかも知れない、(でも) zu einem Kriege 戰爭には es それは doch 矢張り wird nicht kommen 到らないであらう。

11. Wenn man zu müde ist, so mag man nichts essen, sondern nur schlafen. 12. Bei unserem Nachbar war eine hübsche Tochter, die mochte mich gern leiden. 13. Wer nicht will, kann nimmer. 14. Wer zum Fürsten hineingehen will, der warte¹ hier einen Augenblick.

【譯】 11. man 人が、(吾々が) zu müde 餘りに疲勞して ist ある Wenn 時、so その場合は man 人は nichts 何んにも (……ない) essen 食べることを mag 欲しない sondern で nur 單に schlafen 眠りたがる。12. Bei unserem Nachbar 吾々の隣人のところに eine hübsche Tochter 一人の綺麗な娘が war 居た。die 彼女は (娘は) mich 私を mochte gern leiden 好いてゐた。13. nicht will 欲しない Wer ところの人は nimmer 決して (ない) kann 出來ない。14. zum Fürsten 殿樣 (領主公爵) のところへ hineingehen 出かけようと will 欲する Wer ところの人、der その人は hier 此處で einen Augenblick 一寸の間 warte¹ 待て。

【註】 14. の〔1〕warte は三人稱に對する命令法 (文法本卷 207)。

15. Er will während des Krieges in Amerika gewesen sein und behauptet, er habe sich auch mit einer Amerikanerin verheiratet. 16. Du magst wissen, was du als ein ehrlicher Bürger in diesem Falle tun sollst.

【譯】 15. Er 彼は während des Krieges 戰爭中 in Amerika 米國に gewesen sein 居たと will 言ひ、und そして er 彼は auch 又 einer Amerikanerin 一米國婦人 mit と habe sich verheiratet 結婚したと behauptet 主張する。16. Du 汝は du 汝が ein ehrlicher Bürger 正直なる (善良なる) 市民 als として in diesem Falle この場合に was 何を tun sollst なすべきかを wissen 知つてる magst だらう (知つてゐる筈だ)

17. Wenn ich in die Schule gehen soll, so muß ich auch Schulgeld haben. 18. Nach dem, was meine Kameraden mir erzählt [haben], soll unser Fürst jenen Maler mit Rafael Santi verglichen haben.

【譯】 17. ich 私が in die Schule 學校へ gehen soll 行くべきである wenn なら、(行かせたいなら)、so それならば ich 私は auch やはり Schulgeld 授業料を muß haben 持たなければならない。 18. meine Kameraden 私の仲間達が mir 私に erzählt 〔haben〕 物語つた was ところの dem それに Nach よれば、unser Fürst 我々の公爵 (殿樣) は jenen Maler あの畫家を Rafael Santi ラフアエル・サンテイ mit と verglichen haben 比べたと soll いふことである。(と云ふ噂である)。

19. Warum gibt mir der Vater kein Geld? Soll ich vielleicht ein Bettler werden? oder sogar ein Dieb? 20. Ich muß Geld haben. Und das so bald wie möglich. Denn eine Schauspielerin soll mein Weib werden. 21. Er soll mir mein Weib zurückgeben oder sterben.

【譯】 19. Warum 何故 der Vater 父は mir 私に gibt kein Geld? 金を呉れないのか。ich 私は vielleicht 恐らく ein Bettler 乞食に werden なる Soll べきなのか、oder それとも sogar ein Dieb 泥棒にさへなるべきなのか。(なればいゝとでも思ふのか)。 20. Ich 私は Geld お金を muß haben 持たなければならない。Und das しかもそれは so bald wie möglich 出來るだけ早く。Denn 何故なら eine Schauspielerin 一女優が mein Weib werden 私の妻になる soll べきだから。(私の妻にしようと思つてゐるから)。 21. Er 彼は mir 私に mein Weib 私の妻を zurückgeben 返すか、oder それとも sterben 死ぬか soll しなければならない (返さなければ殺してやる)。

22. Wenn du zufällig meinen älteren Bruder antreffen solltest,[1]

so sage ihm, er solle schnell nach Hause kommen. 23. Das Gebäude, an dem[2] man jetzt baut, soll ein Rathaus werden.

【譯】 22. Wenn もし萬一 du 汝が zufällig 偶然にでも meinen älteren Bruder 私の兄 (私より年をとりたる兄弟) に antreffen solltest[1] お會ひになるやうでしたら、so そしたら、er 彼は schnell 至急に nach Hause kommen 歸宅するべきだと (歸宅せよと) ihm 彼に sage 言つて下さい。 23. jetzt 今 man 人々が an……baut 建築しつゝある dem[2] ところの Das Gebäude 建物は ein Rathaus 市會議事堂に werden なる soll 筈だ。

【註】 22. の (1) Wenn……solltest は 〔若し萬一……ならば〕 の假定を意味する。文法 246 の (6)。——23. の (2) an dem の dem は das Gebäude をうけた關係代名詞。an etwas (三格) bauen は 〔或物の建築に從事する、築きつゝある〕 の意。

24. Bevor du so etwas behauptest, mußt du es wissenschaftlich beweisen. 25. In diesem Falle ist es so, wie ich sage; in anderen Fällen muß es auch so sein, ich müßte mich denn[1] gewaltig täuschen.

【譯】 24. du 汝が so etwas 左樣な事を behauptest 主張する Bevor 前に、du 汝は es それを wissenschaftlich 科學的に mußt beweisen 證明しなければならない。 25. In diesem Falle 此の場合に於て、es それは ist so wie ich sage 私が言ふ通りです、in anderen Fällen 他の諸々の場合に於ても es それは auch 又 so その通りで muß sein あるに相違ありません denn それでなければ ich 私は gewaltig ひどい müßte mich täuschen 思ひ違ひをしてゐる事になるでせう。

【註】 25. の (1) denn については文法本卷 216 の (2)を見よ。

26. Da er sich ein so großes Haus bauen läßt, muß er schon ein sehr reicher Mann sein. 27. Vor seiner Abreise hat er mir sagen lassen, daß ich jederzeit seine Bibliothek benutzen darf.

【譯】 26. er 彼は sich 自分自身に ein so großes Haus あんな大きな家を bauen läßt 建築させる Da から、(彼は大層大きな家を建てるから) er 彼は schon もう ein sehr reicher Mann 大金持で muß sein あるに相違ない。 27. Vor seiner Abreise 彼の出發前に er 彼は mir 私に、ich 私が jederzeit 何時でも seine Bibliothek 彼の藏書を benutzen darf 利用して差支へない daß と mir 私に hat sagen lassen 告げさせた (言傳てした)。

28. Ohne Erlaubnis darf[1] keiner in meine Bibliothek. 29. Jetzt muß ich in die Stadt, meine Kameraden warten auf mich. 30. Wer nicht in den Krieg will, ist überall verachtet und lächerlich gemacht.[2]

【譯】 28. Ohne Erlaubnis 許可なくしては keiner 誰も (……ない) in meine Bibliothek 私の書庫へ darf 入るべからず。(入ることを禁ず)。 29. Jetzt 今 ich 私は muß in die Stadt 町へ行かなければならない、meine Kameraden 私の朋友達が warten auf mich 私を待つてゐる。 30. nicht in den Krieg will 戰爭へ行かうとしない Wer ところの人は überall 到る處で ist verachtet 輕蔑せられ、und そして (ist) lächerlich gemacht 嘲笑せられる。

【註】 28. の〔1〕dürfen, müssen, 及び wollen 等は次に來る方向を示す前置詞に依りて運動を表はす本動詞が省略せられる事がある。文法本卷 249.——30. の〔2〕lächerlich machen〔笑草にする、嘲弄する〕の意。

31. Meine Kinder sind so arbeitsam, daß ich sie nicht aufzufordern brauche, um sie arbeiten zu machen. 32. Dort am Meere steht ein kleines Landhaus, aber darin scheint niemand zu wohnen. 33. Eine Erscheinung, die die Gelehrten nicht wissenschaftlich zu erklären vermögen,[1] heißt[2] Wunder.

【譯】 31. Meine Kinder 私の子供達は arbeitsam 勤勉で sind ある so daß から、ich 私は sie 彼等を um arbeiten zu machen 勉强させるために sie 彼等を nicht aufzufordern brauche 督促するに及ばない。 32. Dort 彼處に am Meere

海に沿うて ein kleines Landhaus —軒の小さい別莊が steht 立つてゐる、aber が darin その家には niemand 誰も (……ない) zu wohnen 住んで居る scheint 樣子がない。 33. die Gelehrten 學者達が wissenschaftlich 科學的に nicht……zu erklären vermögen[1] 說明することの出來ない die ところの Eine Erscheinung 現象は Wunder 奇蹟と heißt[2] 稱せられる。

【註】 33. の〔1〕vermögen＋zu＋不定法は können＋不定法と同じ。——〔2〕heißt (不定法は heißen) は〔稱せられる。名づけられる〕の意で、次に來る名詞は一格である。

第二十一課

助動詞の用法

damit	……するために	begreifen	理解する、首肯する
deswegen	その故に、爲に	Hafen, *m.*	港
Wagen, *m.*	車、馬車	entgegenkommen	[分離] 迎へ近づく
einzig, *a.*	唯一の	überzeugt *a.*	確信せる
geschehen	出來する	lieber	むしろ
gestehen	白狀する	Geschichte, *f.*	歷史、話、一件
betteln	乞食する	längst	とつくに
hinterbringen	[非分] 密告する	Kerl, *m.* [fellow]	奴
bezahlen	支拂ふ	schmecken	味がする
abreisen	出發する		

nicht zu Worte kommen lassen 發言の機會を與へない
kaum (と過去完了) als ……するや否や

1. Das hättest du nicht tun sollen, wenn man nicht von dir eine schlechte Meinung haben soll. 2. Ich mußte tun, was ich eigentlich nicht hatte[1] tun wollen. 3. Ich habe mir ein neues Kleid machen lassen, damit ich zu deiner Hochzeit gehen kann.

【譯】 1. wenn 若し man 人が von dir 汝に就いて eine schlechte Meinung 悪い意見を nicht……haben soll 持つべきでないなら、(汝が悪く思はれたくないなら) du 汝は Das その事を hättest nicht tun sollen なすべきでなかつた。 2. Ich 私は ich 私が eigentlich 眞個に nicht hatte[1] tun wollen 爲たく思はなかつた was ことを mußte tun しなければならなかつた。 3. Ich 私は ich 私が zu deiner Hochzeit 汝の結婚式に gehen kann 行くことが出來る damit やうに、mir 私に ein neues Kleid 新しい着物を habe machen lassen 作らせた (着物を新調した)。

【註】 2. の (1) 副文章の動詞 hatte tun wollen の中の助動詞 hatte の位置に注意せられたし。文法 256.

4. Sie hat das, was er ihr gesagt,[1] gar nicht begreifen können. 5. Er hat seine Behauptung beweisen wollen, aber da er kein Gelehrter ist, hat er es nicht gekonnt.[2] 6. Er hätte es sicher tun können, wenn er es nur hätte tun wollen.

【譯】 4. Sie 彼女は er 彼が ihr 彼女に gesagt[1] 言つた was ところの das 事を gar 全然 hat nicht begreifen können 理解することが出來なかつた。 5. Er 彼は seine Behauptung 彼の主張を hat beweisen wollen 證明することを欲した、aber けれども er 彼は kein Gelehrter ist 學者ではない da から、er 彼は es それが hat nicht gekonnt[2] 出來なかつた。 6. Er 彼は、wenn 若し er 彼が es それを nur せめて hätte tun wollen なさうと思ひさへしたなら (思つたなら) es それを sicher 吃度 hätte tun können なすことが出來たであらうに。

【註】 4. の (1) 副文章中の完了形助動詞は屢々省略せられることがある。從つて此處では hatte が畧されてゐる。——5. の (2) gekonnt は本動詞である。

7. Er hat es gemußt, nicht gewollt; man braucht ihn nicht deswegen zu loben. 8. Ich habe es nicht nur gekonnt, sondern auch gedurft, aber nicht gewollt: das ist ein Beweis davon, daß ich ein Mann von Ehre bin.

【譯】 7. Er 彼は es それを hat gemußt しなければならなかつたのだ、nicht gewollt (だが) したくはなかつたのだ; man 人は deswegen それ故に ihn 彼を braucht nicht zu loben 賞讃するには及ばない。 8. Ich 私は es それを habe gekonnt なすことが出來た nicht nur, sondern auch のみならず又 (habe) gedurft して差支へなかつた、aber 然し (habe) nicht gewollt したくはなかつた; das それが ich 私が ein Mann von Ehre 名譽ある男子で bin である daß と云ふ事 davon それに就いての ist ein Beweis 證據である。

9. Als ich meinen Freund schreien hörte[1] und eiligst zu ihm lief, da war er schon gemordet [worden]. 10. Als ich nach meiner fünfjährigen Abwesenheit wieder in meiner Heimat war, da war mein jüngerer Bruder ein Offizier geworden.[2]

【譯】 9. ich 私は meinen Freund 私の友人が (を) schreien 叫ぶのを hörte[1] 聞いて、und そして eiligst 大急ぎで zu ihm 彼の處に lief 馳せつけた als とき、da その時には er 彼は schon 既に war gemordet [worden] 殺害されてゐた。 10. ich 私が nach meiner fünfjährigen Abwesenheit 私の五年間の不在の後に wieder 再び in meiner Heimat war 私の故郷へ行つた (於てあつた) als 時、da その時に mein jüngerer Bruder 私の弟は (私のより若き兄弟は) ein Offizier 士官に war geworden[2] なつてゐた。

【註】 9. の (1) hören は他の不定法を直接に支配出來る動詞、他にもあり。文法 252.——10 の (2) geworden は此處では本動詞、從つて一格の名詞 ein Offizier を客語とする。geworden が助動詞の時には前綴 ge- を失ふ。9. の [worden] は從つて受身の助動詞である。

11. Da ich ihn nicht habe in der Stadt treffen können, wandre ich hinaus[1] nach seinem Landhause. 12. Das war immer meine Meinung, aber da ich es dir noch niemals habe sagen können, so sage ich es dir bei dieser Gelegenheit.

【譯】 11. ich 私は ihn 彼に (を) in der Stadt 町で nicht habe treffen können 出會ふことが出來なかつた Da から、ich 私は nach seinem Landhause

彼の別莊に向つて、wandre hinaus[1] 出掛けて行く。 12. Das それは immer 常に meine Meinung 私の意見で war あつた、aber けれども ich 私は es それを dir 汝に noch niemals 未だ決して (……ない) habe sagen können 言ふことが出來なかつた da から、so それで ich 私は es それを dir 汝に bei dieser Gelegenheit 此の機會に際して sage 言ふのだ。

【註】 11. の〔1〕hinaus は分離動詞の前綴にして、wandre と一緒になる。分離動詞の前綴は本來ならば文章の最後に位置するのである。wandre の不定法は wandern で、一人稱に於て wandere とせず、語幹の e を省くことに注意せよ。

13. Die Regierung hat eigentlich nur bekannt machen[1] lassen wollen, daß es[2] am großen Hafen weitergebaut werden soll. 14. Wer war es, der dich Ski fahren lehrte? 15. Ich hörte einen Knaben auf der Straße singen und machte das Fenster auf.[3]

【譯】 13. Die Regierung 政府は、am (an dem) großen Hafen 大きな港が es[2] weitergebaut werden soll 引き續き築かれるべきである (築かうと思つてゐる) daß ことを eigentlich 實は nur 單に bekannt machen[1] 公けに (告示) hat lassen wollen せしめんと欲したのであつた (欲したに過ぎなかつた)。 14. dich 汝に (を) Ski fahren スキーをする (スキーで行く) のを lehrte 教へた der ところの es それは Wer war? 誰であつたか。 15. Ich 私は einen Knaben 一人の少年が (を) auf der Straße 往來で singen 唄を歌ふのを hörte 聞いた、und そして das Fenster 窓を machte auf[3] 開けた。

【註】 13. の〔1〕bekannt machen は「公示する、公けにする」の意。——〔2〕es は文法上の主語にして、無意味なのである。而して an etwas (weiter) bauen は「或物の建築に(引續き)從事する、或物を(引續き)作り、築きつゝある」の意で、(weiter) bauen は此處では自動詞である。自動詞を若し受働的に用ひるとすれば、主語として es を用ひるといふ文法上の約束があるので、それがために es なるものが現れたのである。例へば tanzen は「舞踏をする」と云ふ自動詞で、「今夜舞踏會がある」と云ふ文を普通に獨譯すると Man tanzt heute Abend. となるがこれを受働的に書き換へると Es wird heute Abend getanzt. である。——15. の〔3〕auf は分離動詞 aufmachen「開ける」の前綴。「閉める」は zumachen で矢張り分離動詞である。

16. Ich habe meinem kleinen Bruder,[1] der erst seit zwei Jahren in die Schule geht, einen Brief schreiben helfen müssen. 17. Ich wollte reden, aber er ließ mich nicht zu Worte kommen. 18. Kaum[2] hatte ich mich[3] von dem Stadttor entfernt, als ich einen Wagen mir entgegenkommen sah.

【譯】 16. Ich 私は erst 辛つと seit zwei Jahren 二年この方から (二年前から) in die Schule geht 學校に通つてゐる der 所の meinem kleinen Bruder[1] 私の小さい兄弟に einen Brief 手紙を schreiben 書くことを habe helfen müssen 手傳はねばならなかつた。 17. Ich 私は wollte reden 話さうと思つた、aber けれども er 彼は mich 私をして ließ nicht zu Worte kommen 言葉にまで來たらしめなかつた (私に發言の機會を與へなかつた)。 18. ich 私が von dem Stadttor 町の門から Kaum[2] hatte mich[3] entfernt, als 離れるや否や ich 私は einen Wagen 一臺の馬車が (を) mir entgegenkommen 私に迎へ近づく (私の方へ來る) のを sah 見た。

【註】 16. の〔1〕meinem kleinen Bruder が三格なのは、helfen が三格支配の自動詞であるがためである。——18. の〔2〕kaum は als と關係して「するや否や」となるのであるが、als 以下の文章から參考のために省略的に直譯して置かう。「私が馬車を見た時は、殆んど私は町の門からは離れてはゐなかつた」又は「私が馬車を見た時、私は町の門から辛つと離れてゐた」となる。——〔3〕mich は entfernt の再歸代名詞。sich entfernen は「去る、離れる」の意。

19. Wer nicht kann, wie er will, muß wollen, wie er kann. 20. Es ist nicht gut, daß man einen Besucher so lange warten läßt. 21. Lassen Sie mich erst erzählen, was ich heute in der Stadt gesehen habe.

【譯】 19. er 自分が wie will 欲する通りに nicht kann 出來ない Wer ところの人は、wie er kann 出來るだけ muß wollen 欲しなければならない。 20. man 人が einen Besucher 訪問者を so lange そんなに長く warten läßt 待たさせる daß こと es それは ist nicht gut 良い事

ではない。 21. Sie 貴方は ich 私が heute 今日 in der Stadt 町で gesehen habe 見た was 事柄を erst 先づ mich 私をして Lassen erzählen 物語らせて下さい (私に話させて下さい)。

22. Er will mich gestern beim Advokaten gesehen haben, aber er täuscht sich, gestern war ich den ganzen Tag zu Hause 23. Sie dürfen es nur meinem Diener sagen, so bin ich gleich da.

【譯】 22. Er 彼は mich 私を gestern 昨日 beim (—bei dem) Advokaten 辯護士の許で gesehen haben 見たと will 言ふ (主張する)、aber が er 彼は täuscht sich 思ひ違ひをしてゐる、gestern 昨日 ich 私は den ganzen Tag 全一日中 war zu Hause 宅にゐた。 23. Sie 貴方は es それを meinem Diener 私の召使に dürfen nur sagen 仰言りさへすれば宜しいのです、so さうすれば ich 私は gleich 早速 bin da 其處に居ります〔參上します〕。

24. Hätte[1] ich nur ein einziges Wörtchen mit ihm sprechen dürfen, so wäre das Unglück nicht geschehen![2] 25. Mochte[3] er es[4] wollen oder nicht, er mußte in die Schule. 26. Ich bin überzeugt, daß er es getan hat, er mag es gestehen oder nicht.

【譯】 24. ich 私が mit ihm 彼と nur ほんの ein einziges Wörtchen 唯一つの片言でも sprechen 話して Hätte[1] dürfen 差支へなかつたなら、so さうすれば das Unglück 不幸は wäre nicht geschehen[2] 出來しなかつたでせうに。 25. er 彼が、(es[4] それを) Mochte[3] wollen oder nicht 欲したにせよ欲しなかつたにせよ er 彼は in die Schule 學校へ mußte 行かねばならなかつた。 26. Ich 私は er 彼が es それを (したといふことを) mag gestehen oder nicht 白狀しようがしまいが、er 彼が es それを getan hat した daß といふことを bin überzeugt 確信してゐる。

【註】 24. の〔1〕Hätte の位置に wenn があるべきであるが、それが省略せられたから、dürfen の次にあるべき hätte が文の頭初に來たのである。——〔2〕geschehen は過去分詞にして不定法と同形。sein を助動詞とする自動詞なり。——25. の〔3〕は認容を表はす助動詞。 26. の mag もこれと同じ。例へば Er mag (Mag er) wollen oder nicht,

er muß は「否でも應でも、彼はしなければならない」となる。——〔4〕es は「學校に行くこと」を意味する。

27. Ich möchte gern wissen, ob Ihr Herr Vater zu Hause ist. 28. Ich möchte lieber sterben, als zu ihm betteln gehen. 29. Er bat, sie möchte ihm verzeihen, aber sie verzieh ihm nicht. 30. Er fürchtete, seine Schulkameraden möchte die Geschichte den Lehrern hinterbringen.

【譯】 27. Ich 私は、Ihr Herr Vater 貴方のお父樣が zu Hause ist 在宅してゐられる ob かどうか wissen 知り möchte gern たいんです。 28. Ich 私は zu ihm 彼の處に betteln gehen 乞食に行く als よりは、lieber むしろ möchte sterben 死んでしまひたい。 29. Er 彼は sie 彼女が ihm 彼を (に) möchte verzeihen 恕してくれるやうにと bat 願つた、aber が sie 彼女は ihm 彼を verzieh nicht 恕さなかつた。 30. Er 彼は、seine Schulkameraden 彼の學友達が die Geschichte 一件を den Lehrern 先生達に möchte hinterbringen 密告しはしないかと fürchtete 心配した。

31. Er hätte schon längst bezahlen sollen, wenn er ein ehrlicher Kerl wäre. 32. Sollte[1] er noch kommen, so sagen Sie ihm, daß er im Bahnhof auf mich[2] warten soll.

【譯】 31. wenn 若し er 彼が ein ehrlicher Kerl 誠意のある (正直な) 奴で wäre あるとすれば、schon 既に längst とつくに hätte bezahlen sollen 支拂ふべきであつたのだが。 32. er 彼が noch 尙も Sollte[1] kommen 萬一來るやうならso それならば Sie 貴方は er 彼が im Bahnhof 停車場に於て auf mich[2] 私を warten soll 待つやうにと (べきであると) ihm 彼に sagen 言つて下さい。

【註】 52. の〔1〕Sollte は、wenn を使ふ代りに、文初に來たのである。——〔2〕auf mich (einen) warten は「私を(或人を)待つ」の意。英語では to wait on は「供をする、給仕する」であるが、獨逸語では mich (einen) warten が「私の世話する、給仕をする」となる。

33. Er soll schon vor Wochen nach Paris oder London abgereist sein. 34. Heute abend will mir das Bier gar nicht schmecken, ich will lieber Wein trinken. 35. Daß er so spät nach Hause kommt, das will mir gar nicht gefallen.

【譯】 33. Er 彼は schon 既に vor Wochen 數週間前に nach Paris oder London 巴里か倫敦へ abgereist sein 出發したと soll 云ふことである（と云ふ噂である）。 34. Heute abend 今夕は mir 私に das Bier 麥酒が gar 全く will nicht schmecken（どうしても）味がない（旨くない）、ich 私は lieber むしろ Wein 葡萄酒を will trinken 飲みたい。 35. er 彼が so spät こんなに遲く nach Hause kommt 歸宅する Daß と云ふことは das その事は mir 私に gar 全く will nicht gefallen（どうしても）氣に入らない。

第二十二課

非人稱動詞

kühl, *a.*	涼しい	fließen	流れる
Regenschirm, *m.*	雨傘	mitnehmen [分]	携行する
Gegend, *f.*	地方	zum ersten Male	初めて
allmählich	段々	Gasse, *f.*	町、横町
rege, *a.*	活潑な、賑かな	herausstürzen [分]	飛び出す
Flasche, *f.*	罎	nicht umhin können	……せざるを得ず
traurig	悲しい	Botschaft, *f.*	知らせ
in 2 Monaten	二ケ月後に	zu Ende sein	終る
Erdstoß, *m.*	地震	reiten	騎行する
verschwinden	消える	lieblich, *a,*	可愛い
Mädchen, *n.*	少女	Haustür (e), *f.*	玄關の扉
sich nähern	近づく	sich auftun	開く

1. Die Luft ist kühl und es dunkelt, und ruhig fließt der Rhein. (Heine) 2. Wenn es regnet, so nimmt man einen Regenschirm

mit. 3. Gibt es eine Gegend auf der Erde, wo es niemals schneit? 4. Schon ist es Winter, und diese Nacht[1] hat es zum ersten Male gefroren

【譯】 1. Die Luft 空氣は ist kühl 冷たく und て es dunkelt 暗くなり（日は暮れてゆき）、und そして ruhig 靜かに der Rhein ライン河は fließt 流れてゐる（ハイネ）。 2. es regnet 雨が降る Wenn 時、so その場合には man 人々は einen Regenschirm 雨傘を nimmt mit 携行する。 3. niemals 決して（……ない）es schneit 雪が降らない wo ところの eine Gegend 地方が auf der Erde 地球上に Gibt es? 存在してゐるか。 4. Schon 既に ist es Winter 冬である、und そして diese Nacht[1] 昨夜 zum ersten Male 始めて hat es gefroren 氷が張つた。

【註】 4. の〔1〕diese Nacht には「昨夜」と「今夜」の二種の譯がある。若し時稱が過去を意味して居るときは前者の意味になり、現在又は未來なるときは後者の意となる。夜と云ふ言葉 Nacht を「暗い時」の意味に考へるからである。

5. Der Regen hat aufgehört, es hellt sich allmählich auf. 6. Wenn es zu dämmern beginnt, so wird es in allen Gassen rege. 7. Es brennt! schreien sie auf der Straße und alles[1] stürzt zur Tür heraus. 8. Wenn es dich dürstet, so kannst du aus dieser Flasche trinken.

【譯】 5. Der Regen 雨は hat aufgehört 止んだ、allmählich 段々 es hellt sich auf（天氣が）晴れる。 6. es zu dämmern beginnt 段々夜明になり始める Wenn と、so さうすると in allen Gassen どこの町々も wird es rege 賑かになる。 7. Es brennt! 火事だと sie 彼等は（人々は）auf der Straße 往來で schreien 叫ぶ、und そして alles[1] 凡ての人は zur Tür 戸口から stürzt heraus 飛び出す。 8. es dich dürstet 汝が喉が渴く Wenn 時、so その時には du 汝は aus dieser Flasche この罎から kannst trinken 飲むことが出來る（飲んでかまはない）。

【註】 7. の〔1〕alles は中性單數一格なれど、意味は複數で「凡ての人々」である。複數第一格 alle と同じ意味に用ひられる。

9. Mich hungert, aber es ist schon Nacht und ich kann nicht einmal[1] betteln gehen. 10. Es fror ihn, und die Nacht war so finster, daß er noch immer keinen Weg finden konnte. 11. Es träumte mir diese Nacht, ich hätte[2] einen reichen Onkel und der käme[3] aus Indien zurück.[4]

【譯】 9. Mich hungert 私は空腹ではある aber が、schon 既に es ist Nacht 夜である、und そして ich 私は betteln gehen 物乞ひに行くこと kann nicht einmal[1] すら出來ない。 10. Es fror ihn 彼は寒かつた、und そして die Nacht 夜は war finster 暗かつた so……daß から er 彼は noch immer 依然として keinen Weg 道を (……ない) finden konnte 見つけ出すことが出來なかつた。 11. diese Nacht 昨夜 Es träumte mir 私は夢を見た、ich 私が einen reichen Onkel 金持の叔父を hätte[1] 持つて、und そして der その人が aus Indien 印度から käme zurück 歸つて來るといふ。

【註】 9. の〔1〕nicht einmal は「すら……ない。」の强い否定副詞。——11. の〔2〕及び〔3〕夢は假想であるから接續法の動詞を用ひたのである。——〔4〕zurück は käme の前綴、zurückkommen「戻つて來る」の意。

12. Es tut mir wirklich leid, aber ich kann nicht umhin, Ihnen eine sehr traurige Botschaft zu bringen. 13. Wie geht es Ihnen? — Danke,[1] es geht mir wohl. 14. Ihr Onkel läßt fragen, ob es Ihnen wohl geht. Wie soll ich ihm antworten?

【譯】 12. wirklich 實に Es tut mir leid お氣の毒なことではあります、aber が ich 私は eine sehr traurige Botschaft 非常に悲しい知らせを Ihnen 貴方に zu bringen もたらすことを kann nicht umhin せざるを得ないのです。 13. Wie geht es Ihnen? それが貴方に如何に行くか (御機嫌如何ですか)、——Danke[1] 有難う、mir 私に wohl 良き es geht 狀態にある (私は達者です)。 14. Ihr Onkel 貴方の叔父さんは、es Ihnen wohl geht 貴方が達者である ob かどうかを (私に) läßt fragen 質ねさせる (お問合せです)。ich 私は ihm 彼に (叔父さんに) Wie soll ich antworten どう返事すべきですか (したらよろしいですか)。

【註】 13. の〔1〕Danke は Ich danke Ihnen の省略。普通は省畧形のみが使用せられる。

15. Es dünkt mich, ich hätte etwas vergessen, was ich nicht vergessen sollte. 16. Es[1] steht zu hoffen, daß der Krieg in zwei Monaten zu Ende sein wird. 17. Es steht zu fürchten, daß wir noch mehrere Erdstöße haben werden. 18. Wie steht es mit der Gesundheit Ihrer Kinder?

【譯】 15. ich 私は nicht vergessen sollte 忘れてはいけなかつた was ところの etwas 何かを hätte vergessen 忘れたやうに Es dünkt mich 私に (を) 思はれる。(何だかそんな氣がしてならない。) 16. der Krieg 戰爭は in zwei Monaten 二ケ月後に zu Ende sein wird 終局を告げるだらう daß といふことの es[1] それが steht zu hoffen 見込まれる (と云ふ見込がある)。 17. wir 吾々が noch 尙 mehrere Erdstöße 數回の地震を haben werden 持つであらう daß といふことの es それが steht zu fürchten 氣遣はれる (といふ虞がある)。 18. Ihrer Kinder 貴方のお子樣方の mit der Gesundheit 健康に關しては Wie どういふ steht.es? 狀態にあるか (御健康は如何ですか)。

【註】 16. の〔1〕es steht は非人稱動詞的用法であるが、es は daß 以下をうけて居るものと解することが出來る。es steht は es ist と同じである。

19. Es ist mir nur um eine Bewegung zu tun; ich habe kein Geschäft in der Stadt. 20. Der Frühling kommt und es singen die Vögel im Walde. 21. Es ritten drei Reiter zum Tore hinaus, und verschwanden bald im nahen Walde. 22. Es waren einmal zwei Nachbarn, der eine war reich, aber der andere sehr arm.

【譯】 19. mir 私には nur たゞ um eine Bewegung 運動 (のみ) が Es ist ……zu tun 目的だ; ich 私は in der Stadt 町に habe kein Geschäft 何んの用事もないんだ。 20. Der Frühling 春が kommt 來た und そして die Vögel 諸々の鳥は im Walde 森で es singen 歌ふ。 21. drei Reiter 三人の騎士が zum Tore 門から (hinaus と關係して) Es ritten hinaus 騎乘して出て行つた、und

そして bald 間もなく im nahen Walde 近くの森で verschwanden 消えた。22. einmal 昔 zwei Nachbarn 二人の隣人が Es waren あた、der eine 一人は war reich 金持であつた aber が der andere 他の一人は (war) sehr arm 大層貧しかつた。

23. Ich ging durch das Tor hinein,[1] und es kamen drei liebliche Mädchen mir entgegen.[2] 24. Kaum[3] hatte ich mich der Haustüre genähert, als diese sich auftat, und es trat daraus ein hübsches Mädchen mir entgegen.[4]

【譯】 23. Ich 私は durch das Tor 門を通つて ging hinein 入つて行つた und すると drei liebliche Mädchen 三人の可愛い少女が mir 私を (に) es kamen entgegen 迎へた。 24. ich 私が der Haustüre 玄關の扉に kaum hatte mich genähert, als 近づくや否や diese 後者が (扉が) sich auftat 開いた、und そして daraus それから (扉から) ein hübsches Mädches 一人の綺麗な少女が mir 私を (に) trat entgegen 迎へに出た。

【註】 23. の [1] hinein は分離動詞 hineingehen「入つて行く」の前綴。——[2] entgegen も entgegenkommen「迎へ來る」の前綴。——24. の [3] kaum (と過去完了)、als (と普通の過去) は「するや否や」。——4 entgegen は entgegentreten「迎へる」の前綴。

言は事なり

關口存男

太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。(ヨハネ傳第一章第一節)

先生 えー、例によつて其の所謂馬鹿の一つ覺え式で行きますが、要するに接續法と云ふのは日本語で「と」を附ける時に用ひる形式なんで、たとへば、彼女は彼女が私を愛する「と」主張する、その「愛すると」といふ定形が……

生徒甲 接續法の第一式になるんでせう？ わかりました。先生、今日は何かお話にして下さい。

先生 では何か例をとつてお話致しませう。たとへば Er sagt, daß ich……

生徒甲 (傍白) 駄目だ、此の調子ぢやあ。おい君、一寸何か質問して脱線させつちまつて呉れないか。

生徒乙 (低聲) よし來た。(高聲) 先生！ 接續法は獨逸人の國民性とどんな關係がありますか。

先生 何の關係もありません。

生徒乙 (甲に) おい、何の關係もねえとよ。

生徒甲 下手だね君は。ぢやあ僕がやつて見よう。(大きな聲で) 先生！ 先生！

先生 何ですか？

生徒甲 一寸質問があります。といふよりはむしろ緊急動議なんですがね。先生の所謂その系統的つて奴は、勿論結構は結構なんですが、あんまり

徹底し過ぎると、やはり多少單調になつてしまつて、遂には我々を眠り込ませる効果しかない事になつて來ますから、たまには、文法の進行と何の關係もない樣な話をして下さい。

先生　さうですか、では一つ何か面白いお話を致しませう……

生徒甲　（乙に）へん、どんなもんだい。

先生　……とでも云つたら嘸ぞ諸君は喜ぶでせう。これを稱して約束話法といふ。約束話法もしくは非現實話法です。形式は第二式接續法を用ひます。

生徒甲　（傍白）いけねえ！

先生　（聲色を勵まして）少し皆さんの反省を促しておきます。授業時間はたつた一時間ですよ。一時間の注意集中が出來ない樣な人はドイツ語なんか止めつちまつたが好い。そんな人は抑もメンタルテストの上で落第です。心理的に缺陷がある。榮養不良なんでせう。陰萎なんだ。一たいに現代人は精神的にイムポテント患者だ。トツカピンでも飲め！自己を鞭打つ事を知れ！勞働者の樣な食慾を持て！　智識慾といふものは、食道樂とは違ふ！　何か變つた美味いものは無いか……そんなのが智識慾ではない。山海の珍味を少しづゝ數多くちよいちよいと舐めて見たい……そんなお上品なのは智識慾ではない。大きなカツレツを五六枚食つて見たい！　これが智識慾だ！

生徒甲　（乙に）始まつたよ。

生徒乙　（點頭いて）始まつたね。

先生　これを要するにです。智識慾といふものと好奇心といふものとの間には非常な懸隔があります。Theodor Vischer といふ、十九世紀の批評家が Auch Einer〔これまた一匹の人間〕といふ奇著の中で、こんな事を云つてゐます。（黑板に書く）

生徒乙　もう完全に脫線しちやつたね。

生徒甲　立往生だね。僕の功績だよ。君は謂はゞ機關車の中へ飛び込んでブレーキをかけようとしたから失敗したんだ。僕は亂暴にも線路の眞中に立

ち塞がつたといふ譯だ。怒つても呶鳴つても、とめない譯には行かないからね。要領といふのは斯ういふ所にあるんだよ。要領よくやらうとしない事、これを稱して要領といふんだ。

先生　（黑板を指して）どうです、解りますか？

Für die Menschen gilt: je weniger Wißbegierde, desto mehr Neugierde.

凡そ人間は斯くの如し、智識慾なき者に限つて好奇心に富む。

けだし道破し得て妙なるものがあるですな。——勿論この譯は逐字譯ではありません。直譯すれば、für die Menschen〔人間に對して〕gilt〔通用す〕je weniger Wißbegierde〔智識慾少き程〕desto mehr Neugierde〔好奇心益々多し〕です。通用するといふ定形は、gelten から來てゐます。規則動詞だつたら geltet となる筈ですが、これは不規則動詞です。（第二卷文法 133 頁の下、及び卷末の不規則動詞一覽表參照）gilt には、一見主語がない樣に見えますが、je 以下全部の文章が主語となるのです。für etwas gelten〔或物に對して通用する〕といふのは、或物に對して斯々の事が云へる、眞である、といふ事です。それから、Wißbegierde と Neugierde とが形としてよく似てゐる所に注目して頂きたい。Begierde 又は Gier は、慾望といふ事です。だから一寸日本語では出ない語呂があるわけですね。

生徒　先生、ドイツ語には、一寸日本語に譯されない樣な字があるでせうね。

先生　ありますね。

生徒　そんなのは、實際はどういふ風にしてやつてゐるのですか？

先生　その場合場合で適當にやつてゐるといふの外はありませんね。けれども、其處にはおのづから方針といふものがあります。

生徒　その方針といふのは？

先生　其の方針といふのは、大體二つにわかれます。少し微妙な區別になりますが、一つは「解釋」の方を主にして、その譯語を聞いただけで大たい

意味がわかるやうにするといふ方針です。

生徒　それが當然だらうと思ひますが、それ以外の方針もあるのですか。

先生　あります。譯語だけでは一寸何の事だか解らないが、それが度々使はれるうちに段々とみんなにわかつて來る、と云つたやうな事をあてにしてやる譯語もあります。勿論そんなのは、第一の方針の方で行ける時にはやりません。どうしても譯語を作る事が出來ない時、たとへどんな譯語を持つて來ても原意にあてはまらない時、或ひは原語の意味が、あまりに常識的な日本語のためにゆがめられてしまふ虞れのある時等には、なまじつか解釋なぞはつけないで、まあ何だつて構はない、勝手な字を造つて、それを暴力的に流行らせてしまつた方が、かへつて結果が好いことがあります。

生徒　さうですかねえ。でも、そんなのを一般的にするには隨分骨が折れるでせうねえ。政府の力でも借りてやるのなら格別、個人の力では出來ない事ですね。

先生　ですから、それは學術用語に限られます。專門家の中でなら、たとへ原語の儘を使つたつて一向差し支へはないのですからね。

生徒　けれども、それがもし、思想の問題なぞに關係があつて、すぐ一般人にも興味があると云つたやうな際にはどうでせう。ドイツ語の原語を知つてゐる人は好いが、ドイツ語を知らない人々は、ずゐぶんつまらない事が急にわからなくて弱るわけですね。たとへば近頃の學者なぞの書くものは自分では大抵わかつてゐるのだらうが、少くとも私には絶對にわからない事が多々ありますね。彼等は、あんまりドイツ語なぞを讀みすぎて、ドイツ語の文章を日本語の單語で綴つてゐるのではないでせうか？

先生　多少さう云ふ點がありますね。けれども、自分でも本當にわかつてゐるのなら、なんとかして人にもわからせる事が出來る筈です。罪は彼等自身の智識が消化れてゐないと云ふ點にも多少あると見て好いでせう。——けれども、精神界の現象は、我々が此處で簡單に裁いてしまふにしては餘り

に複雜です。私自身にも經驗がありますが、實際表現法といふものはむつかしいものです。西洋人にはやはり西洋人らしい「考へ方」といふものがある。それに對する譯語が無いのはむしろ當然なんで、日本人には第一さういふ「考へ方」が無いと云ふ場合が澤山あります。獨逸語をやると云へば、それは單にドイツ人の使つてゐる言葉を習ふといふだけの努力ではない、其の他になほドイツ人の考へ方を學ぶ必要があるのです。一寸ドイツ人と會話をするといふだけでも、もう第一「言ひ現はし方」ばかりではなくて、何を云ふべきか、といふ、其の「何」の方がむしろ問題になつて來るのです。ましてや學術の方の問題になつて來れば益々さうです。文學藝術だつてさうです。話學が機緣になつて、我々の頭の中には、今までに無かつた思惟の形態が生じて來なければならないのです。佛教と漢文との間に存する不即不離の關係が直ちに以て語學と白哲人種文化との間の關係です。現在の日本語が段々と西洋化して變な具合になつてきたといふ事は事實です。學者の用語が固い直譯調になつて、新聞までがその影響を蒙り始めてゐる事は事實です。それは或ひは憤慨すべき事實ではありませう、けれども事實は事實です。事實は子供の如く無邪氣で、泣く兒と事實には勝たれぬといふ諺があります。

生徒　地頭ぢやありませんか？

先生　まあ大體同じやうなものです。

生徒　すると先生は、長いものには卷かれろ主義なんですね。

先生　いゝえ、さうぢやありません。長い物は卷いちまへと云ふ主義です。長い物なら、こつちから進んで卷いちまつた方が好い。

生徒　詭辯だなあ。

先生　いゝえ、詭辯ぢやありません。事實に負けるなと云ふのです。世の中を恨んだり、一般の傾向に憤慨したりするといふ事は、それは或種の意味に於て、社會に對する個人の敗北を意味します。負けたから恨むのです。勝つた人間なら「恕し」ます。それも澁々恕すのではなく、心から、笑つて、

磊落に恕します。恕したつて自己の方が事實の上に於て優越の地位にゐることを歇めない事を知つてゐるからです。優越感ほど寛大なものはありません。偉い人間ほどお人の好いものはない。強い男ほど無邪氣なものはない。太陽ほど可愛らしいものはない。獅子ほどほがらかなものはない。

生徒　わかりました。ところでそれがどうだと云ふのです。

先生　えーと、何の話をしてゐたのだつたつけ。

生徒　（傍白）好い風向きだね。（先生に）譯語の問題ですよ。

先生　さうださうだ、譯語の問題だ。要するに、原語と譯語との間には微妙な關係があつて、原語を以て譯語を虐待するのは偶にはよろしいが、譯語を以て原意を虐待するのは甚だよろしくない。だからたとへば近頃盛んに用ひられる哲學上の術語としての aufheben を、揚棄、揚止、止揚、なぞと、飛んでもない新造語で言ひ表はすといふのは、隨分亂棒な樣で、その實決してさうではない。流行らなければ失敗だが、流行ればそれで好いのです。

生徒　先生、揚棄といふのは一たい何の事です。

先生　さあ、それは一寸簡單には說明し難い。

生徒　ちやあ長つたらしくお願ひします。

先生　なんだか其の手に乘つたやうで氣持が惡いな。

生徒　其の手だと思はないで、親舟だと思つて安心して乘つて下さい。

先生　乘りかけた舟だから乘つちまはうか。

生徒　さうしませうよ。どうせ……

先生　何だつて？

生徒　で、その、揚棄といふのは？

先生　揚棄といふのは、隨分奇拔な樣だけれども、一理屈ある譯語なんです。本當にこれを譯した人の氣持になつて考へて見ればですね。aufheben！この一語の意味を說明するといふ事は、ドイツの哲學の啓蒙的な講義をするといふ事に略等しくなります。

生徒　結構ですね。大いにやつて下さい。

先生　凡そ精神科學といふものは凡てそんなものなんで、文字の解釋をするといふ事は事柄の解釋をするといふ事に一致する。術語がわかると云ふ事は事柄それ自身がわかるといふ事です。だから決して pebantisch だと思つてはいけません。

生徒　思ひません。前置きはまあ其の邊で澤山です。Zur Sache！

先生　では先づ例から始めませう。たとへば俗に「捕らぬ狸の皮算用」といふ諺がある。それに似た事が隨分多い。たとへばお金持の爺さんがあつてその爺さんに子供がない。するとその甥が、遺產は當然自分に來るものだと思つて、しきりに苦心をし始める。苦心といふのは、つまり遺產をどういふ風にして使つたものだらうと云ふ苦心です。ところが、六十の爺さんにも子が出來ることがある。子が出來たら、甥の苦心はあはれ槿花一朝の夢と化してしまふ。その場合、子供の出產が甥の苦心を aufheben したといふのです。つまり無用にしたといふ事です。「苦心が水の泡になつた」のとは少しちがひます。苦心の前提そのものが無くなつてしまつたのです。

また他の例を取りませう。二人の男が一人の女に戀をしてゐる。甲が小說中の主人公で、乙が仇役だとしてもよろしい。甲と乙とは元來親友なのだが、同じ一人の女を戀すると云ふ事によつて二人の間に異樣な緊張が生じてしまふ。女の方でも、二人に對して同樣な好意を持つてゐる。これを稱して何と云ひますか。

生徒　三角關係！

先生　さうです。これを稱して三角關係といふ。小說家が使ひ古した筋書です。ところが、小說では、解決といふものが來なくてはいけませんね。

生徒　さうしてゐると乙の方が自殺してしまふ。そこで甲と女とがめでたく結婚……ですか。

先生　そんな亂暴な解決があるものですか。三角關係といふのは、甲が乙

を愛すると同時に乙の方でも甲を愛し、二人の間に挿まつた女も兩方を愛する、要するにみんなが各々愛し合つてゐなければいけないのです。その中のどれか一邊が缺けてゐるのは眞の三角關係ではありません。乙が片づいたからと云つて甲と女とがすぐに結婚してしまふなんてのは、それはあんまり亂暴です。

生徒　亂暴ですかな。

先生　亂暴ですな。なるほどそんな場合もないではありません。乙が飛んでもない惡漢にでも書かれてあればですね。けれども私が今述べてゐる樣な場合で、しかも幸福に解決したいと思ふ時には、どうしたら好いでせう。

生徒　ぢやあ、甲も乙も、お互ひに遠慮して手を引きますか。

先生　でも女はどうします。

生徒　尼にでもしちやふんですな。

先生　それは可哀相だ。それでは讀者がおさまりません。なるほどそんな解決法もあるでせう。けれども、それでは私の云つてゐる happy end にはなりませんね。

生徒　先生はお甘いんですね。

先生　えゝもう極くお甘い方なんで。

生徒　先生ならどうします。

先生　私は別に問題ぢやありません。たとへば俗小說などではどういふ風にやるかといふのです。たとへば亞米利加物の映畫喜劇などではどうです。

生徒　通俗物は見ませんから知りません。

先生　そんな事を云つて威張つたつて駄目です。心得るべき事を一應心得た上でなら好いが。

生徒　普通ならどう云ふ風になります。

先生　何とかして乙を aufheben してしまひますね。

生徒　aufheben する？

先生　さうです。たとへば乙が其の女の兄さんだつたと云つたやうな事になりますね。

生徒　なあるほどね。

先生　隨分荒つぽい手かも知れないが、そんなのが一番效くのです。乙が實は女の兄であつた。女と乙との間の戀仲は自然に棄揚されてしまふ。從つて甲と乙との間の異狀な緊張も棄揚される。それどころか、戀の仇が義兄義弟の關係になる。女は甲をも乙をも心から愛する事が出來る。しかも大つぴらに。めでたしめでたし。どうです。

生徒　俗ですな。

先生　多少ね。しかし棄揚の意味はわかつたでせう。

生徒　えゝ、何だか斯うぼんやりと、解つたやうでもあり解らないやうでもあり。

先生　これが棄揚、揚棄、揚止、止揚の第一の意味です。その次には第二の意味が生じます。

生徒　まだその他に意味があるのですか。

先生　さうです。これからが愈々哲學上の用語と關係が生ずる範圍の意味です。今までに述べたのは、謂はば aufheben の消極的な意味なので、これを定義するとすれば、たとへば A なら A といふ現象を、その存在の基礎をなしてゐる、もしくは前提となつてゐる事柄 B を取り去る事に依つて、自然に消滅させる事を意味します。理屈上で無くしてしまふのです。これを論理的揚棄、または次に述べる生の現象としての揚棄に對して「機械的揚棄」と名づけても好いでせう。

生徒　大分むつかしくなりましたね。

先生　これからが大事です。よう御座んすか？　誰です、其處で欠伸をしてゐるのは！

隅つこの生徒　どうも相すみません。

先生　これからが大切です。第二の意味、即ち生の現象としての aufheben がわかれば、それだけでももうドイツ哲學の最近の問題の重要なる一部分に對して興味が生じます。興味が生ずるといふことは三分通りわかつたと云ふことです。もつとも殘りの七分が仲々並大抵ぢやありませんがね。

生徒　前置きはわかりました。それで？

先生　こんどは定義の方を先に言つて置きませう。今までに述べた機械的棄揚といふのは、時間的に前後の關係はありませんでした。B なるが「故」に A であつた。B が消滅する。すると B の消滅がA の消滅を惹起する、もしくは A を棄揚する、といふわけで、それは同時といへば同時であり、時間關係に非ずして論理關係だと云へば、それでも好いでせう。こんどは時間關係が這入つてきます。時間關係が這入つて來る現象は、自然科學界に於ては「變化」、精神科學界に於ては「生」です。(生物學は生を對象にするではないかとの疑問が生じさうですが、さうではありません、生物學は、變化を對象とする上に於てのみ自然科學であつて、生についての何等かの考へを抱くとなれば、それはもう精神科學です。Bergson も Freud も精神科學者です。)

わかり易い例を取りませう。たとへば玆に智的犯罪の本能が旺盛に働く天才的不良少年があるとしませう。父親は何とかしてその少年を救ひたい。その少年の行動を束縛したりお説法を試みたりするといふのは最もまづい方法です。それは前述の三角關係の場合に、乙なる人間を殺してしまはうといふに等しい。——では機械的棄揚の方法があるでせうか？　どうでせう？

生徒　さうですねえ。頭でもぶん殴つて低能兒にしてしまへば、智的犯罪は棄揚されますね。

先生　それはあんまり機械的すぎますね。

生徒　それとも何か其の少年の興味を惹く樣な他の仕事をさせてはどうです。

先生　さう、それで方向轉換が出來れば理想的な機械的棄揚ですね。しかしさうは行かないでせう。

生徒　どうしたら好いでせうねえ。

先生　何か奇拔な方法はありませんか。

生徒　さうだ！　一そ其の少年を刑事の助手にでもして、さういふ方面へうんと進出させたらどんなものでせう。

先生　それです。棄揚は其處まで行かなくてはなりません。起用といふのが玆から起つたんですな。

生徒　本當ですか？

先生　嘘ですよ。——要するに棄揚といふ第二の意味がこれから生じてくるのです。いくら好きな道でも、それが自分の道樂となれば、道樂そのものが追々と變つて來ます。さう始めに考へてゐた程面白いものでもないと云ふ事もわかつて來るでせうし、それが機緣となつて其の他別種な關心も生じて來るでせうし、その外まあ、最初の豫定や期待には全然這入つてゐなかつた樣な事柄が澤山這入り込んできて、しばらく經つて自分を反省して見ると、何のためにこんな事を始めたのか、ほとんど自分でも思ひ出せないやうな事になつて來るでせう。こゝが人生の面白い所です。

もつと極端な例を取ると、こんな事もあるでせう。玆に一人の、人生に對する執着の人一倍はげしい人間がゐるとします。なんとかして自分の一生を延したい。現代の醫術の提供する限りのあらゆる手段を講じて、それでもまだ安心できない。遂には精神療法に夢中になる。宗教にたよる。結局は自分の氣持の持ち方だといふ事になる。其處で彼は哲學を究める。——そして十年たつ。十年たつた後の彼はどうなつたか？　彼は、もはや全然生に執着を感じない。今といふ今死んでも好いだけの覺悟が出來てしまつゐる。つまりそれが最も安心な方法だと云ふ事になつてしまつたからです。——生の執着が徹底すると生の解脱となる……

換言すれば、彼の生に對する執着は、決して他の別なものによつて救はれたのではない、生の執着が、おのれ自身の方向を徹底的に辿ることによつておのれ自身の進展のために己れ自身によつて棄揚されてしまつたのです。これが卽ち生の現象としての棄揚です。

之を要するに、世の中の事は、殊に精神界の事柄は、凡て此の生の現象としての棄揚とい形式を取つて進んで行きます。だから、たとへば心理現象、卽ち關心、興味、感激、恨、憎惡、愛、その他凡そ人間の腦裡に生ずる凡ての現象、それから社會現象、たとへば思想、流行、風俗、宗教、國體、その他の重要な事柄は、すべて、それ自身の中に、われと自からを棄揚すべき筈の因果を含んでゐるのです。Hegel の歷史哲學の啓蒙的な一面は、要するにかうした觀方を徹底的に人間の精神界にあてはめて系統をつけたといふ點に存するので、かうした物の觀方は今日と雖もなほ哲學界の常識をなして居り、この觀方を知らないと、ドイツの哲學書、殊に社會科學等に關する事柄はわかりません。

なほ蛇足として一つの例をつけ加へると、たとへば哲學者は、眞理に段階がある、といふ事を云ひます。または階級、位階と云つても好いでせう。Hierarchie der Wahrheiten (眞理の位階) です。

どういふ事かと云ふに、たとへば玆に一つのコップがあります。その中へ水を五分目程入れて、一本の眞直ぐな針金をさし込みます。するとそれは勿論曲つて見えるでせう。ところでその次です。こんどは本當にさう云ふ風に曲げた針金をさし込んで、その曲つた個所まで水を入れておく。そして大人と小供とを呼んで、どうです、あの針金は眞すぐですか、曲つてゐますか、と訊いて見る。すると大人は「眞すぐです！」といふ。小供は「曲つてゐます！」といふ。

小兒の方が中りました。小兒の云つたことが本當です。けれども、眞理の位階の上から云へば、大人の間違つた返事の方が小兒の正しい返事よりも

一段階上なんです。

眞理には筋道があります。小兒の正しい返事は、正しいからと云つてそれでいゝと云つて放つて置いてはいけない。先づ理屈と事實とを敎へて、せめて大人のやうな考へ違ひが出來るやうになるやうにしてやらなければならない。

棄揚といふ術語を使つて云ふと、大人の誤は一回の啓發によつて棄揚されます。小供の正しい答は、めんどうだが、二回の棄揚によつてもう一度正しく直してやらなければならない。眞理には段階がある。同じ眞理にも位の違つたのがあり、反對の立場にもほんの一階梯の相違のがあり得る。

これは論理的棄揚の例ですが、生の現象の棄揚で同樣な例をあげるとなると、これはもうとても澤山な面白い場合があつて、要するに學者間の論爭や思想上の問題に關する檢討には、かうした現象が複雜に入り組み合つて、そしてお互ひに話がわからなくなつてゐるのが現在の社會だと思へば間違ひないでせう。

生徒　ぼやぼやつとして、眼が昏みさうになりますね。

先生　大體わかりましたか。

生徒　棄揚といふ術語の意味だけは大體わかつたやうな氣がします。ところで一寸、氣になるから伺ひますが aufheben といふ字そのものは一たいどういふ事なんです。それから、その譯語の、棄てるとか、揚げるとかいふのはつまりどういふ譯でそんな事にしたのです。

先生　さうだ、それを始めに云はうと思つてすつかり忘れてゐました。けれども本當は今から云つて始めてわかる譯でせうね。auf- といふのは、aufhören [止める] とか auflösen [解決する] とか auftauen [とけてなくなる] とか云つた樣な時の auf- で、最初は「開く」といふ意味だつたのが、aufgehen [割り切れる、殘りなく片づく、ほどける] 等でもわかる通り、とにかく何か困難だつた點が「開」いて、同時にポーツと消えてしまふ、といふ意味の前

綴になつたのです。heben といふのは、元來は「上げる」ことで、從つて「持ち上げ」て「取り去る」ことになつたのです。單に heben のみでも「やめる」ことに用ひます。それはもうギリシヤ語の昔からさうだつたので、[ἄιρω＝揚げる、滅ぼす] 現代語の用法にも、たとへばフランス語の la séance est levée [會議終了す、解散、散會] (會議は揚げ去られた) 等、それからドイツ語の中でも、相殺する、差引勘定零になる、と云つたやうな時には sich heben といふ相互再歸動詞を用ひます。—— aufheben は、つまり持ち上げて消す、あがつたりにしてしまふ、立ち消えにしてしまふ、といふ事ですね。今までのところ或ひは揚止（揚げ止める）或ひは止揚、或ひは揚棄、棄揚なぞといろいろに言つてゐます。近頃の日本人の書く哲學書は私も讀む機會がありませんから、どれが一番流行つてるかは知りません。或ひは止揚が一番普通かとも思ひます。

生徒　なるほどねえ。伺つて見ると隨分面白い言葉ですねえ。いろんな機會に振り廻して見たくなりますねえ。

先生　なるでせう？　さう云ふ風になると、さうするとこんどは、別に改めてヘーゲルの著書を讀むに至らないうちに、段々とさうした物の考へ方が出來てきます。單なる術語だと云つて、決して馬鹿になりません。言葉は直ちに以て思想です。獨逸語は直ちに以て獨逸人の考へ方です。

生徒　他にまだそんな面白いことが澤山ありますか？

先生　ありますともありますとも。たくさんあります。けれども、そんな事を一々詮議立てして一語について一時間費やしてゐたのでは、到底短時日の間に獨逸人の精神文化の眞只中に飛び込む事はできません。

生徒　そのためには一たいどうしたら好いでせう。

先生　讀むんですね。讀めるやうになるんですね。いや、讀めるやうに「なる」なんてそんな馬鹿な話はない。讀めるやうに「してしまふ」のです。暴力手段に訴へて。獨逸語なんてものは、そんなに合理的に順序正しくやつて

ゐたのでは、決して進歩しません。初步がすんだら、あとは暴力手段に訴へる事です。理屈に合はない、どう考へたつて出來る筈のない手段で行くのが一番です。たとへば、何でも好い、對譯書でも、飜譯でも、少し自信のある人は原書で、少々わからん事があつたつて何だつて構はない、ぐんぐんぐんぐん一日に五十頁百頁ぐらゐよめるまでは、一日も缺かさずかぢりつくのです。初めは勿論さうは行かないでせう。一日に四五頁でよろしい。但しあんまり段ちがひの書物を選んではいけません。うんと易いもの、たとへば、學校用の教科書なぞを、辭書と首つ引きで、その代り、話なれば話の筋だけわかれば澤山です。とにかく讀んで讀んで讀み拔くのです。さうしてついた力はおのづからちがひます。

生徒　辭書と首つ引きは大抵澤山ですねえ。

先生　ぢやあ語學はおやめなさい。切におすゝめします。語學といふのは辭書の事です。それ以外になんにも要りません。あなたは見臺といふものを知つてゐますか？

生徒　書物を置く見臺でせう？

先生　それが抑々の間違ひです。見臺といふものは書物を置いてよむためのものではない。見臺といふのは、ドイツ語の辭書を置くためのものです。

生徒　へーえ。

先生　辭書を開いて見臺におく。それからその前に本を開いて机の上におく。そして本で引きながら辭書を讀むのです。

生徒　辭書を引きながら本を讀むのではありませんか？

先生　いゝや、本を引きながら辭書を讀むのです。その反對ではありません。

生徒　（傍白）　此の先生說線しすぎて氣が狂つたかな。

先生　本を讀みながら「傍ら」辭書を引いたりなんぞするから駄目なんです。辭書を引くのが主で、本をよむのは副です。辭書を引きながら、その合

間合間に書物を讀むのです。だから、書物を眼の下に置いて、少し横の方に辭書を置いて置くなんてのは其の罪死に値する。辭書は必ず見臺の上において、つまり鼻の先において、いつでもめくれるやうにしておく。要すればそれに指を掛けたまゝ書物をよむ。さうだ。指はしよつちゆう辭書に掛かつてゐなければいけない。かういふ事は內務省令として發布して警察に取締らせる必要がある。要すれば警官の增員をしてもよろしい。辭書に手が掛かつてゐなかつたり、殊に辭書を脇の方へ置いて讀んでゐたりするのが居たら、直ちに本署へ同行を命ずる。そして懇々と說諭の上、改悛の狀顯著なる者のみに對して一應歸宅を許すといふ事にすると好い。

生徒 先生暴動が起りますよ。

先生 暴動が起つたら直ちに軍隊が出動して鎭壓します。

生徒 少し無茶だなあ、先生の主義は。

先生 勿論無茶です。無茶だからこそお信じなさいといふのです。本當の眞理は多少無茶なところがあります。常識で納得できるやうな眞理は、それは人間が自分に都合の好いやうに贋造した御用眞理です。そんな眞理は元來不用です。我々には「動く」眞理が必要なんです。「動かす」眞理が必要なんです。理性を以てではなく「意志」と「決心」と「感情」とを以て肯定し得るやうな眞理が必要なんです。それが證據に我々の人生をごらんなさい。誰か「合理的な眞理」で動いてゐる人間が一人だつてゐますか？　最も合理的な對象を取り扱ふ數學者を御覽なさい。數學者は「數」でもなければ「學」でもありません、「者」です。人間です。數學者をして數學せしめる所の力は理性ではありません。それは意志です、決心です、感情です――――言にして云へば本能です！　私は諸君の本能に訴へてゐるのです。

生徒甲 （乙に） おい君、少し脫線させ過ぎたやうだね。此の調子で行つて、鐘が鳴つてから十分も二十分も延ばされた日には堪らないから、もう好い加減に逆のブレーキを掛けようぢやないか。

生徒乙 よからう。（高聲） 先生！　もうぢき鐘が鳴りますから、そろそろ此の邊で結論にして下さい。

先生 結論？　さあ……結論と云つて別に何もないが……

生徒乙 大ぶ色んな事を仰言つたやうですが、要するに、今日は一たい何の話をなすつたのです。

先生 さうですね……それはまあ、後でよく考へて見ないとはつきりした事は云へないが、とにかく……logos の話をしたのですよ。

生徒甲 logos といふのは？

先生 これを云ひ出すとまた長くなるから止しませう。要するに logos といふのは、ギリシヤ語で「言葉、理屈、筋道、考、文化、文」といつたやうな意味なんです。日本語でも、言葉の「言」[こと] と、事柄の「事」[こと] とが相通じてゐる。言 [こと] は 事 [こと] なり、全人を傾倒すべし、とでも云へば好いでせう。私はつまり語學といふものに、肉を盛り、血を通はせたいのです。過去分詞とか定形とか主語とか接續法とか云つたやうなものゝ背後にどんな生々しいものがむくむくと動いてゐるかを述べたかつたのです。初步の文法なんてものは、大てい斯うした概念的な理屈のために凹たれるものですが、そんな事のために凹たれて貰ひたくなかつたのです。ドイツ人の學者が中世以來ラテン語やギリシヤ語の厄介な厄介な文法にかぢりついて、そしてそれに落伍しなかつた人たちが十八世紀後半以後の、世界に冠絕するドイツ精神文化を築き上げたやうに、諸君も諸君の努力に於て斷然けつをまくつて居直つて貰ひたかつたのです。全人を傾倒して貰ひたかつたのです。過去分詞に、不定法に、接續法に！

術語！　それはつまり私の云ふ「言」は「事」なりです。術語に負けるな！　長いものは卷いてしまへ！　嶮しい坂は駈け上れ！　腦味噌をマツサージせよ！　言は事なり、全人を傾倒せよ！――半年たつて御らんなさい、決して損はありません。文法は歐洲精神文化に通ずる第一步です。二三哩の坂です。

平地なら呑氣に歩いてゐてもよろしい、坂なればこそ駈け上る方が樂なんです。血相かへて、恐しい鼻息で駈け上るのです。さうすると、半年後には、少しあき足らぬほど短かい坂だつた事た氣がつきます。どうです、わかりましたか？

皆　わかりました！

先生　では脱線はこれで終り。次は本問題にかへつて接續法のつづきを話します……(鐘が鳴る)

皆　(笑ふ)

—— 幕 ——

文法講座目次

第三卷

第二十六講　接續法とは何ぞや？

頁
199. 「法」とは何ぞや？… … … … … … … … … … … … 205
200. 三つの名稱（接續法、可能法、間接法） … … … … … … … 206
201. 結論 … … … … … … … … … … … … … … … … 207

第二十七講　接續法の人稱變化

202. 接續法に二種ある事 … … … … … … … … … … … 209
203. 第一式と第二式との間には時稱上の區別なし。ともに現在なり … 210
204. 第一式接續法の人稱變化 … … … … … … … … … … 211
205. 第二式接續法の人稱變化 … … … … … … … … … … 212
206. 第二式接續法の異例 … … … … … … … … … … … 214
207. 英語との形態學的比較研究 … … … … … … … … … … 215
208. 接續法の過去 … … … … … … … … … … … … … 216

第二十八講　第一式接續法の用ひ方

209. 第一式接續法の命令法的用方 … … … … … … … … … 219
210. 第一式接續法の間接話法的用方 … … … … … … … … … 222

第二十九講　第二接續法の用ひ方

211. 疑惑の意を含ませた引用 … … … … … … … … … … 226
212. 若し……だとしたら嘸……であらうに。（約束法的語法） … … 227

頁

213. 約束法的語法は、必ず假定と其の假定より生ずる架空的結論との二部分より成立す … … … … … … … … … … … 229
214. 約束法的語法の構文 … … … … … … … … … … … 230
215. 前提部のみの獨立用法 (wäre ich reich!) … … … … … … … 232
216. 結論部、所謂約束法のみの獨立用法 (ich täte es gern.)… … … 233
217. 恰も……であるかの如く。(als ob, etc.) … … … … … … … 235
218. 助動詞の第二式接續法は、各々獨立した一つの動詞として覺える事… … … … … … … … … … … … … … … 237

第三十講　形容詞の比較級最高級

219. 附加語と客語 … … … … … … … … … … … … … 241
220. 附加語的形容詞の比較級最高級 … … … … … … … … … 241
221. 不規則なる比較級最高級 … … … … … … … … … … 243
222. 比較級の附加語的用法 … … … … … … … … … … … 243
223. 絶對比較級 … … … … … … … … … … … … … 244
224. 最高級の附加語的用法 … … … … … … … … … … … 245
225. 比較級の客語的用法 … … … … … … … … … … … 246
226. 最高級の客語的用法 … … … … … … … … … … … 249
227. 副詞の最高級 … … … … … … … … … … … … … 250
228. 凝結した副詞の最高級 … … … … … … … … … … … 251
229. 限度を示す副詞 … … … … … … … … … … … … 253
230. 出來るだけ…… (so……wie möglich.)… … … … … … … … 254

第三十一講　前置詞(及び後置詞)

231. 前置詞の格支配 … … … … … … … … … … … … 255
232. 二格支配の前置詞 … … … … … … … … … … … … 256
233. 三格支配の前置詞 … … … … … … … … … … … … 258
234. 四格支配の前置詞 … … … … … … … … … … … … 260

頁

235. 稀な前置詞 … … … … … … … … … … … … … 261
236. 三格四格支配の前置詞 … … … … … … … … … … … 262
237. 前置詞の抽象的意味 … … … … … … … … … … … 265
238. 前置句なるものあり … … … … … … … … … … … 266
239. 前置詞使用上の細則 … … … … … … … … … … … 266
240. 前置詞が後に曳く追加詞 … … … … … … … … … … 271
241. 前置詞と指示詞、疑問詞、關係代名詞との結合 (womit, damit 等) 273
242. 動詞、形容詞等の前置詞支配 … … … … … … … … … 274
243. als と wie … … … … … … … … … … … … … 276
244. 熟語に關する重要な注意 … … … … … … … … … … 276

第三十二講　話法の助動詞(意味)

245. können … … … … … … … … … … … … … … 277
246. dürfen … … … … … … … … … … … … … … 278
247. mögen … … … … … … … … … … … … … … 279
248. wollen … … … … … … … … … … … … … … 281
249. sollen… … … … … … … … … … … … … … 283
250. müssen … … … … … … … … … … … … … … 286
251. lassen … … … … … … … … … … … … … … 287
252. 話法の助動詞と gehen 等の省略… … … … … … … … … 289
253. 助動的な動詞 … … … … … … … … … … … … … 289

第三十三講　助動詞の用法(形式)

254. zu の問題 … … … … … … … … … … … … … 294
255. Ich sehe ihn kommen. … … … … … … … … … … … 294
256. Ich habe es nicht verstehen können. … … … … … … … 296
257. Ich habe es nicht gekonnt. … … … … … … … … … 299
258. werden の二つの過去分詞 … … … … … … … … … … 299

頁
259. 定形後置の變則 (1) … … … … … … … … … … … 300
260. 定形後置の變則 (2) … … … … … … … … … … … 301
261. 動詞群の語順に關する一般的法則 (1) … … … … … … … 301
262. 動詞群の語順に關する一般的法則 (2) (黄金截の法則) … … 303
263. Wenn die Regierung hat bekannt machen lassen wollen, daß… … 306

第三十四講　非人稱動詞

264. 非人稱動詞とは？… … … … … … … … … … … … 307
265. 非人稱主語 es … … … … … … … … … … … … 307
266. 元來の非人稱動詞と普通動詞の非人稱的用法… … … … … … 308
267. 元來の非人稱動詞 (1) 天候氣象に關するもの … … … … … 309
268. 元來の非人稱動詞 (2) 氣持に關するもの … … … … … … 310
269. 非人稱動詞の心理的根據 … … … … … … … … … … 312
270. 普通動詞の非人稱化 … … … … … … … … … … … 314
271. 非人稱の熟語… … … … … … … … … … … … … 315
272. es gibt … … … … … … … … … … … … … … 316
273. 文章の非人稱化 … … … … … … … … … … … … 317
274. 主語と客語より成る文章の非人稱化… … … … … … … … 318
275. 自動詞の非人稱化 (es schläft sich gut) … … … … … … … 320
276. 非人稱の受働形 … … … … … … … … … … … … 320
277. 非人稱主語 es の省略… … … … … … … … … … … 321
278. 有形無意の es の四格… … … … … … … … … … … 322
279. 關係代名詞を受ける不定指示詞の es (ich bin es, der……)… … 322
280. 名詞以外の詞をも指す不定指示代名詞 es … … … … … … 323